

発行 能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 36393

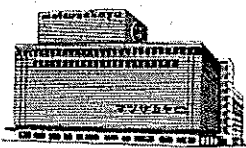
購読料 1年 700円

郵送の場合 1年 1000円

一部 70円

題字は熱田神宮 権田宮司筆

楽しいお買い物はマツザカヤ



能楽の友

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

[1月]

- 3日(木) 能楽協会名古屋支部開初式 (関係者のみ)
- 6日(日) 青陽会定期能 (有料)
- 7日(月) 学生能と狂言の会 (来場歓迎)
- 15日(祝) 清韻会大会 (来場歓迎) (番組③面)
- 20日(日) 熱田紳士能 (来場歓迎) (番組③面)

[2月]

- 3日(日) 宝生会定式能 (有料) (番組③面)
- 10日(日) 観世会定式能 (有料) (番組④面)
- 12日(火) 西陵高校能楽鑑賞会 (関係者のみ)
- 16日(土) 観世九事会定期能 (有料) (番組④面)
- 17日(日) 邦謡会記念能 (有料) (番組④面)

[3月]

- 2日(日) 青陽会定期能 (有料)
- 9日(日) 梅嶺会 (有料)
- 16日(日) 大蔵狂言会 (来場歓迎)
- 22日(土) 観世会土曜定式能 (有料)
- 23日(日) 草楽会大会 (来場歓迎)

[4月]

- 5日(土) 藤田昭彦後援会能 (有料)
- 13日(日) 観世会定式能 (有料)
- 20日(日) 久田観正大会 (来場歓迎)
- 27日(日) 鳳鳴会大会 (来場歓迎)
- 29日(祝) 幸友会春の会 (来場歓迎)

(演能変更の節はご了解下さい)

80年代を迎えて

求められる「質」の充実

文化の時代に生きる

新玉の昭和五十五年、激動と波乱の七十年代をおくり、政治、経済、社会の大きな変化を背景に、能楽界も新たな年への希望に明けました。

さまざまな角度から論ぜられる八十年代への提言や展望は、危機と混迷の時代を越えて、地についた其の成長をよびかけている。

「60年代が成長の時代、70年代が福祉の時代である」とすれば、80年代は文化の時代である。豊かな社会は、生涯・所得・消費の量的拡大のみで図られるものではなく心の豊かさ、生活の質の充実を図ることのできる人間味あふれる社会の実現が大切(「国民生活審議会長期展望小委員会報告」と指

摘している。

流動する時代と社会の中で、伝えていくものの能楽観についてのさまざまな見方はあろうが、文化の時代・八十年代の能楽界は、その文化性、芸術性に、よりさらに高い質と密度が求められている。

昭和54年度芸術祭賞

能楽部門 2公演に優秀賞

ことしの芸術祭賞が十二月十三日、文化庁芸術祭執行委員会で決定した。能楽界からは、本年度は十一公演の参加申し込みがあった。芸術祭参加公演期は、十月十六日から十一月十五日までの一カ月間。能楽関係では、優秀賞に次の二公演が選ばれた。

▽梅若景英能の会(十月十九日宝生能楽堂)における能「谷行」(梅若景英、観世静夫、宝生弥一、地頭浅見真州)の企画と成果。

▽観世狂言の会(十一月二日、銀座能楽堂)における狂言「福壽」和泉元秀の演技。



観世元正

東京都渋谷区恵比寿南
一―二十一―十四

名古屋観世会

梅若香会
梅若三郎
梅若紀夫
梅若晴

幽詠会

片山博太郎

中日文化センター特別教室

観世元昭

鳳鳴会

武田太加志

武田志房

井上嘉久
(〒603) 京都市北区紫野下鳥田町六

大槻清韻会

大槻秀夫
大槻文藏

大阪市東区上町二番地

山本観衛会

山本勝一

〒662 西宮市南郷町五―二二
電話(078)七三―四七七八

梅若盛義

梅若盛義

名古屋橋岡会
名古屋市中区丸屋町五ノ三五
山田紀子方

上田観正会能楽堂
社団法人 観正会
上田 照也

名古屋淡交会

橋岡久共

誠交会 奥善助
東京都世田谷区三軒茶屋二―一〇―三二
電話(03)四二二―二六三七番

藤井徳久
完楽徳久
治人三雄

神戸市東灘区龍内町二―一―二〇
電話(三三)五一―四四番

幽花会

片山慶次郎

〒603 京都市北区小山下花ノ木町二―一
電話(075)四九二―一五三〇番

大西信久
大西智久

〒530 大阪市北区中崎西2丁目3―17
大阪能楽会館

武田詠楽会

武田小兵衛
武田欣司
武田邦弘

井戸良造
井戸和男

大阪府阿倍野区文の里4―24―17
電話(06)六二二―二二一九番

財団法人 鎌倉能舞台

中森貫太
中森晶三

〒248 鎌倉市長谷三―一五―十三
電話(046)七〇―五五五七

能 紀 行

(108)

旅 に出 て

絵と文 二井栄逸

喜多六平太先生がまだ御存命の頃でした。めったにお舞いにならないうつらな顔が、いよいよいよいよ、奇しくも関東地方は大雪になり、当日は東京市が白く色に包まれたことがありました。白翁は、着附、袴とも白づくめで、そのまことに印象的であつたことを覚えておられます。翁は、忠承の能楽大成期よりも、はるかに以前から成立したもので、非常に多くの演出が継承されていきます。先づ其の場を浄め、下舞平を舞く、森殿な演目なので、年頭によさわしい能でありませぬ。千秋萬歳の喜びの舞を舞う翁の品性の備わった笑みは、多くの人々の心の中にだけ残すことができず、正月元旦、年賀状を整理しながら



演 能 案 内

熱 田 新 春 能

一月二十日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

謹 賀 新 年

熱田神宮能楽殿運営委員会

- 委員長 熱田神宮権宣司 長谷晴男
委員 熱田神宮 権宣 山本文彦
熱田神宮 権宣 岡地幸雄
熱田神宮 権宣 松尾宗吾
熱田神宮 権宣 桐本陸良
熱田神宮 権宣 高橋半次郎
熱田神宮 権宣 藤田六郎兵衛
熱田神宮 権宣 柴田初太郎
熱田神宮 権宣 井上松次郎
熱田神宮 権宣 石井流河村総一郎
熱田神宮 権宣 内藤泰二
熱田神宮 権宣 福井啓次郎
熱田神宮 権宣 殿島修二
熱田神宮 権宣 鬼頭八郎
熱田神宮 権宣 梅田邦久

第25回記念中日五流能

3月30日 中日劇場で

中日五流能は、今春第二十五回を迎えるが、この記念能の演目は次のとおり。三月三十日(日)中日劇場。
第一部(午前十時始)喜多流能「三輪」小書神遊(喜多長世)、和泉流能「水波」(野村万之丞)、観世流能「柳丸」小書替之形、琵琶之会(武田太加志、坂井音次郎)金剛流能「鶴飼」小書無間(金剛巖)
第二部(午後四時始)観世流能「仲光」小書愁傷之舞(観世元照)宝生流能「熊野」小書膝行、三段之舞(野村蘭作)大蔵流能「清水」(茂山千五郎)金春流能「黒塚」小書白頭、替之出(金春信高)

<p>名古屋観世九皇会 観 世 武 雄</p>	<p>初陽会 武 田 宗 和</p>	<p>一謡会 河 村 鉦 二</p>	<p>叶石会 河 村 総 一 郎</p>	<p>邦 謡 会 梅 田 邦 久</p>	<p>竹 韻 会 杉 村 竹 翠</p>	<p>山 本 眞 賀</p>	<p>嘉 福 会 加 藤 総 兵 衛</p>	<p>笙 月 会 中 川 清</p>	<p>竹 翠 会 若 松 宏 守</p>	<p>松 音 会 泉 泰 孝</p>	<p>春 滿 会 梅 若 善 高</p>	<p>水 雲 会 水 藤 元 三</p>	<p>田 村 正 諷 会 田 村 正 諷 勇</p>	<p>德 島 正 韻 会 德 島 正 韻 勇</p>	<p>堆 派 会 下 田 雄 三</p>	
<p>久田観正会 久 田 秀 雄 大倉流小敷 久 田 舜 一 郎 松 月 会 久 田 舜 一 郎 久田観正会 久 田 舜 一 郎 郁 謙 会 前 野 郁 子 松 韻 会 松 山 幸 観</p>	<p>毎日文化センター 謡曲教室 殿 島 修 二</p>	<p>散る花の会 南 条 秀 雄</p>	<p>泉 嘉 夫</p>	<p>壺 泉 会</p>	<p>泉 嘉 夫</p>	<p>名古屋市昭和区山里町一〇三 電話(八三二)三三三三 西宮市甲陽園目中山町一〇一七八 電話(八〇七)九九八〇</p>	<p>名古屋市千種区田代町板敷22-38 星ヶ丘ハイム102 電話六二〇〇 電話(七七一)〇七六七番</p>	<p>長浜市地福寺町八ノ二九 電話(〇六三)〇六三〇番</p>	<p>西宮市平松町四一九 電話(〇七九)三三〇六〇一</p>	<p>豊中市本町六丁目一〇一六</p>	<p>名古屋市名東区藤ヶ丘八三 電話(七七)一五〇三九番</p>	<p>名古屋市東区宮前四一九一四 電話(〇三三)三三三三 大阪府東区東区一三三二一八 電話(〇六)九六八八 三五二四番</p>	<p>豊中市新千里南町三丁目18-12 電話(〇六)八三一七五五</p>	<p>大阪市東区東区東区一五七 電話(七〇五)二四〇〇番</p>	<p>徳島市吉野本町四 三谷内 電話(徳島)五二二 四七四四番</p>	<p>大阪市東区高麗橋詰町五三</p>
<p>稲 生 芳 雄 半田市船入町三十一 電話(〇五六)九〇八一五</p>	<p>重 陽 会 菊 池 重 郷</p>	<p>緑 名 会 田 中 武</p>	<p>演能写真 ウシマド写真工房</p>	<p>7602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇七五)一三三二番</p>	<p>7488 尾張旭市城山町三ツ池六一九八 電話(〇五六)一五〇三三〇四番</p>	<p>7602 京都市上京区北野上七軒 電話(〇七五)一三三二番</p>										

松和会 中 村 和 男
各務原市那加桜町2-11
電話(五八三)三三三三

宝生流 嘉 宝 会
鬼 頭 嘉 男

金 春 信 高

名古屋観世会定式能(初回)

二月十日(日)十二時半始
熱田神宮能楽殿

熊野 福王 雅幸 寛 敏一 藤田六郎兵衛
 後見 小島 一英 地謡 加賀 敏彦 上野 朝義
 武田 志房 久田 敏二 梅田 邦久
 休息十分

笙之段 上田 照也 地謡 小島 一修
 船弁慶 片山 博太郎 地謡 武田 邦久
 素袍落 和泉 元秀 井上 松次郎 邦久
 王 武田 晋 梅田 邦久
 天女 觀世 清順 觀世 元昭

白頭 飯富 雅介 河村 総一郎 觀世 元昭
 西村 欽也 福井 啓次郎 藤田 大五郎
 天地之聲 野村 又三郎 井上 礼之助
 後見 觀世 清和 地謡 水藤 元三 武田 邦久
 野村 四郎 河村 元三 竹村 久田 秀照 邦久

〔有料〕 主催名古屋観世会
 昭和五十五年年初回
 二月十六日(土)午後一時始
 熱田神宮能楽殿

神歌 塚本 秀雄 青木 武弘
 加藤 保彦 觀世 武雄
 島 西村 欽也 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛
 佐藤 友彦

附祝言
 〔入場料三、〇〇〇円〕 主催 邦謡会

協方高安流宗家蔵本

「牛大夫は、開口言はんとては
 鼓打の方へ向き、つくばひて、鼻
 かみて、置鼓打止めさせ所合はせ
 て言ひ出しける也。言葉いひ、次
 年度、日本謡学会秋季大会におい

雁大名

井上松次郎 井上礼之助 佐藤 秀雄

葛城 飯富 雅介 寛 敏一 鬼頭 喜太郎
 大和舞 後藤 孝一郎 藤田 昭彦
 大野 弘之

〔有料〕 主催名古屋観世九臈会
 事務所名古屋南区元塩町一丁目一七
 (〒457) 加藤 保彦 方
 電話(三三) 三二九二番(能楽殿)
 (四回公演)

梅田邦久斯道三十年 邦謡会記念能

二月十七日(日)正午始
熱田神宮能楽殿

高砂 安藤 勝則 本田 勲
 須部 甫 祖父 江修一
 武田 欣司
 小野 磯道
 梅田 邦久 勝 邦久
 武田 邦久 勝 邦久
 安藤 邦久 勝 邦久
 青木 道喜 勝 邦久

弱法師 片山 博太郎 岡治 右衛門 吉田 定男 藤田 昭彦
 盲目之舞 久田 邦一郎

茂山 千之丞 祖父 江修一 武田 邦久
 片山 清司 地謡 本 道喜 梅田 邦久
 片山 慶次郎 青木 道喜 橋本 雅夫
 後見 片山 慶次郎 洪井 義寿 橋本 雅夫

求塚 飯富 雅介 河村 総一郎 藤田 昭彦
 西村 欽也 大倉 長十郎 上田 昭彦
 茂山 千五郎 須部 一政 橋本 雅夫
 清沢 雨 須部 一政 橋本 雅夫
 片山 慶次郎 橋本 雅夫 橋本 雅夫
 青木 祥二郎 橋本 雅夫 橋本 雅夫
 青木 道喜 橋本 雅夫 橋本 雅夫
 武田 邦久 梅田 邦久 梅田 邦久



大阪 喜多会
 和島 富太郎
 〒665 宝塚市宝梅一丁目12-1
 電話(〇七九七)八六三〇

二井 栄 逸
 松阪市内 五曲町八八
 電話(〇五九八)二二一〇二六

長田 曉 後援会
 〒514-22 津市高野尾町三三五一-四六
 電話(八五五)〇〇六九七番

高安会
 西村 欽也
 〒467 名古屋市瑞穂区仁所町二四四五
 電話(八三二)五九一九番

高安 勝 久
 東京 練馬区小竹町一の五〇
 電話(〇三九五五)四七九五番

豊嶋 十郎
 〒二七一 松戸市下矢切五五
 電話(〇四七三)一九八二

京都 高安会
 岡治 右衛門
 清水 利宣
 高坂 康弘
 森野 晴蔵
 北野 三郎
 中川 湖舟
 伊藤 久蔵
 塩田 耕三
 村山 弘三

福王 輝 幸
 〒662 西宮市名次町六一二
 電話(〇七九八)九六五一

江崎 金治郎
 電話(〇七九二)〇七二五番
 江崎 康雄
 電話(〇七九二)九七二二番
 〒670 姫路市飯田二五〇ノ二

谷田 宗二朗
 〒603 京都市北区衣笠街道町31-7
 電話(三三三)〇三三三

久保 田 千三郎
 芦屋市 呉川町五ノ一八五
 電話(〇七九七)三三三三

飯富 良人
 熊本市 黒髪二丁目六ノ二九
 山崎 俊輔
 大牟田市 馬場町五七

森田 光春
 京都市 東山区八坂上町三七六

寺井 政 数
 〒154 東京都世田谷区世田谷四一三二五
 電話(四二〇)六六七六番

寛本 重一
 半田市 船入町三十一
 電話(〇五六九)〇八一五

幸圓 次郎
 〒164 東京都中野区中央四一四七一
 電話(三三八)九四一三番

大倉 長十郎
 〒581 吹田市 江の木町一六ノ一七〇二

大倉 長十郎
 〒111 東京都豊島区南池袋四一三二四
 (大蔵方) 正之助

幸友会

長生会

前川光隆

屋 觀世 武雄 西村 欽也 河村松一郎 藤田六郎兵衛
 島 福井啓次郎
 佐藤 友彦

脇方高安流宗家蔵本 「世開口御寿文集」について

辻 宏 一

最後に、ワキ役者が、開口をどのように演じたのか、その演能の仕方について考えてみたい。
 開口を演ずる方法については、時代、流派によって、幾分相違することになる。江戸時代、春藤流ワキ師、藤田伊右衛門の「豊高日記」を中心に、「隣中秘抄」の「隣中見聞集」「八帖花伝書」を参考にしながら、概略をまとめることにする。
 「豊高日記」には、開口について、次のように書かれている。
 「開口のケウケンの声の事、昔は極頭大小の間に居て此声をかけたる事なり、流儀に声無し。開口の文句、それといふ所、他流にて切でうたふ。流儀には切らずにうたふなり。置鼓常の通り、礼はノタレ一ぱいにつくばひ、礼の仕やう悠々と静かなり、ノタレ少し餘るとも待て居て、吹フセにて礼をする、又吹おこしにして頭を上げて取る、礼は大小の前、舞台の真中なり、露は留まで持てるなり。礼すみ出足六、此間中高音一ぱい。引足五、此間頭九つ、鼓のボと笛のヒヨラとワキの露落しと一所になる。めでト左、かりト右。留めて右より一あし左一あし出づ、面見下し見上る、口伝。名宣、口伝。
 まず、音取・置鼓の囃子が奏される。この囃子は、礼脇・半開口などの時にも、ワキが舞台に登場する際に用いられる。囃子につれて、舞台上に登場したワキとワキツレは、ワキツレが、まず、太鼓打のそばに座り、橋掛りに向って頭を床につけかしこまる。ワキは、そのまま、舞台正面先へ出る。笛の「ノタレ」で平伏し、ひざまずいて、「吹フセ」にて、うやうやしく礼をする。
 この間、小鼓が「頭」の数七つ又は九つ打上げ、笛が「ゆり」の

「牛大夫は、開口言はんとはは鼓打の方へ向き、つくばひて、鼻かみて、置鼓打止めさせ声合はせて言ひ出しける也。言葉いひ、次第取て、又言葉いふこと、二重に成所を知べし。次第の後、囃語ふべし。」
 と説明されている。「開口」「次第」「名ノリ」「道行」では言葉・歌・言葉・歌と二重になるので、そのような複雑な曲節は、祝言能の最初の「序」段階成には合わない。言葉・言葉・歌・歌と続くように、「開口」「名ノリ」「次第」「道行」とした方が、「サシ」の単純な音曲構成になり、祝言曲の「序」段階の構成として適していると考えたからではないかと思われる。このような構成を取っている臨能として、世阿弥自筆能本「難波」が上げられる。以上で、開口についての論究を終える。開口を演ずることは、江戸時代においては、特に重要な祝賀の意味をになわされてきたのである。(筆者は能楽研究者)

能楽の友愛読者招待

2月17日邦謡会記念能

能楽の友社では、五十五年度の愛読者招待として、きたる二月十七日(日)熱田神宮能楽殿にて催される「邦謡会記念能」に同会の協賛を頂き、百名様を無料招待いたします。
 能「弱法師・盲目之舞」(シテ 能一弱法師・盲目之舞)

昭和55年1月放送予定

- NHKラジオ第一放送 (毎週日曜午前10時15分)
- (1月)
- 6日(日) 喜多流「東」北喜多長世ほか
 - 13日(日) 観世流「巴」武田太加志ほか
 - 20日(日) 宝生流「龍」田今井泰男ほか
 - 27日(日) 金剛流「二人」今井幾三郎ほか
- NHK・FM (毎週日曜午前7時15分)
- (1月)
- 6日(日) 観世流「屋」島④観世元昭ほか
 - 13日(日) 同「上」同⑤同「上」
 - 20日(日) 宝生流「張」良松本謙三ほか
 - 27日(日) 観世流「難」波大西信久ほか
- NHK教育テレビ1月15日(祝)午前9~10時
- 一調、仕舞、狂言小舞集
- 仕舞「八島」後藤得三「田村」坂井音次郎
 - 「松風」大坪十喜雄「羽衣」観世雅雪
 - 「藤戸」桜間道雄「笹之段」梅若万三郎
 - 「天鼓」桜間金太郎
 - 一調「船弁慶」近藤乾三、金春惣右衛門
 - 狂言小舞「鐘の音」大藏弥太郎「貝づくし」茂山千作
- (放送予定につき変更の場合はご了解下さい。)

附祝言 (入場料三、〇〇〇円) 主催 邦謡会

吉田定男	寛鋤一	飯島佐之六	住駒明弘	住駒幸英	桂後藤孝一郎	山後藤孝一郎	龜井俊一	安福春雄	柳原富司	福井啓次郎	福井良久	幸友会	豊嶋十郎
茂山千五郎	茂山千作	三宅藤九郎	狂言共同社	名古屋和泉会	大藏狂言会	大藏狂言会	山口義郎	助川竜夫	愛知県中島郡平和町城西	鬼頭八太郎	喜太信	長生会	山崎俊輔
葵心庵舞台	葵心庵舞台	楽諷庵舞台	熱田神宮能楽殿	朝日文化センター	大藏狂言会	大藏狂言会	山口義郎	茂山忠三郎	善竹忠一郎	前川光隆	前川光長	大倉正之助	大倉正之助

新年おめでとうございませう。年頭に当たりまして名古屋能界の発展と愛好者皆様の多幸をお祈りします。

新年号は五四年の回顧をしたいと思ひます。このさきやかな展望には、多事・多彩な一年の中に、安心と焦燥・感歎と傷心・希望と願望が複雑・微妙に交差するのを感じます。

恒例の四行事をはじめ、学生能(三三回) 婦人能・愛好者の会・普及鑑賞能など活発に催された。とりわけ第二十回を迎えた大衆能が翁村の晴れやかな演能であったことは特記したい。

名古屋五四年の演能で最も印象に残る三・四を挙げると、まず始めに藤田六郎兵衛氏の笛の妙技と井上松次郎氏の狂言の風格とワキ方西村欽也氏の健闘を称(たた)えたい。

藤田六郎兵衛氏。一管独吟芭蕉(謡鎖之丞氏、会名を省く、以下同じ) 蟬丸(晉ノ型、逆髪元服・蟬丸景美) に狂言金剛(元秀・井上祐一) のアシライの笛は殊にすばらしかった。曲趣を高め深め大きくしたことはもちろん、能管の芸による心の道通遊にまで及んで見事であった。年を重ねて舞台に出ることに大事をとられ、いよいよ慎重な同氏の心構えは大いに学ばれた。

昨年末の「壺泉会」(熱田能楽殿) で能「声刈」が終ったあと、突然主催者の泉流夫さんが素顔で舞台上に登場し、東京で見に来たばかり、聴いて来たばかりの観世寿夫の展覧会とシンポジウムの報告をした。十分足らずの短い時間でマイクの調子も悪かったが、大事な演能の時間をさいてまでも、スケジュール外の報告をせずにはおられなかつた泉さんの情熱は十分に感じられた。

泉さんは、寿夫の革新的な精神と行動は寿夫だけのものではあつてはならず、現代に生きる能楽人すべての行くべき道であるはずなのに、現実には必ずしもそうでない旨を自省的な念をこめて報告の結びに述べていたが、全く同感である。寿夫はたしかに天才だが、寿夫ブームに乗り遅れまいと、その歳

ばなくてはなるまい。片や井上松次郎氏の狂言が年来ますます風格を帯び、夷大黒・栗焼・宗論・種酒と大会(だいえ) 遊行柳の語りに見せた味は近年最も高く名古屋の狂言のよさを共同社の面々と大きく展開したことを特記したい。西村欽也氏がワキ方高安流(金春流・翁、NHKテレビ、元日放送) とともに大層感銘深かつた。観世・宝生両家元の御曹子清和・英照二君が颯爽とはじめ、お

春夏秋冬

野村 広二

に對し自愛、磨一層の努力を切望したい。

あわせて名古屋の五流シテ方一年の大小の演能に、和を以て、果す三役の協力を見逃すことは出来まい。能と狂言の第一義・大切なものが何であるかを念頭において新しい年も前進と充実に向われようお願ひしたい。そして舞台を大事に。

狂言は、秋十一月の和泉保之助元秀・元初舞台記念狂言会である。長い間呼びなれた保之助さん秀氏の名古屋、一年の在京期間もわりと短い。元初少年がサルノ親猿はサル使い祖父藤九郎・大名お右近で品のよいおだやかな曲だった。金剛の位に對し、二人(万之丞・耕介) 種酒(松・礼・秀) のいわゆる狂言のおもしろさも身にしみたまし、名古屋の三青年、祐一(在京) 友彦・弘之三君がそれぞれ一役を得て、無事勤めたことはうれしかった。藤九郎氏が人間国宝になられ、昨年はめでたさが三代続く。さて、家元元秀氏の名古屋、一年の在京期間も

時代の旗手とは

壺泉会のエピソード

きとめた初代梅若実の諷刺の中に「能にあっては一切が徳川時代の初期から下ラデザイン(伝統)として伝わって来ている。従って能は決して今日の間から批判されるべきものではない。たゞ誠実にフアロー(追隨)されるべきもので

相当長い又三郎氏もようやく定着(やるまい会・豊穠狂言会)、そして九十年の歴史を有する狂言共同社が、それ以前からの名古屋のよさを伝承して活動する名古屋(劇団狂言会、名古屋和泉会)。いつまでも名古屋の狂言が続くように。祝賀会の席上名古屋和泉・藤田両家のことを六郎兵衛氏と語って昔をしのいだ。

次は、定例の観世会に観世土曜会が設けられ、その流勢にこたえることになった。毎回満席。その趣旨に打って響くように、陸盛を物語る。

能は、必見をみそねた能が二(三番あるが、嵐山(翁村、元正)海士解腕ノ伝(同氏) 木曾曾書・恐ノ舞(元昭) 養老(万紀夫) 屋島大事(盛義) 三輪白式神楽(博太郎) 遊行御曹子(元昭) 久共(蟬丸) 道成寺(静夫) 鉢木(太加志、以上観世流) 恋重荷(型) (信高) 松風見留(孝) 是界白頭別習・夕顔山端ノ出(巖) など観世印象は強い。なかでも嵐山に三輪・蟬丸・養老と夕顔には深い感銘を受ける。東西に比べ数こそ少ないが、その中でも観世能は多く、舞台に對する見所の目は鋭い。狂言は右のほかに、青葉輝(万之丞・万作) 水掛舞(忠一郎) 養老の語り(茂山あきら) が。

いたのではなかつたか。それなればこそ、彼は明治を代表する三人のトップに立つことが出来たのではなかつたか。

現代の梅若実も観世寿夫である。気は毛頭ないが、時代の旗手である。しかし旗の振りようはいくちもある。実と寿夫の振り方が違つても、同じ現代の能楽人である道はいくちもある。伝統のカラーの外へ出て活躍するもよし、カラーの中にこもって伝承と対決するもよし。要は人である。人間性である。現代をいかに生きるべきか、真剣に悩み求める能楽人に、扉は時を得て自ら開くだろう。

泉さんその一人だと確信する。(M)

また昨年は河村丘造氏(共同社長老) はか逝去。同氏晩年の小舞海道下り・大原木の滋味ただよう舞台は忘れられない。あらためてご冥福をお祈りします。

東西のことをちよつと。東西でも梅若六郎・奥野達也・梅村平史

13日金沢・県立能楽文化会館。小鼓方幸流・住駒陽介氏(金沢市片町一丁目二二五) の奉寿を祝う△△△の二日間、石川県立能楽文化会館で開催される。十三日は能「草子流」、両日とも囃子多敷。

朗はかの諸氏に番西精(つとむ)氏がなくなられてまことに惜しい。六郎氏は十一月・二月の通信高校講座・国語古文・隅田川(NHK教育テレビ、謡曲、二回) のなかで都鳥と念仏の場をみせてくれた。私も在りし日を、拝見してのんだ(六十九日)のときの演能と講師が断わっていた。

五四年と五五年は観世寿夫氏(一昨年十二月他界) の年とも言えよう。それをひとまず締めくくると、昨年来、幽玄・寿夫と能(東京) が開かれて、その高大な業績をしのぶ。そして写真集・観世寿夫も出る(平凡社)。

他方国際シンポジウム・世界の能がこれら十二月初旬行われる。法政大学創立百周年記念行事の一つとして、私のR・シフェール教授のお名前を来日学者の中に見つけてなつかしかった。また、個人単位の後援会能が多くなつた。千五郎氏が釣狐を五回舞う。忠三郎狂言の会が関西につくられた。千五郎氏が釣狐を五回舞う。千五郎氏が釣狐を五回舞う。千五郎氏が釣狐を五回舞う。

梅若 景英
浦田 保一
梅若 修一

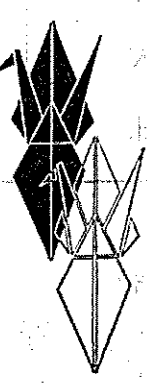
住駒陽介氏
奉寿祝賀△△△会

徳川美術館では、旧暦十二月から「能装束と小袖」展を開催している。一月二十七日(日)まで。主要陳列品は、能装束では紅地柳文唐織、浅黄・茶段七宝、鶴文唐織、紫地金襴鳳凰文長袖、嘉珍地若松、鶴亀文直垂、小袖では重文辻花染小袖、葵ノ葉文辻花染胸服など、その他徳川家康衣服浅黄帖、裂籠、重文相応寺屏風等六十点。

徳川美術館は、名古屋市中区徳川町二二七。月曜日休館。

あなたに心をこめておくりする……


富士道の婚礼道具



家具の富士道

本社 名古屋市中区栄3丁目35番18号
TEL 代表 (262) 5547
工場 愛知県西加茂郡三好町 TEL (05613) 2-1178

新しい視力の見直し—オプトメトリー—



明けまして おめでとう ございます

新しい視力の世界を拓く、玉水屋のサービスをご利用下さい。

メガネの玉水屋

定休火曜日 営業 10時~7時

なごや・栄交差点北西角 ☎961-1826代

社 18
4 93
円 円

和泉流 井上松次郎氏に「特賞」

は団体で贈られるものであり、今回は井上松次郎氏と作曲家の田村美智歌さん(五七)が授与された。井上松次郎氏は、名古屋狂言共

演能案内

半通 盛仕 舞 生駒 里翠 野道 摩子 地蔵 本木 久武 二弘

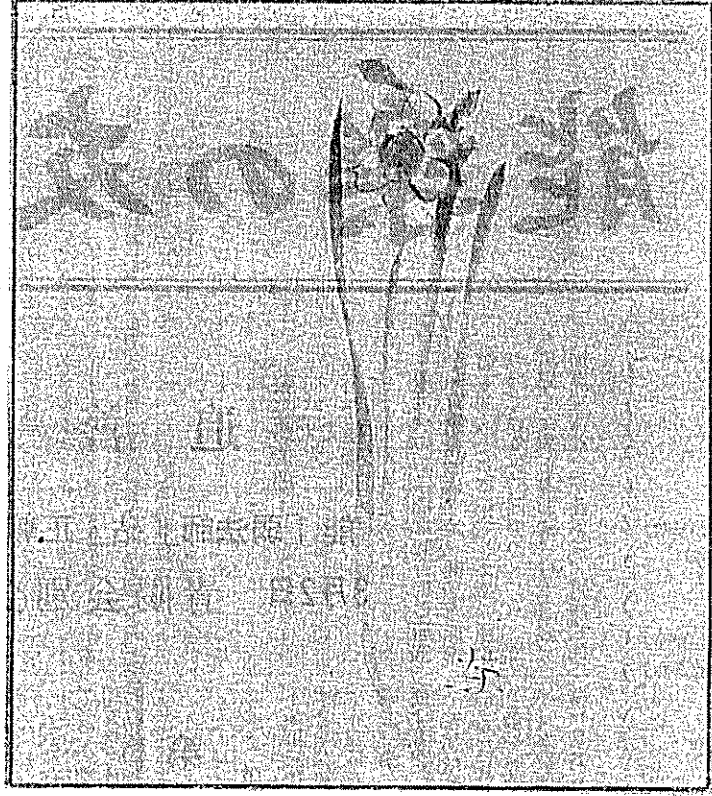
能 紀 行

(109)

初心忘るべからず

絵と文 二井栄逸

こないだ、三重の奥、大台の麓に咲いたという、水仙の花を頂戴しました。大台に住む門下の方からです。水仙にかりはありませぬが、いくつかの時を越え、山峡の里々を通って運ばれて来た水仙



は、花屋から運ばれてくるものと違つて、私にとってはやはり得がたいものなのです。早速、苔藓に露を打ち、一もとの水仙をアキラツテ見ると、ほんとうにすがすがしい風情がただようのです。こうして見ると、いつも思うことですが、水仙は、やはり女性でなく、美しい青年のような気がしてなりません。

ギリシャ神話に出てくる羊飼いのナルシスは、ニフのエンコーを失態させた程の美青年でしたが、水に写る自分の姿を恋をして死に水仙の花に化してしまいました。自分は誰よりも美しい。自分の雲は誰よりも立派であると思うことは、ナルシスのように悲しい結果になるのです。

しかし、今、私の部屋にすつきり立つた水仙は、頭を下げ謙虚にむしる恥じろいように見え、ナルシズム等とはおおよそ縁遠いようです。

××××

初心とは初めての経験をいいます。現代によく使われる「初心忘るべからず」という警句は、世阿弥の言葉なのです。「初心忘るべからず」とは、大分進んできているようすです。又ならんでよく使われる「初心にかえる」ということは、未熟な状態まで後戻りするもので、最も避けなければならぬことなのです。たゞ

初心といつても初めに思いたった志望を、いわゆるもとからの志を貫徹するということは立派なことだと思ひます。現在では、「初心忘るべからず」を、学び始めた当時の謙虚な気持を失つてはならない。初一念を忘れてはならない。「初心忘るべからず」にはもっと深い意味がふくまれています。

世阿弥は、この言葉に次の三つの口伝を添えているのです。

是非初心忘るべからず
時々初心忘るべからず
老後の初心忘るべからず

先づ最初の初心忘るべからずは初心時代の芸を忘れずに、身に保ちながら上達の度合を正しく把握してゆく自身の判定材料にせよというので、ギリシャ神話のナルシスのような自己陶醉をいさめられているようすです。

第二の「初心忘るべからず」は長い生涯にはいくつもの壘が進む道をはみませんが、それは一つ一つの経験をさしているのだと思ひます。芸感を深く広くしてゆくには、いくつもの初心が必要なのです。そして初心を忘れてはいけないということ、常に反省せよということ、第三は、さらに老後になつて、初めて体験するであろう至難の難々を初心時代から内備に秘められた芸力で一つ一つ切り開いてゆけ、ということだと思ひます。

芸の限界を見せず生涯を終えよ——と、いうことを、世阿弥は強く教えているのです。

能「杜若」恋之を上演

2月15日 市民会館「能の世界」

名古屋市民会館の自主企画「市民の劇場」は日本の心シリーズとして、「能の世界」を二月十五日(金)午後六時半から名古屋市民会館ホールで公演する。

演目は、能「杜若」恋之の舞、出演は次のとおり。

シテ・梅田邦久、ワキ・西村欽也、笛・寛三男、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・助川龍夫

後見・武田欣司、小島一英

秘曲 釣狐を観る会

能 江 口平調返

名古屋宝生会定式能は、二月三日、熱田神宮能楽殿で本年度演能初会を開催したが、第二回は六月十五日(日)、第三回は九月二十八日(日)の三回催される。

第二回、第三回の番組は次のとおり。

第二回 六月十五日(日)
故宝生九郎宗家追善能
能 経 政
能 江 口平調返

青陽会第24期番組

各回能3番を上演

名古屋市民会館の自主企画「市民の劇場」は日本の心シリーズとして、「能の世界」を二月十五日(金)午後六時半から名古屋市民会館ホールで公演する。

演目は、能「杜若」恋之の舞、出演は次のとおり。

シテ・梅田邦久、ワキ・西村欽也、笛・寛三男、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・助川龍夫

後見・武田欣司、小島一英

各地だより

上田観正会能

2月16日 観正会能楽堂
上田観正会は二月十六日(土)

梅猶会定期能

三月九日(日)午前十一時始

熱田神宮能楽殿

舞 能 組

梅猶会定期能

小袖曾我

須磨源氏 菊池 重輝

舞 能 子

小袖曾我

女

須磨源氏 菊池 重輝

舞 能 子

女

隠し狸

須磨源氏 菊池 重輝

舞 能 子

隠し狸

上

須磨源氏 菊池 重輝

舞 能 子

上

附祝言

須磨源氏 菊池 重輝

舞 能 子

附祝言

第二回藤田昭彦の会

四月五日(土)午後一時半始

熱田神宮能楽殿

舞 能 組

第二回藤田昭彦の会

奈須与市之語

須磨源氏 菊池 重輝

舞 能 子

奈須与市之語

獅子

須磨源氏 菊池 重輝

舞 能 子

獅子

笹之段

須磨源氏 菊池 重輝

舞 能 子

笹之段

附祝言

須磨源氏 菊池 重輝

舞 能 子

附祝言

昭和55年2月・3月放送予定

● NHKラジオ第一放送 (毎週日曜日午前10時15分)

2月	10日(日)	観世元照ほか	「塵」	島	観世元照ほか
	17日(日)	佐野萌ほか	「小袖曾我」	佐野萌ほか	
	24日(日)	大西信之ほか	「高」	大西信之ほか	
3月	2日(日)	金春信高ほか	「基園」	金春信高ほか	
	9日(日)	栗谷新太郎ほか	「流」	栗谷新太郎ほか	
	16日(日)	三川泉ほか	「流」	三川泉ほか	
	23日(日)	三川泉ほか	「流」	三川泉ほか	

● NHK・FM (毎週日曜日午前7時15分)

2月	10日(日)	三川泉ほか	「三」	三川泉ほか
	17日(日)	橋岡久馬ほか	「三」	橋岡久馬ほか
	24日(日)	三川泉ほか	「三」	三川泉ほか
3月	2日(日)	大坪十喜雄ほか	「通」	大坪十喜雄ほか
	9日(日)	同上	「通」	同上
	16日(日)	同上	「通」	同上
	23日(日)	同上	「通」	同上

(放送予定につき変更の場合はご了解下さい。)

故室生九郎宗家追善能
能 経 政
能 江 口 平 調 逸
会費 臨時会員 第一・第三回
各四千五百円、第二回(追善能)
六千円。

秘曲 釣狐を観る会

二月二十七日(水)六時十五分
名古屋市民会館中ホール

狂言組

釣狐のこと

山崎有一郎

兼獅子
養 老

くじ罪人

主 野村万之丞
立 井上松次郎
野村 万作
野村 友之助
野村 友之助
野村 友之助
野村 友之助

主権釣狐を観る会

名古屋市中区正木三丁目十六ノ二五
野村万之丞
(331) 7553

能友随想

一月十九日夜、名古屋の港濱会館で名古屋おや子劇場の一月例会がひらかれた。おや子劇場としてのはじめの狂言の会、和泉流宗家の元秀、右近、名古屋共同社の井上松次郎氏らの出演という、子供たちを対象にした催しにしてはなかなか豪華版であった。

青陽会第24期番組

各回能3番を上演

青陽会は、別項(①面)のように三月二日、物故会員五氏の追善別会を開催するが、第二十四期(昭和五十五年)の演能予定は次のとおりである。

今井清隆氏「道成寺」

京都 3月20日 緑旺会別会

金剛流職分家・今井幾三郎氏の子息・清隆氏(今井六代目)は、きたる三月二十日(祝)金剛能楽堂で行なわれる緑旺会別会能で「道成寺」を演能する。

宗家と子ども 一問一答 おや子劇場の「狂言の会」

松羽目の仮舞台も立派なもので東京から随行の司会者の紹介があつて「山伏」「附子」の舞台が展開されたが、客席は真剣そのもの、宗家兄弟の熱演も熱田能楽殿の際とちつとも変らず……というところだが、やや演技がまろやか

各地だより

55年度第2回

神戸能楽会

神戸能楽会の本年度第二回演能は、二月二十四日(日)湊川神社能楽殿で開催される。

上田観正会能

上田観正会は二月十六日(土)上田観正会能楽堂で定式能を開能。

序ノ舞

垂井勉

序ノ舞は最も格調の高い優艶で静謐な舞の形である。笛と大小の鼓のみの序ノ舞は、緩やかで単調な舞子に乗って終始無言のうちになかに舞い続けられる。

その艶麗な面をばちろんこの眼にするにはできない。その時々々の無言の舞風によって、自分でもそれ初々しい清純な小面や、艶麗そのものの若女、品位を思わす増、臨みつけた孫次郎など、かっで写真集などで見つけたその面影を、想像の舞姿に重ねるのである。

うと一昨年春から開設された「神戸能楽教室」は、このたび第五回を迎え、従来と異なり開能を一年一回、四月に四日間の教室とし、内容の充実を図っている。

観世流謡曲本 ちくさ正文館

ちくさ駅前
電話01137

Table with NH and NH logos and dates: NH (2月) 10日, 17日, 24日, 3月) 2日, 9日, 16日, 23日, (NH) (2月) 10日, 17日, 24日, 3月) 2日, 9日, 16日, 23日

第25回記念中日五流能

三月三十日(日) 名古屋・栄 中日劇場

第一部(午前十時開演)

喜多流能 三輪 江崎金治郎 柳原崇志 寺井政和 野村又三郎 山本才二 大井栄逸 後見長田 磯地 東海 二才 大井栄逸 高林白牛 磯地 和谷 佐々木宗生

和泉流狂言 水汲 野村万之丞 野村又三郎 喜多流狂言 野守 粟谷菊生 地謡 大島政逸 野丸坂井次郎 逆曼武田太加志 西村欽也 安福春雄 藤田六郎長瀬 替之形 飯富雅介 杉江元

観世流能 蛭丸 飯富雅介 安福春雄 藤田六郎長瀬 後見関根 宗和 地謡 青木武彦 坂井音重 後藤藤三郎 久松義典 久松義典 久松義典

金剛流能 八島 豊嶋三千春 竹市幸司 富士太鼓 今井幾三郎 地謡 松野三郎 車僧 金剛永謙 今村修三 嵐山 藤井徳三 今村修三 舟弁慶 梅若盛義 地謡 加藤修三 水藤兵衛

金剛流能 鶴飼 江崎金治郎 柳原崇志 寺井政和 無間 岩城雅晴 吉阪修一 後見廣田 恭三 地謡 東田康文 松野 野村耕介 日比野寛一 百々 康治 徳永三郎 今井幾三郎

観世流能 仲光 福王 柳原崇志 寺井政和 慈徳之舞 間 茂山 正義 祖父江修一 後見武田 加志 地謡 田中重武 武田太加志 地謡 杉野 治房

金春流能 花籠 金春 安明 坂井音重 杜若切 金春 欣三 地謡 松野 瑞弘 金春 晃美 地謡 松本 武次

天鼓 金春 晃美 地謡 松本 武次

観世流能 仲光 福王 柳原崇志 寺井政和 慈徳之舞 間 茂山 正義 祖父江修一 後見武田 加志 地謡 田中重武 武田太加志 地謡 杉野 治房

金春流能 花籠 金春 安明 坂井音重 杜若切 金春 欣三 地謡 松野 瑞弘 金春 晃美 地謡 松本 武次

社 3-18 8 4 9 3 0 0 0 円 円 円

観世流能 放下僧 坂井音重 須賀川敏彦 融 武田志房 地謡 藤井徳三 長谷川三三 清沢一末 徳政

宝生流能 野 柳原崇志 藤田大五郎 野村 柳原崇志 藤田大五郎 野村 柳原崇志 藤田大五郎

大藏流狂言 清水 茂山 正義 吉田俊彦 松 辰巳孝 吉田俊彦 善知鳥 本間英孝 地謡 馬場富夫 内藤 泰三 鬼頭嘉男 鈴木義久

金春流能 塚 飯富雅介 森田光春 飯富 飯富雅介 森田光春 飯富 飯富雅介 森田光春

附祝言 主権 中日新聞本社 (一部料金) 特別席六千円、A席五千五百円 B席四千五百円、C席二千五百円

岡崎部会 壺泉会大会 3日 岡崎市民会館で盛会 二十周年 壺泉会 壺泉会 壺泉会

観世流・壺泉会 壺泉会 壺泉会 壺泉会 壺泉会 壺泉会 壺泉会 壺泉会

能「百萬」(シテ倉地幸子、子嘉夫、宮部悟) 能「鐘丸」(サカ、中沢修、セミ、前川修)

能「紅葉舞」(鈴木辰夫、大城章男、太田半之助) 能「安宅」(勸進帳(名譽師範披露)シテ石附二、ワキ泉泰孝、ツレ大城章、山佐美元裕、小森辰雄、鶴克彦、山本正人、鈴木辰夫、大城章男、子方、佐藤幸利、間、野村又三郎)

能「紅葉舞」(鈴木辰夫、大城章男、太田半之助) 能「安宅」(勸進帳(名譽師範披露)シテ石附二、ワキ泉泰孝、ツレ大城章、山佐美元裕、小森辰雄、鶴克彦、山本正人、鈴木辰夫、大城章男、子方、佐藤幸利、間、野村又三郎)

第1部 宝生流能「咸陽宮」観世流能「松風」 第2部 観世流能「改盛」金剛流能「首成寺」

谷口正喜 京都市上京区中立売通室町西入 室町スカイハイツ610号

伊勢神宮奉納 金春流能は、毎年伊勢神宮奉納 能を行なっているが、本年は四月 八日(火)に催される。 能「西王母」(金春晃美)「夜討討我」(本田光洋)

金春流能 能「安宅」(本田光洋) 能「杜若」(柳原崇志) 能「自然居士」(シテ金春晃美、子方・八木祥光) 能「石」(シテ高橋汎、ツレ中田秀一)

金春流能 能「安宅」(本田光洋) 能「杜若」(柳原崇志) 能「自然居士」(シテ金春晃美、子方・八木祥光) 能「石」(シテ高橋汎、ツレ中田秀一)

金春流能 能「安宅」(本田光洋) 能「杜若」(柳原崇志) 能「自然居士」(シテ金春晃美、子方・八木祥光) 能「石」(シテ高橋汎、ツレ中田秀一)

金春流能 能「安宅」(本田光洋) 能「杜若」(柳原崇志) 能「自然居士」(シテ金春晃美、子方・八木祥光) 能「石」(シテ高橋汎、ツレ中田秀一)

金春流能 能「安宅」(本田光洋) 能「杜若」(柳原崇志) 能「自然居士」(シテ金春晃美、子方・八木祥光) 能「石」(シテ高橋汎、ツレ中田秀一)

金春流能 能「安宅」(本田光洋) 能「杜若」(柳原崇志) 能「自然居士」(シテ金春晃美、子方・八木祥光) 能「石」(シテ高橋汎、ツレ中田秀一)

金春流能 能「安宅」(本田光洋) 能「杜若」(柳原崇志) 能「自然居士」(シテ金春晃美、子方・八木祥光) 能「石」(シテ高橋汎、ツレ中田秀一)

金春流能 能「安宅」(本田光洋) 能「杜若」(柳原崇志) 能「自然居士」(シテ金春晃美、子方・八木祥光) 能「石」(シテ高橋汎、ツレ中田秀一)

演能案内

榎書店 電話(291) 2488-9 電話東京3-3552 電話(231) 1990 電話替京部113

城 割烹・小料理 熱田神宮能楽殿喫茶部 住吉小路(中区栄3-10) 電話241-0248 喫茶・グリル(豊洲評地下ビル) 電話731-1128

十松屋 十松屋 十松屋

欧風料理 とんかつ 名古屋市千種区大久手町4-11 TEL731-3680

名古屋皋楽会春季大会 三月二十三日(日)午前九時始 熱田神宮能楽殿

発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 36393

購読料 1年 700円

郵送の場合 1年 1000円

一部 70円

題字は熱田神宮 窪田宮司筆

能楽の友

年金のお受取りは名銀で

- 自動的に振込まれて便利です
- 共済年金の方もご利用ください。

名古屋相互銀行

故 高安滋郎・西村弘敬両師

高安会追善能

6月29日 熱田神宮能楽殿

第1部 宝生「咸陽宮」流能「松風」
第2部 観世「敦盛」流能「道成寺」

追善能がきたる六月二十九日(日)高安会主催により熱田神宮能楽殿で催される。

故高安滋郎氏は、昭和半世紀にわたり、当中部地方の演能を中心に大きな足跡をのこし、能楽協会名古屋支部長として活躍、昭和五十三年四月逝去されたが、氏の遺徳をしのび追善能の企画がかねてすすめられ、あわせて高安師の故父西村弘敬氏(昭和四十八年三月十日逝去)の七回忌の供養の演能で、観世、宝生、金剛の各流により能四番(第一部二番、第二部二番)が上演される。

能組は、第一部(午前十時始) 第二部(午後三時始)の二部にかかれ、第一部は、宝生流能「咸陽宮」、第二部は、観世流能「道成寺」。

高安会事務所名古屋千種区仁所町二丁目四、西村弘敬氏方、電話(〇五二)八三一五九一九番

ワキ方高安流十三世宗家・故高安滋郎氏三回忌、西村弘敬氏七回忌

ワキ方宝生弥一氏が受賞

54年度「芸術院賞」決まる

日本芸術院(有光次郎院長)は三月四日、昭和五十四年度(第三十六回)の日本芸術院賞の受賞者の選出を行ない、十一氏を内定した。

この芸術院賞は、第一部(美術) 第二部(文芸) 第三部(音楽・演劇・舞踊)の分野ごとに候補者を選出、全会員で組織される選考委員会が候補者を選び、部会ごとに無記名投票で選出されるが能楽界からは、ワキ方宝生流・宝生弥一氏(七一)が受賞と決定した。

能楽関係の受賞者はこれまでに野口兼賢(昭和二十二年)、観世華雪(昭和二十五年)、櫻岡弓川(昭和二十七年)、善竹弥五郎(昭和二十八年)、橋岡久太郎(昭和三十一年)、野村万蔵(昭和四十一年)以上八人、近藤乾三(昭和三十四年)、後藤得三(昭和三十七年)、喜多夷(昭和四十九年)、茂山千作(昭和五十一年)の各氏で、宝生弥一氏はワキ方として初めての受賞である。受賞理由は次のとおり。

久田徹二師「道成寺」上演

神戸 3月20日 上田観正会別会

上田観正会(上田照也師主宰) 定式能春の別会は、三月二十日(祝)神戸市・上田観正会能楽堂で催され、久田徹二師の「道成寺」披露をはじめ能四番が上演される。

久田徹二師は、上田照也師内弟子として昭和三十八年から師事、四十九年師範として独立、明石古典能の会、中部能楽界で活躍する青年能楽師「この道における飛躍のひとつの節として体力の続く限り力いっぱい演じたい」と大曲にいとむ。小鼓は久田舜一郎が勤

め、久田兄弟の力演が注目される。

別会の能組は次のとおり。

能「高砂」八段之舞(藤谷政二) 三山田義高(能「清経」窓之音) 取(下川宜長、ツレ上田拓司) 能「羽衣」彩色之伝(森孝子) 能「道成寺」(久田徹二)

一調「歌占」キリ(上田照也、吉田太一郎) 狂言「宝の桶」(茂山千作ほか) 仕舞など。入場料三千円、上田観正会能楽堂は神戸市長田区大塚町二丁目一四、電話〇七八(六九一)五四四九番

演能案内

なごや会狂言十周年記念会

三月十六日(日) 正午始
熱田神宮能楽殿
なごや会
大蔵狂言会

狂言、素舞子、小舞など二十数齣

観世会土曜定式能(初回)

三月二十二日(土) 一時始
熱田神宮能楽殿

竹生島

加藤 保彦 青木 武雄
後藤 梨雲

地謡 長谷川 勝朗
大谷 末吉
須部 末吉

能組

水原 元三
塚本 秀雄
島 修二

地謡 杉田 一
清沢 秀雄

飯富 雅介

梶頭 英二
福井啓次郎
今村 幸親
嘉勇 梅田 徹二
加藤 保彦 小島 一英

鏡

井上松次郎 佐藤 秀雄
後見 井上礼之助

舟

飯富 雅介 助川 龍彦
西村 欽也 藤田 昭彦
杉江 元 久田舜一郎

附祝言

主権名 古屋 観世会

後見 高橋 謙一 地謡 加賀 敏彦 梅田 邦久
片山慶次郎 中村 和男 藤井 久雄
大谷 末吉 久田 秀雄

五月二十四日(土)宝生能楽堂
「乱」(按問真理)角田川
「按問道雄」(融)勿ノ舞(按問
金太郎)

検査店社主松常太郎氏夫人正子
さんは四十九日二十五日逝去。享年
六十四歳。告別式は二十九日渋谷
カトリック教会で行なわれた。

名古屋泉楽会春季大会

三月二十三日(日)午前九時始

鞍馬天狗

番 組
番外発声連吟
野垣 慶子 駒瀬 直也
有賀 遊子 長谷川 章

遊柳

吉田 正子 橋本 鶴子
浅井 銚二 五木田三郎

高砂

波谷 朝子 河村 大
後藤 孝一郎 藤田 昭彦

善知鳥

橋本 とも 寛 敏一
深見 賀子 後藤 孝一郎 藤田 昭彦

井筒

山中きんよ 五木田武計
矢橋 浩吉 親世 武雄

三輪

佐藤千代子 河村 大
福井啓次郎 寛 敏一
深見 一枝 後藤 孝一郎 藤田 昭彦

道成寺

塚田 常子 親世 武雄
野村又三郎 青木 武雄

砥

高橋 照一 野村又三郎
後藤 鈴子 塚本 秀雄

熊野

高木美智子 幸 敏一
宗倉 早苗 幸義太郎 寛 三男

卒都婆小町

伊藤 睦子 五木田武計
小林 喜久

百井

森川みどり 河村 大
幸 敏一 藤田 昭彦
芝村 栄枝 寛 敏一
柳原富司忠 寛 三男

西行

水野あや子 寛 敏一
柳原富司忠 助川 龍彦
番外仕舞 藤田 昭彦

御来場歓迎

主権 名古屋 泉楽会
事務所 千種 名古屋市中千種区元町一ノ
一ノ一七(加藤保彦方)
TEL 六一一三六五九

欧と

岐阜市能舞台が完成

能楽愛好者が署名運動で推進

4月6日 建設記念謡曲大会

岐阜市では、岐阜・京町に中央青年会館の建設にあたり、同館に能舞台の建設もあわせ工事をすすめてきたが、いよいよきたる四月完成する。

この能舞台の新設を記念して、岐阜市在住の能楽愛好者で組織される岐阜能楽会の主催により、きたる四月六日、「岐阜市能舞台建設記念謡曲大会」が岐阜市中央青年会館(岐阜市京町三丁目、京町小学校内)で催される。

この能舞台は、青年会館の建設にあたり、同館での演能ができるよう本格的な仮設舞台の設置が地元能楽愛好者から強く要望され、岐阜市の能楽関係者、愛好者による能舞台建設の署名運動を展開するなど熱意が盛り上がり、市当局でもこの要望を受け入れて計画に

舞臺は、鏡板をはじめ熱田神宮能楽殿の構造を参考として組合せられており、演能に最適な雰囲気配が施されている。

この建設にあたり、とくに記録されるのは、岐阜市の演能が戦前は公会堂で行なわれ、この仮設舞台は昭和初年につくられて戦災(昭和二十年)で焼失したが、旧舞台がつくられてから丁度五十年ぶりに再現されたわけで、地元愛好者の感激もひとしおのものがある。

故広田弘氏追善能

4月20日 広田後援会能

金剛流・広田後援会は毎年春秋にわたり後援会能を催しているが、ことしは故広田弘氏三十三回忌にあたり、きたる四月二十日(日)京都・金剛能楽堂で追善能として催される。能「誓願寺」小書・米迎拍子、「鶴願」小書・無間など。能組は別項のとおり。午後一時始。なお追善能に寄せて能楽評論家・沼津雨氏「凌雲・三代」として次のように述べられている。

このことは昭和二十八年に発足された、廣田後援会の活躍から見ても明らかであります。当初は金剛流第一のホープとして修練の途にありましたが以後兄弟の斯道での精進は、その実証として、今日の大成を生み、流儀普及の中心となつて重責を果しているのではありません。

父君の遺芳をついで、更にお互いの後嗣・幸稔・泰能の両君にこれを引きつがすべく、精進されていくことを思う時、金剛流・廣田家親子三代、四人の悲願達成の日を念じないでいられません。手向けられる「誓願寺」「鶴願」「小袖曾我」に現れるものがそれであることは信じております。

衣「鳥沢啓次師「小鍛冶」が演ぜられた。

記念謡曲大会は、幸風会、玉昭会、岐阜邦謡会、岐阜誠交会、松和会、岐阜宝会、岐阜朗声会、桂会、岐阜八鼓会、土筆会、岐阜英会、花調会、鶴声会、岐阜幸友会、岐阜

名古屋観世九臈会

55年度第2回以降の定期能組

名古屋観世九臈会(会主・観世武雄氏)の昭和五十五年定期能の初回は、きたる二月十六日、熱田神宮能楽殿で催されたが、本年は第二回五月十日(土)、三回七月十九日(土)納会九月二十日

◎二回目番組 五月十日(土)午後一時始

- 素謡 西行 桜 観世 武雄 小島 芳雄 駒瀬 直也
- 能 頼 政 西村 欽也 河村總一郎 眞 三男
- 能 吉野 天人 西村 欽也 鬼頭 英二 藤田 昭彦
- 附 祝 言 高木美智子 福井 良久 藤田 昭彦

能楽組

- 舞臺子 小袖曾我 廣田 幸稔 林 清一 杉 市和
- 仕舞 高野 物狂 廣田 幸稔 谷口 宗義 掛川 昭二
- 女 田 隆一 森 晴蔵 大倉長十郎 藤田 光春
- 誓 願 寺 岡治郎右衛門 大倉長十郎 藤田 光春
- 來迎拍子 村山 弘 大倉長十郎 藤田 光春

- 宗 論 茂山千五郎 岩崎 狂雲
- 一調網之段 金剛 巖 曾和 博明
- 仕舞 西行 藤 金剛 永藤 三郎 金井幾三郎 道雄
- 仕舞 藤 戸 種田 道雄
- 無間 廣田 泰三
- 後見 金剛 通成 地講 廣田 泰三
- 追 加 後見 金剛 通成 地講 廣田 泰三

観世静夫師 八世・鏡之丞を襲名

東京では、二月九日、松涛・観世能楽堂で襲名披露能が行なわれた。

なお七世・鏡之丞師は、昨年春寿を迎えたのを機に雪号「雅雪」を名のり、後進の指導にあたって

◎三回目番組 七月十九日(土)午後一時始

- 素謡 半 有賀 遊子 青木 武弘 長谷川 章
- 能 百 萬 西村 欽也 河村總一郎 眞 三男
- 能 小 督 西村 欽也 後藤孝一郎 眞 三男
- 附 祝 言 駒瀬 直也 加藤 保彦 観世 武雄

◎納会番組 九月二十日(土)午後一時始

- 素謡 俊 寛 小林 喜康 佐々木勝輝 観世 武雄 五木田武計
- 能 富士太鼓 西村 欽也 吉田 定男 柳原富司忠 眞 三男
- 後藤 孝江 野垣 慶子

昭和55年3月・4月放送予定

●NHKラジオ第一放送(毎週日曜午前10時15分)

(3月) 23日(日)宝生流「熊」三川 泉ほか
30日(日)(高校野球放送中止のとき)
和泉流「福の神」和田喜太郎ほか
和泉流「子盗人」大誠彌太郎ほか

(4月) 6日(日)宝生流「熊野」④大坪十喜雄ほか
13日(日)宝生流「上」④同 上
20日(日)観世流「蟻通」山階信広ほか
27日(日)観世流「夜村曾我」観世武雄ほか

●NHK・FM(毎週日曜午前7時15分)

(3月) 23日(日)観世流「仲光」木原康次ほか
30日(日)観世流「高砂」藤波重和ほか

(4月) 6日(日)観世流「杜若」④梅若六之丞ほか
13日(日)観世流「上」下
20日(日)喜多流「雲雀山」栗谷菊生ほか
27日(日)金春流「千手」高橋 汎ほか

(放送予定につき変更の場合はご了解下さい。)

演能案内

道成寺 伊藤 実 照

早川 俊一郎 地部 武岡 小川 久明 志田 志宏

謡曲本専門販売

株式会社 東文堂書店

名古屋市中区栄3-28-26 (松坂屋1丁南)

定休日 1F・毎水曜日 2F・毎火曜日

電話 (052) 241-1059・251-2805

医療衛生用品・育児用品・日用家庭用品

八神商事株式会社

YAGAMI SHOJI CO., LTD.

本社 名古屋市中区丸の内3丁目11番4号

〒460 電話<052>(971)代表8671番

東山整形外科

TEL 781-7835

東山公園駅下車 オークランドビル2F

名古屋銘菓 きよめ餅

熱田神宮東門前 株式会社きよめ餅総本家 TEL681-6161

道成寺 伊藤 実 照

早川 俊一郎 地部 武岡 小川 久明 志田 志宏

発行能楽の友社

名古屋市中区千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464) 電話 (731) 7984 振替口座 名古屋 36393 購読料 1年 700円 郵送の場合 1年 1000円 一 部 70円

能楽の友

題字は熱田神宮 藤田宮司筆

若い御二人の門出に ふさわしい結婚式場

名古屋 若宮八幡社

各種会合や宴会にも御利用下さい (駐車場完備) 名古屋市中区栄3丁目35-30 電話 (241) 0810

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

- [4月] 20日(日) 久田親正会春季大会 (来場歓迎) 27日(日) 鳳鳴会大会 (来場歓迎) 29日(祝) 幸友会春の会 (来場歓迎) [5月] 4日(日) 邦謡会 (来場歓迎) 5日(休) 巽会大会 (来場歓迎) 10日(土) 親世九皇会定期能 (有料) 11日(日) 青陽会定期能 (有料) 17日(土) 蒼翠会大会 (来場歓迎) 18日(日) やるまい会 (有料) 24日(土) 親世会土曜定期能 (有料) 25日(日) 観音会大会 (来場歓迎) 31日(土) 一福会叶石会大会 (来場歓迎) [6月] 1日(日) 清韻会能 (有料) 5日(木) 熱田神宮大祭奉納能 (来場歓迎) 8日(日) 親世会定期能 (有料) 15日(日) 故室生九郎宗家追善・宝生会定期能 (有料) 22日(日) 金春宗家還暦祝賀・名古屋金春会能 (有料) 29日(日) 故高安滋郎三回忌・西村弘敬七回忌高安会追善能 (有料) [7月] 5日(土) 委の会 (有料) 6日(日) 豊星会 (来場歓迎) 13日(日) 朝日狂言会 (有料) 19日(土) 親世九皇会定期能 (有料) 20日(日) 淡交会追善会 (来場歓迎)

(演能変更の節はご了承下さい)

金春信高師還暦記念

名古屋金春会能

6月22日 熱田神宮能楽殿

能杜若 素稚子と安宅

名古屋金春会の主催で熱田神宮能楽殿で催される。番組は、「杜若」小書袖神楽・素稚子(シテ金春信高)、能「安宅」(シテ本田光洋)の能二番はじめ、舞袖「高砂」(シテ金春安明)狂言「昆布売」(野村又三郎、井上礼之助)、仕舞「養老」(広瀬瑞弘)「鶴ノ段」(中村富次)「田村キリ」(横山紳一)「笹ノ段」(高橋汎)「笠之段」(金春晃夷)「熊坂」(瀬尾菊次)さらには連吟「新ノ段」(宇仁川吉助、後藤正男)。

金春流宗家・金春信高師の還暦祝賀能がたる六月二十二日(日)。

芸術選奨文部大臣賞

森田流 田中一夫氏受賞

昭和五十四年度(第三十回)芸術選奨の文部大臣賞、同新人賞の受賞者は三月十日文化庁から発表されたが、古典芸能部門の文部大臣賞に能楽界から森田流流方・田中一夫氏が受賞、三月二十五日、東京虎ノ門の国立教育会館で授賞式が行われた。授賞理由は、「管『九條乱曲』(梅若万紀夫能の会別会54年5月)、能・関寺小町(穂高光晴後援会能54年12月)などの流方を勤めて優れた演奏を示し、特にアシライの卓越した技芸と、愛物に於ける流麗で情愔ゆたかな演奏は円熟の境地を示すものであった。」として選奨された。田中一夫氏は、明治四十三年兵庫県姫路に生れ、昭和四十一年芸術選奨奨励賞、日本能楽会会員。本能楽会常務理事である。

金春信高氏が受彰

芸術選奨功労者表彰

社団法人日本芸術家団体協議会では、永年にわたりわが国の芸術文化の発展に尽くした功労者を表彰しているが、今回第六回の表彰にあたり、能楽協会から金春信高氏が受彰された。金春信高氏は大正九年金春光太郎氏の長男として生れ、七歳で初舞台、昭和二十六年金春流七十九世家元を継承、海外での能楽公演にも活躍、能楽協合理事長として国立能楽堂の設置に努力、現在日本能楽会常務理事である。

演能案内

鳳鳴会大会

四月二十七日(日)午前九時始 熱田神宮能楽殿

Table listing performers and roles for the Phoenix Festival. Columns include names like 高砂, 頼政, 雲雀, 求塚, 山姥, 草子, 藤子, 養老, 養子, 天鼓, 絵馬, 正砂, 高砂, 頼政, 雲雀, 求塚, 山姥, 草子, 藤子, 養老, 養子, 天鼓, 絵馬.

幸友会春の会

四月二十九日(祝)午前十時始 熱田神宮能楽殿

邦謡会

五月四日(日)午前九時始 熱田神宮能楽殿

Table listing performers and roles for the Spring Meeting and Folk Song Meeting. Columns include names like 道成寺, 伊藤実, 早川茂一郎, 長谷川島, 地謡, 武田久明, 小川完治, 藤井完治, 中川清治.

このたび師の三十三回忌追善能を催されるにあたり、まず思うことは、廣田家一門の結束の堅さ... 追 加 松野 恭三 今井 幾三郎 谷口 宗義 (五時半頃終演) 名 熱田神宮

行 紀 能

一つの籠

絵と文 二井栄逸

並木の柳が青い糸に点々と芽をつけ、ねこ柳はやわらかい銀色の穂をふくらまし初める。長い冬の暮しの中に明るい灯を燈すかのよう、自然はさまざま姿で春の息吹をおくりとけてくる。そして街ははなやぎ、人々の笑顔は明るくなる。

春の山道を歩くと、落葉樹の芽が色まざままの目にみはらなければならぬ。原野には美しい花々が咲き、なかには虫めがねで見なければならぬような草まが立派に花を咲かせているのに



おどろく、この頃は遠くまで摘草に出かける人がふえてきた。食べられる草も結構あるようで、健康づくりと多少の野菜源にもなるようである。

昔、吉野の勝手神社では、毎年正月七日に神供に供える若菜を菜摘女に命じ摘ませた。又、山城の園大原に幽居していた建礼門院は折りにふれて山にシキミ、ワラビを摘みに出かけた。

籠、小原御幸、二人静、求塚、等には、小道具の一つである籠が登場する。この籠は、直径八寸位縁の高さが二寸位で、手と足を一つ、木の葉を入れたものである。この小道具は、若菜摘みにもなり、木の葉拾いにもなり、みるめかりにもなる。

能の小道具というのは、作物(つくりもの)と違って、主演者が手に持つ扇、団扇、数珠、刺高数珠、杖、竹筒、打杖、御幣、草花えぶり(雷轟きのこと)さらえ(松葉掻きのこと)等で、この籠もその一つである。何のへんてつもないこの小さい籠は、若菜を摘む生田の川べりや、春尚浅い菜摘川のはとりを連想させる点景ともなる。背景の鏡板以外、何の装飾も許されない能舞台には、扇をのぞいた他の小道具や作物を出すのにも曲柄により最小限に抑制されるのである。それも省略された形でないとい能に示すには、並大抵の苦力では出来ないう。不可能を可能にする気魄。凝集された内なる力、能にはそれが強く要求されるのである。

仮設舞台の功罪

「釣狐」を観る会

野村又三郎さんが九度目の「釣狐」に挑んだ。その気概に敬意を表するにやぶさかでないが、総括して、前半白藏主の間があまりと息、後半狐になってからは大いに良し、というところだった。もちろんベテラン又三郎に難のあるはずもないが、全体になんとなく重々しく抑揚に乏しかったように思う。もっと酒脱味というか、人間味というか(狐に人間味もおかしだが)、白藏主に化けた狐、その狐は又三郎の化けたもの、という手の込んだ面白味、白藏主に化けた不安、うまくいったという安心感、エサに釣られる執着心等々、幾変化する又三郎狐の心の動揺を、軽く強めて欲しかった。もっと又三郎の「顔」が見たかったといってもいい。

皮肉にいうと難が過ぎ過ぎたといふことにもなるか。キャリアア十分、腕にも筋金入り、いままら大曲に負ける人でもないが、あるいは慎重になり過ぎたか、体力体調に問題はなかったか、相手の節師(野村方之介)とのやりとりは思存分又三郎の真価を發揮して、前半の溜飲を一度に下げさせ

ろこうした大曲では、ちよつとしたことが微妙に影響するものだ。とくに会場が広いホールの仮設舞台である場合はなおさらのこと。しかも見ている側からいうと、心技に極度の緊張を強いられる「釣狐」などになると、このマイナスは大きいだろう。階書で小手の利くところの妙味のある人だけに、利き味が散散してしまうのでは大に損だ。

ついでながら、背景の金屏風も気になった。なぜ仮設にしろ松羽目を使わなかったのか、秘曲だからやうやくしく、というのでも知らないが、「釣狐」とはおよそ不似合い、これも演者には損のうちは思存分又三郎の真価を發揮して、前半の溜飲を一度に下げさせ

観世流謡曲本

ちくさ正文館

ちくさ駅前
電話041137

独吟 鼓之段	中村外幾代	独吟 舟之段	竹内英雄	独吟 琴之段	水野美代子	独吟 三之段	三尾英子	独吟 鐘之段	都築健二	独吟 三之段	河野美枝	独吟 鐘之段	都築健二	独吟 三之段	河野美枝	独吟 鐘之段	都築健二	独吟 三之段	河野美枝
仕舞 鼓之段	中村康夫	仕舞 舟之段	宮川千尋	仕舞 琴之段	三田村康子	仕舞 三之段	天野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二	仕舞 三之段	河野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二	仕舞 三之段	河野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二	仕舞 三之段	河野美枝
小 堀之段	堀井敬子	春 堀之段	佐藤千代	仕舞 舟之段	宮川千尋	仕舞 琴之段	三田村康子	仕舞 三之段	天野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二	仕舞 三之段	河野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二	仕舞 三之段	河野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二
仕舞 舟之段	宮川千尋	仕舞 琴之段	三田村康子	仕舞 三之段	天野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二	仕舞 三之段	河野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二	仕舞 三之段	河野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二	仕舞 三之段	河野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二
仕舞 舟之段	宮川千尋	仕舞 琴之段	三田村康子	仕舞 三之段	天野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二	仕舞 三之段	河野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二	仕舞 三之段	河野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二	仕舞 三之段	河野美枝	仕舞 鐘之段	都築健二

名古屋観世九臈会定期能(三回)

五月十日(土)午後一時始

熱田 神宮 能楽殿

〔御来場歓迎〕

高橋 豊子
西村 欽也
飯富 雅介
井上礼之助
今枝 貞雄
佐藤 融

〔有料〕

能 頼 政 西村 欽也 河村総一郎 寛 三男
能 頼 政 西村 欽也 河村総一郎 寛 三男
能 頼 政 西村 欽也 河村総一郎 寛 三男

能吉野天人

高木美智子 西村 欽也 鬼頭 英二 助川 龍夫
加藤保彦方 電話05216111三六五九
名古屋 観世九臈会
電話0526711292(能楽殿)

能謡史跡を守ろう

活動する京都 謡曲 保存会

第二十四期 第一回 青陽会 能

五月十一日(日) 午前十時始

名古屋猫謡会大会

五月十七日(土) 午前十時始

狂言やるまい会

能謡史跡を守ろう

活動する京都 謡曲保存会

京都に数多い能謡史跡を保存し、由緒ある史跡を後世に継承しようと結成された「京都謡曲史跡保存会」は本紙で既報のように発足以来、意欲ある活動を行っており、京都府、京都市もバックアップしているが、このたびさらに全国にこの運動をひろめ能謡史跡を守るため会員を募集、その賛同をよびかけている。

なお、同会では、このほど「京都謡曲史跡ガイド」を刊行、カラ版で、謡曲史跡の所在地、関係曲名を明示し、また主な史跡の山絡をのべ交通案内を付けている。

会員は入会金五百円、年間二千円で、史跡めぐり、観光、講演会などに案内する。また前記の「史跡ガイド」が無料で配布される。

同会の上げかけは次のとおりである。

荒廃する能謡史跡を
私達の手で守りましょう

京都には、六百年の歴史をもつ数多くの能謡史跡が数多くあり、それらは京都にとって重要な名古屋金春会能

「杜若・袖神楽」

「杜若」には各流に独特の小書(替わり演出)があって、宝生は「沢辺之舞」、観世は「恋之舞」、金剛は「日陰の糸」などがあるが今回は金春秘蔵の「袖神楽・素羅子」(そでかぐら・しらばやし)の小書で上演される。

この小書の上演は、地次第のあと、イロエもなく、クリ、サン、クセも省き、「花前に舞舞ふ、粉々たるゆき」となつて舞にかかるとである。序の舞である。舞の初めにシテは両袖のツニを両手で持つて選擇して左右のようにする。その間に特別の足拍手を七つむこの袖扱をするのが「袖神楽」であり、大、小鼓はその「袖神楽」をハヤシしている格調の高さを示す型である。

シテは角へ行き、左へ廻り、小前で左右するが、これが素羅子

観光資源であるばかりでなく、全国数千方にのぼる能謡愛好者にとつて貴重な、生きた資料でもあります。

それが今や荒廃の危機に瀕してあります。訪づれる人の指針ともなる駒札は朽ち、謡曲にうたわれた花の精は枯れ、なかには道しるべも失なわれていきます。この出緒ある史跡を後世に残し守っていくため、ここに心ある同志を結集し既に保存の手をさしおのべてきました。更に、これを全国にひろげ能謡史跡を守りたいと思います。

何卒御賛同を協力下さい。

なお本会が行なつた保存への微力はつぎの通りです。

〔駒札設置〕金札宮、車道、合植稲荷、小鏡治、上品蓮台野、土蜘蛛東北院(軒端梅支柱取替及竹垣設置)

〔周辺整備〕男塚、女郎花

事務局 京都謡曲史跡保存会
 京都市下京区四條通西洞院東入
 電話(075)333-1611
 郵便振替 京都三三六三
 会長 渡辺 恵介、副会長 中村 京三
 同平野 嘉一

の型である。ここで序の舞の初段となり、以後は終りまでパンシキ調となる。パンシキ調であるから軽ろやかで重くれたものでなく舞の舞は三段で終る。

舞のあと、「替男の名をとめて」の次の特殊なイロエがあって、シテは橋掛りに出て三の松で正を向き左袖をかついで見渡す型があり、ハヤシにつれて舞台に戻るの型である。

ここで序の舞の初段となり、以後は終りまでパンシキ調となる。パンシキ調であるから軽ろやかで重くれたものでなく舞の舞は三段で終る。

舞のあと、「替男の名をとめて」の次の特殊なイロエがあって、シテは橋掛りに出て三の松で正を向き左袖をかついで見渡す型があり、ハヤシにつれて舞台に戻るの型である。

第二十四期 第一回 青陽会 能

五月十一日(日)午前十時半始
 熱田 神宮 能楽殿

鶴	素	田	網	善	須	萬	百	敦	蝉	海	附
飼	落	之	界	山	舞	萬	仕	盛	丸	士	祝
長谷川 章	大野 弘之	村ヶ七	高橋 一	前野 郁子	服部 紗枝	服部 紗枝	飯富 雅介	飯富 雅介	飯富 雅介	西村 欽也	〔有料〕
青木 武弘	井上松次郎	松山 幸親	須部 甫	今沢 美和	後藤孝一郎	後藤孝一郎	佐藤 友彦	佐藤 友彦	山崎 亮二	山崎 亮二	後援
加藤 幸親	佐藤 秀雄	加藤 幸親	須部 甫	今沢 美和	後藤孝一郎	後藤孝一郎	佐藤 友彦	佐藤 友彦	山崎 亮二	山崎 亮二	中日新聞
加藤 幸親	佐藤 秀雄	加藤 幸親	須部 甫	今沢 美和	後藤孝一郎	後藤孝一郎	佐藤 友彦	佐藤 友彦	山崎 亮二	山崎 亮二	新
加藤 幸親	佐藤 秀雄	加藤 幸親	須部 甫	今沢 美和	後藤孝一郎	後藤孝一郎	佐藤 友彦	佐藤 友彦	山崎 亮二	山崎 亮二	聞
加藤 幸親	佐藤 秀雄	加藤 幸親	須部 甫	今沢 美和	後藤孝一郎	後藤孝一郎	佐藤 友彦	佐藤 友彦	山崎 亮二	山崎 亮二	会

名古屋猶謡会大会

五月十七日(土)午前十時始
 熱田 神宮 能楽殿

山	遊	砧	木	幸	乱	半	小	羽	山	高
姥	行	子	賊	都	能	芭	鍛	衣	姥	砂
鈴木 八寿	中村 炎	梅若 盛彦	池内幸三郎	武藤 忠津	奥田 敬子	西村 欽也	飯富 雅介	神田佳代子	鈴木 八寿	松久 知代
菊池 重郷	浅野種三郎	梅若 盛彦	高橋 京子	木村 実	河村総一郎	河村総一郎	飯富 雅介	吉田定男	吉田定男	吉田定男
菊池 重郷	浅野種三郎	梅若 盛彦	高橋 京子	木村 実	河村総一郎	河村総一郎	飯富 雅介	吉田定男	吉田定男	吉田定男
菊池 重郷	浅野種三郎	梅若 盛彦	高橋 京子	木村 実	河村総一郎	河村総一郎	飯富 雅介	吉田定男	吉田定男	吉田定男
菊池 重郷	浅野種三郎	梅若 盛彦	高橋 京子	木村 実	河村総一郎	河村総一郎	飯富 雅介	吉田定男	吉田定男	吉田定男
菊池 重郷	浅野種三郎	梅若 盛彦	高橋 京子	木村 実	河村総一郎	河村総一郎	飯富 雅介	吉田定男	吉田定男	吉田定男

狂言やるまい会 第二十三回公演

五月十八日(日)午後一時半始
 熱田 神宮 能楽殿

首	宗	越	清	萩
引	論	後	水	大
野村万之丞	茂山千五郎	野村又三郎	野村 信行	野村 万作
野村万之丞	茂山千五郎	野村又三郎	野村 信行	野村 万作
野村万之丞	茂山千五郎	野村又三郎	野村 信行	野村 万作
野村万之丞	茂山千五郎	野村又三郎	野村 信行	野村 万作
野村万之丞	茂山千五郎	野村又三郎	野村 信行	野村 万作
野村万之丞	茂山千五郎	野村又三郎	野村 信行	野村 万作
野村万之丞	茂山千五郎	野村又三郎	野村 信行	野村 万作
野村万之丞	茂山千五郎	野村又三郎	野村 信行	野村 万作

昭和55年4月・5月放送予定

● NHKラジオ第一放送 (毎週日曜午前10時15分)

〔4月〕

20日(日) 観世流「蝶通」山階信広ほか

27日(日) 観世流「夜討曾我」観世武雄ほか

〔5月〕

4日(日) 喜多流「雲雀山」粟谷菊生ほか

11日(日) 観世流「杜若」梅若六之丞ほか

18日(日) 同 上

25日(日) 金春流「千手」高橋 汎ほか

● NHK・FM (毎週日曜午前7時10分)

〔4月〕

20日(日) 喜多流「雲雀山」粟谷菊生ほか

27日(日) 金春流「千手」高橋 汎ほか

〔5月〕

4日(日) 宝生流「草子洗」野村蘭作ほか

11日(日) 同 上

18日(日) 観世流「園栖」浅見真高ほか

(放送予定につき変更の場合はご了解下さい。)

ちくさ駅前 電話1137

仕舞放生 川 半田 智子 部 野アト溝口 乙子

江 口クセ横井 敬子 鉄 輪 木村 ひで

君 丹羽 久子

加藤保彦方 電話052-161-1365九

主催事務所 名古屋観世九草会

電話052-671-2912(能楽殿)

社 18 4 3 円 円 一

十七世宗家・宝生九郎師追善

演能案内

任舞高 胡蝶 砂 落 上田 藤井 敏枝 東 北川 三輪 夏巳 藤原 山本 恵子 藤田 昭彦

「弱法師・盲目の舞」シテ(殿島修二)の杖の扱いはやや荒きがあり音が高すぎます。昨日今日の盲目という訳でもなく、出自は名家なのですからむずかしいところですね。

ハ石の鳥居こねれや、は柱に直面(箱柱背)して軽く擦り下します。ワキ(谷田宗二郎)との間答は平板、シテに元気がありません。施行はアイ(佐藤友彦)が行ない、それをワキが見守るので四天王の終結を述べるクリ・サシ・クセが抜けて一気に話の核心に迫っても、我が子と認める独白からシテの間答になるのに唐突さは感じません。

しかし、ワキとの掛合から地(梅田邦久他)のハ入日の影も舞ふとかや、とハ松へゆき、更に盲目の舞から地との掛合の裡にハ松へゆき、ハ長柄の橋の徒らに杖で勾欄を擦る演出は、ハ松へ往復している風が面白くありません。ただハ貴賤の人に行き違ひの、と大胆に正光までつと出たのは、これまで何となく波瀾していた気分を拭拭して出色でした。切はワキが促してのものです、アイの送り込みの方に余情があると思えます。

上田一門による「箱」は地頭上田照也の統率のよくとれた地が曲題を巧みに、特に前場に見応えがありました。ワキ(岡治郎右衛門)の名前は自戒めいて沈痛。ツレ(前野都子)の道行の裡に大小(欽一・笛司忠)があしらいワキは中入ですが、これは道行と送り込みの両方に掛けるのでしようか? やがて洞口に案内を乞うツレが後見座にくつろぐと、大小のアシライ出しでシテ(久田秀雄)が深井に姫小松親文段唐織着流の臨陣けた姿を見せます。

サシの呪詛するようなシテの独白に人の気配を察し、再度案内を乞うツレに我に返ったシテが詰問口調で「人までもあるまじこなたへ来り候へ」と強く言い切り、両者無言のまま舞台上に下居する間の張り詰めた静寂な時間が、以後へ爆発する怒喝を暗示して惹きつけます。好調の地がシテの胸中を切々と語り、次いで砦の音を廻る問答はしんみりとツレの労りが優し

く、物着で右肩を脱いだシテは臨座前の作物に対し、ツレとの掛合です。

地次第、ハ夜寒を風や知らずらん、は嬋々として恰も漆黒の闇の中を風に舞ってシテの情が木霊するように思え、シテは立つと風に吹かれるように常座へゆき、ツレはひそと地前に下居しますが、この辺の寂寥感に砦の段で一番増幅され、詞章に添ったシテの的確な描写力と相俟って地がシテの心象をよく表現して好演です。更にクドキの、ハ変り果て給ふぞや、の双シオリの長さに悲嘆の深さが思われ、幕入後に、ハ終に空しくなりけり、と地のリフレインだけが残響して死が象徴的に描かれ、印象に残ります。

後場はや、教科書的で平凡、風味に欠けます。太鼓有のムードにリズムに倣ってしまつた所為で

を見せるのです。

後場の斬組も無難ですが、立衆の数が少なく(因に親世会春の別会では七名)義経万とのバランスに欠け、またスペクタクルな能なので仏倒れのような派手な型もあっていいと思います。(以上三月二日青陽会追善別会所見)

「小袖曾我」はシテ十郎(梅若盛彦)、ツレ五郎(梅若修)がいつもながらの絶妙なコンビで息の合った見事な相俵を見せます。男舞の途中、黒地松皮取取鶴に格子文様の直垂の袖を脱ぎ、丁度「延年之舞」のように跳び上りさま両袖を巻き、パッと安坐した鮮烈な姿は総髪頭、清新の氣に溢れ、精彩を放ちました。

髪物は岡田朗助の「采女・美奈保之伝」です。指を渡る松頼にも似た名宜留(藤田六郎兵衛)にひかれて、ワキ(西村欽也)、ワキ

上ると暗い幕内から青色の無地ノシ目を被いたシテが、囃子に乗ってゆつくり出るとハ松で膝をつき、そのまゝサシを誦しながらノシ目を後ろに捨て、ハ池の蓮の台に、と水から浮び出る風に立ちます。シテの着付は白摺箔、水色の大口、金糸で柳と鶴世水をあしらった水色の長袖は露も胸紐も水色です。その姿は水の精そのものです。長絹の金糸の柳を揺らめかせハ変成男子、と軽く袖捌きしてワキにあしらう姿、また序の舞の途中で橋懸へ行き、二ノ松で正に直してハ二足踏めたとき、囃子が瞬時途絶え、弱し弱しから勾欄に乗り出す位に出ると水底を覗く態に舞う姿は、まことに猿谷の池面にキラキラときらめく春の光と戯れる水の精のようなファンタスティックな美しさが漂います。

切はハ讃仏衆の、でハ松を過ぎ、ハ因縁なるものを、と別れを惜しむようにワキにあしらい、余韻をひいてだんだん小さくなりながら池の底へと帰ってゆく様は、シテの主張が適切に表現され、美声の調と相俟って清浄世界を現出しましたが、各役の好演も与かって力があり好舞台でした。(一時間四十分)

「葉上」はシテ熊沢惠美子。幕を放れてからハ松で一セイ、常座で忿怒が凝固したかと思わせる佇立してのサシから下歌・上歌正中下居してのクドキ、と恨みを言わずにはいられないもどかしさが沸々と込み上げてくる気持を慎みをもって謡うところにシテの品位を垣間みます。

後場はワキとの闘争、就中橋懸での攻防に生彩があります。追い立てられて幕際まで退ったシテが逆に打杖を振りたてワキを追い立て、ハ松では長嘆息するように天を仰ぎ、更に舞台上に入つてワキを睨めまわし身を振って高々と打杖を振りかざす怒濤の瀧な描写に流れるがあり、これがハ即身成仏、とどんと安坐し、ハあらあら恐ろしの般若声や、と耳を覆うまでの過程に無理がなく、愛憎の葛藤の果ての怨怒が吹切れて昇華してゆくキリに旨く響きます。(以上三月九日梅猶会所見)

第18回北陸中日能 9月21日金沢で

第十八回北陸中日能は、今秋九月二十一日(日)金沢市・石川厚生年金会館で開催される。演能予定は次のとおり。

観世流能、「田村」替装束(シテ梅若盛彦、ワキ南岩夫、笛・片岡吉雄、小鼓・住駒幸英、大鼓・飯島佐之六)

宝生流能「熊野」膝行・三段之舞(シテ野村蘭作、ツレ渡辺容之助、ワキ江崎金治郎、笛・貞光義次、小鼓・吉阪修一、大鼓・河村総一郎、太鼓・渡谷清一郎)

狂言「寝音曲」(茂山忠三郎、遠藤治郎)

ほか宝生流、観世流仕舞十番、十二時三十分開演。

各地だより

岐阜 岐阜護国神社大祭奉納 第二回 鶴舞能
 岐阜護国神社大祭の奉納として昨年をはじめ本年は第二回として四月八日午後四時半から同神社神楽能舞台で半能「三輪」狂言「梅舞」火入れ式をはさんで囃子、鎖調、連調など二十数番が上演された。

能面と装束展
 尼崎市総合文化センター
 一では、さる二月九日から三月九日まで一カ月間にわたって能面と装束展を開催した。

西田正好氏逝去
 能楽評論家・中日五流能などの企画・運営にあたる西田正好氏の長男・正好氏は三月七日心筋梗塞のため急逝された。四十八歳葬儀は八日、名古屋市中区山崎町八十一の自宅で営まれた。喪主・妻篤子さん。西田正好氏は愛知県徳大教授、中世日本文学の専攻で著書に「無常観の系譜」「利休と芭蕉」「花鳥風月のこころ」などがある。

目録

■生きた設備を誇る日進堂
 メガネ調整設備は、正しいメガネ・快適なメガネづくりの根本です。日進堂は視力測定・メガネ調整用の諸設備はもちろんのこと、必要なときには数分でピックアップできる…お客様一人一人の視力記録システムなど常に生きた設備の充実を心がけています。

■ビス一本にも全神経を集中する日進堂
 メガネ店の技術をかさえるもの—それは、お客様の信頼におこたえする責任感とまごころです。正しいメガネを安心してご使用いただくために、日進堂は、たとえビス一本にも全神経を傾倒しています。

■徹底した日進堂のアフターサービス
 メガネをいつも正しく、最良の状態でご使用いただけるよう努めることもメガネ店のつとめです。日進堂は可能な限りの修理サービス、レンズ・フレームの清掃サービスを無料で行ってまいります。いつでもお気軽にお立ち寄り下さい。

定休日 毎週木曜日

正しいメガネでしあわせを……

目録メガネの日進堂

◎駐車場完備 名古屋市中区那古野2-20-23(円頓寺本町)
 451 TEL (571) 6181-3

檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
 〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入

電話 (291) 2488-9
 振替東京 3-3552
 電話 (231) 1990
 振替 京都 113

城

割烹・小料理

●熱田神宮能楽殿喫茶部
 ●住吉小路(中区栄3-10)
 電話 241-0248
 ●喫茶・グリル(愛労研地下ビル)
 電話 731-1128

熱田神宮大祭奉納能

六月五日(木)午後一時始
熱田神宮能楽殿

松	虫クセ	服部 紗枝	野田 慶子
小鍛冶	長田 颯	地謡 高木 美和	今沢 美和
西王母	西村 欽也	福井 啓次郎	森本 重一
河井 隆子	牧野 元子	野田 慶子	吉田 慶子
後見 豊嶋三千春	吉川 周子	地謡 山田 清治	野田 慶子
後見 吉川 周子	地謡 山田 清治	野田 慶子	吉田 慶子
後見 豊嶋三千春	吉川 周子	地謡 山田 清治	野田 慶子
後見 吉川 周子	地謡 山田 清治	野田 慶子	吉田 慶子

楊貴妃

六月八日(日)十二時半始
熱田神宮能楽殿

林 能	西村 欽也	河村 總一郎	寛 三男
後見 金春 瑞弘	地謡 加藤 勝利	鬼頭 喜正	吉田 慶子
後見 金春 瑞弘	地謡 加藤 勝利	鬼頭 喜正	吉田 慶子
後見 金春 瑞弘	地謡 加藤 勝利	鬼頭 喜正	吉田 慶子
後見 金春 瑞弘	地謡 加藤 勝利	鬼頭 喜正	吉田 慶子

能楽協会名古屋支部 御來場歓迎

六月八日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

能	野村 又三郎	井上 松次郎	後見 豊嶋三千春
能	野村 又三郎	井上 松次郎	後見 豊嶋三千春
能	野村 又三郎	井上 松次郎	後見 豊嶋三千春
能	野村 又三郎	井上 松次郎	後見 豊嶋三千春
能	野村 又三郎	井上 松次郎	後見 豊嶋三千春

春夏秋冬

六月十五日(日)午後一時始
野村 又三郎

春は、狂言の井上松次郎氏の名古屋市芸術賞受賞(第一回、二月)の約(野村又三郎、二月)藤田昭彦の会(江口・平調返、四月五日)、観世元正・元昭両氏が共に親子(元正・清和の熊野、元昭・清和の国栖)出演の観世会(初回、二月)と梅田邦久氏の斯道三十周年記念能(求塚、二月)など話題は多い。

観世は三月中旬の観世土曜会から、久方振りの熱田の森は私に生気を与える。観世武雄氏の舟弁慶がきれいに能装の牙を見せる。故父喜之氏もこの曲がお好きだった。

二月の松次郎氏受賞式には医師の特別の許しを得て出席する。その席上で、藤田六郎兵衛氏が述

観世会定式能(三回)

六月八日(日)十二時半始
熱田神宮能楽殿

安達原	殿島 修二	青木 武弘	長谷川 章
網之段	藤波 重調	地謡 久田 幸親	梅田 邦久
玉之段	杉浦 元三郎	地謡 清沢 邦久	梅田 邦久
川上	野村 又三郎	佐藤 友彦	梅田 邦久
隅田川	西村 欽也	後藤 孝一郎	藤田 六郎兵衛
後見 藤波 重調	地謡 加藤 勝利	梅田 邦久	吉田 慶子
後見 藤波 重調	地謡 加藤 勝利	梅田 邦久	吉田 慶子
後見 藤波 重調	地謡 加藤 勝利	梅田 邦久	吉田 慶子

京都謡曲史跡保存会の顧問の方々

山緒ある能謡の史跡を後世に残そうと「京都謡曲史跡保存会」は本紙前号既報のように多面的な活動を繰りひろげつつあるが、同会は次の方々が顧問になっている。(順不同)

- 観世流宗家・観世元正氏、金剛流宗家・金剛殿氏、金春流宗家・金春信高氏、宝生流宗家・宝生英雄氏、京都府知事・林田修紀氏、京都市長・船橋元巳氏、京都府文化事業団理事長・上村松篁氏、検書店社長・樽常太郎氏、京都観世会会長・片山博太郎氏、能楽協会京都支部長・井上嘉久氏、能楽評論家・沼津雨氏、弁護士・能谷康次郎氏、京都新聞社社長・白石英司氏、ワコール社長・塚本幸一氏、立石電機会長・立石一真氏、寒千家・千家宗氏、淡交社社長・納屋嘉治氏、相愛女子短期大学教授・田中重太郎氏、京都大学名誉教授・菅泰男氏、国学院大学教授・樋口清之氏、野田醤油社長・茂木佐平治氏、山之内製菓社長・中村盛太郎氏、大昭和製紙副社長・井上省三氏、能楽協会神戸支部長・上田照也氏。

名古屋宝生会定式能(第二十四期)

六月十五日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

番	熱田 神宮 能楽 殿		
後見 藤波 重調	地謡 加藤 勝利	梅田 邦久	吉田 慶子
後見 藤波 重調	地謡 加藤 勝利	梅田 邦久	吉田 慶子
後見 藤波 重調	地謡 加藤 勝利	梅田 邦久	吉田 慶子
後見 藤波 重調	地謡 加藤 勝利	梅田 邦久	吉田 慶子

と云え云える。しかも内容はすこぶる充実、その充実ぶりを味い尽くす時間的余裕が十分あったことを

「これは大変だ」と頭から恐れ入った人が大部分ではあるまいか。出来能には習い事、秘事、口伝

「御來場歓迎」

主催 大河清韻会

【有料】

会員券申込先 能楽殿及び出演各楽師宅

全自由席 三〇〇〇円 学生席(階上)一、五〇〇円

能楽史新考(一)

判頁 570 定価七、五〇〇円

世子参究

判頁 520 定価六、〇〇〇円

わんや書店

〒100 千代田区神田神保町3-1-9
電話 〇三(二六三)六七七一番
振替東京 五一四一六三番
〒100 中央区銀座8-1-7-15
電話 〇三(五七一)〇五一四番

金春信高還暦記念 名古屋金春会能

六月二十二日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

高砂	金春 安明	後藤 孝一郎	藤田 昭彦
養老	中村 富次	後藤 孝一郎	藤田 昭彦
鶴	後見 金春 晃実	小林 嘉行	横山 菊次
若	西村 欽也	後藤 孝一郎	藤田 昭彦
杜	後見 金春 晃実	小林 嘉行	横山 菊次
昆布	野村 文三郎	井上 孔之助	
田	村 幸一	横山 菊次	
笹	高橋 汎		

四月の舞台から 秀夫の「通盛」と 万三郎の「桜川」

「通盛」は大槻秀夫の筆名から
は不向きの感があります。シテ(主人
人公)の内面に深く沈潜してゆき
そこからじわりと味わいが出てく
るような筆致ですから、ツレを伴
わないシテにその真骨頂を發揮し
ます。そしてそのシテを支えるの
には見所も与らなくてはなりません。
名古屋観世会、立派な余地
なく詰め込まれた何か複雑な見所
では、秀夫は恐らくシテの内面に
没入しきれないもどかしさを感じ
るでしょう。それに声質もあまり
す。謡本を目で追いつくなら自ら
耳に入ってくるような響きと違い
じつくりと耳を集めさせる質の
謡です。当然そこにはシテと見所
との一体感が育まれ、シテの役へ
の集中力が生かされるでしょう。

ワキは京都から岡治郎右衛門。
鶯色角帽子・茶の無地野目、銀
鼠の水衣は枯淡の老僧で、運びに
興があります。座付くと直ぐ常座
に舞火をつけた州が出ます。大小
前から正先まで、そこには黒々と

薪	後藤 孝一郎	藤田 昭彦
熊笹	金春 晃実	藤田 昭彦
坂	後藤 孝一郎	藤田 昭彦
安宅	後見 金春 晃実	小林 嘉行
附祝言	後藤 孝一郎	藤田 昭彦
主催	名古屋金春会	
後援	名古屋市中区東区三丁目三番地	
入場券	指定席五千元・自由席三千元・学生席千五百円	

カケリからキリへ、三十歳で死
去したという薄幸の公達武者の、
如何にも影の薄い印象を、秀夫は
何の街にもなく淡々と舞い、合戦
譚の所作さえもさらりと澄明で、
短い夏の夜の一場の夢を淡彩の歴
史画に写したような趣なものです。
「桜川」の万三郎は、秀夫とは
対照的に、感性の優った筆致で、
役に没我的にのめり込んでゆく印
象を受けます。

後場。正中の居合せは激々し
い武者振りが静謐の裡に在り、秀
夫の持味がよく出ています。へ名
残惜しみのお茶と、酌をするここ
も懸障場とはならず、却ってし
みじみとしたものを感じます。

高安滋郎三回忌 西村弘敬七回忌 高安会追善能楽会

六月二十九日(日)
熱田神宮能楽殿

序	竹内 澄子	高安 勝久	中川 久利	伊藤 久利	藤田 昭彦
第一	高安 勝久	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦
第二	高安 勝久	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦
第三	高安 勝久	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦
第四	高安 勝久	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦
第五	高安 勝久	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦
第六	高安 勝久	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦
第七	高安 勝久	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦
第八	高安 勝久	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦
第九	高安 勝久	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦
第十	高安 勝久	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦	藤田 昭彦

万感の思いを、誰よりも万三郎
は感じていることでしょう。
しかし、シテ・ワキ問答は、シ
テのサシで大方の身の上話ばき
ているので些か冗漫に感じました
が、ワキ・ワキツレ問答を省いた
ため、へあら笑止、俄かに山頂
の、流るる花をすくはん、の二
度返しの裡に、後見から四ツ手綱
を翻に替ると、イロエから大小
前に佇立のま、地との掛合は何や
ら哲學的賞賛のやりとりですが、
舞グセから再び扇を四ツ手綱に替
えると、「網之段」を万三郎以下の
地に舞って思入入れたっふりな表
情で舞います。

第二部 午後三時始

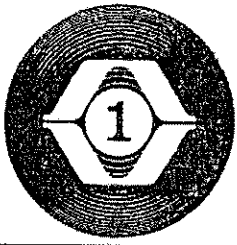
西行	河村 鉦三	高橋 久
笹	河村 鉦三	高橋 久
松	河村 鉦三	高橋 久
天鼓	河村 鉦三	高橋 久
敦	河村 鉦三	高橋 久
和布	河村 鉦三	高橋 久
雲雀	河村 鉦三	高橋 久
杜遊	河村 鉦三	高橋 久
藤行	河村 鉦三	高橋 久
大蛇	河村 鉦三	高橋 久
魚説	河村 鉦三	高橋 久
道成寺	河村 鉦三	高橋 久
追加	河村 鉦三	高橋 久

追加
主催 高安会
事務所 西村弘敬七回忌
事務所 西村弘敬七回忌
事務所 西村弘敬七回忌

第15回 名古屋新能

演能案内

梅田 邦久
観世鏡之丞
岡治郎右衛門
後藤 孝一郎
藤田 六郎兵衛



現代をみつめる眼
東海テレビ

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7 9 8 4

振替口座 名古屋 36393

購読料 1年 700円

郵送の場合 1年 1000円

一 部 70円

理事は熱田神宮 藤田宮司兼

興があります。座付くと直ぐ常座に舞火をつけた舟が出ます。大小前から正先まで、そこには黒々と

残惜しみのお盆、と約をするところも怒鳴場とはならず、却ってしみじみとしたものを感じます。

舞いますが、足拍子に落花の様な写す風情があります。そして、へん思いも深き花の飾、と角で見上げ

るような空気を感ぜさせる万三郎の情緒です。
(四月十三日・観世会所見)

第15回 名古屋新能

8月2日 能3番上演

「名古屋新能」はことし第十五回をむかえ、きたる八月二日(土)熱田神宮神楽殿前、特設舞台で開催される。

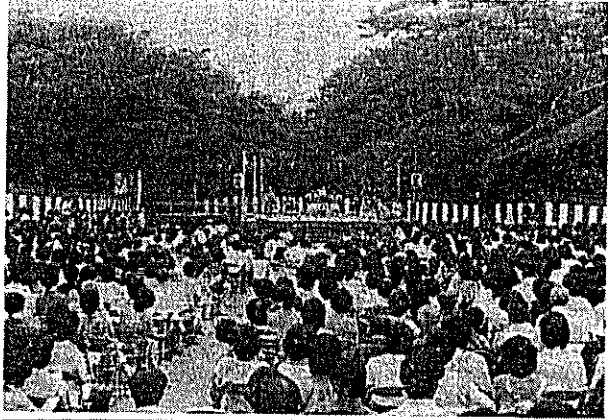
本年は、観世流、宝生流による能三番、狂言、囃子、仕舞など。午後四時半開演、恒例の火入れ式が熱田神宮宮長谷福宮司によって厳かに行なわれる。

能組は次のとおり。
宝生流能「蟬丸」(シテ戸田和、ツレ竹内澄子)
観世流能「雲林院」(シテ塚本秀雄)
狂言「山伏」(野村又三郎ほか)
観世流能「紅葉狩」(シテ梅田邦久)

「名古屋新能」は、納涼能楽の夕として昭和四十一年から能楽協会名古屋支部主催、名古屋市の後援で毎年催され、盛夏の夕べ、緑蔭に

くりひろげる野外能として市民に定着してきた。

前売券千三百円、当日券千五百円。邦久



国立能楽堂起工式

5月7日 東京・千駄谷で

昭和五十七年内完成をめざして国立能楽堂の起工式が五月七日、文化庁長官、能楽協会、日本能楽会、建設省関係者が出席して東京・千駄谷四一八の建設予定地で行なわれ、いよいよ着工することになった。

この国立能楽堂は、昭和四十五年ごろから能楽界の要望にこたえて計画がすすめられてきたもので昭和四十九年に、能楽協会、日本能楽会から「国立能楽堂設置要望書」が文化庁に出され、芸術文化専門調査会に能楽部門が加えられ建設促進の態勢がすすめられてきたものである。

計画によると、敷地面積は八三〇九・一平方メートル、地上二階、地下一階建、建築面積四六〇七・九六平方メートル、延床面積一〇四六・五平方メートル。年次予算累計計による総工費は四十一億円が見込まれている。

写真は熱田神宮神楽での第14回名古屋新能

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

〔6月〕

- 15日(日) 十七世宗家宝生九郎先生追善・宝生会定式能 (有料)
- 22日(日) 金春宗家還暦祝賀・名古屋金春会能 (有料) (番組①面)
- 29日(日) 故高安滋郎三回忌・西村弘敬七回忌 高安会追善能 (有料) (番組①面)

〔7月〕

- 5日(土) 葵の会 (有料) (番組②面)
- 6日(日) 豊星会創立50周年記念人会(来場歓迎) (番組②面)
- 13日(日) 朝日狂言会 (有料) (番組③面)
- 19日(土) 観世九郎会定期能 (有料) (番組③面)
- 20日(日) 淡文会追善会 (来場歓迎)
- 27日(日) 観世会素謡会 (有料) (番組④面)

〔8月〕

- 2日(土) 第15回名古屋新能 (有料) 会場 熱田神宮境内特設舞台
- 9日(土) 井上松次郎師名古屋芸術特賞受賞祝賀記念狂言会 (有料)
- 10日(日) 青陽会定期能 (有料)

〔9月〕

- 6日(土) 人間国宝野村万蔵追善狂言会 (有料)
- 14日(日) 観世会定式能 (有料)
- 15日(祝) 熱田紳士能 (来場歓迎)
- 20日(土) 観世九郎会定期能 (有料)
- 21日(日) 和泉流狂言会 (来場歓迎)
- 23日(祝) 泉楽会秋の会 (来場歓迎)
- 27日(土) 梅若盛義後援会能 (有料)
- 28日(日) 宝生会定式能 (有料)

(演能変更の節はご了解下さい)

演能案内

金春信高還暦記念

名古屋金春会能

六月二十二日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

杜

若 西村 欽也 後藤孝二郎 児頭喜太郎
素謡子 藤田六郎兵衛

安

宅 小島 光洋 河村総一郎 藤田 昭彦
林 芳樹 高武功 井上松次郎
西村 欽也 佐藤友彦

附祝言

主催 名古屋金春会
後援 中日新聞

高安滋郎三回忌 西村弘敬七回忌

高安会追善能楽会

六月二十九日(日)
熱田神宮能楽殿

第一部 午前十時半始

咸陽宮

竹内 澄子 山崎 俊輔 吉田 良定 鬼頭川 竜夫
戸田 和子 西村 欽也 福井 久男
内藤 孝二 堀田 雅三 井上 礼之助
辰巳 孝三 堀田 雅三 井上 礼之助

梟山伏

野村又三郎 佐藤 秀彦

梅田邦久
観世流之丞
岡治郎右衛門 後藤孝二郎 藤田六郎兵衛
野村又三郎

出演楽師宅・熱田能楽殿 (電話) 七三三
一部・二部各全自由席五千円
千原名古屋瑞穂区仁所町二四四五
西村欽也方 (電話) 八〇五二〇八三二一五九一九

昭和55年6・7月放送予定

NHKラジオ第一放送 (毎週日曜日午前10時15分)

〔6月〕

- 15日(日) 宝生流「草子洗」野村蘭作ほか
- 22日(日) 観世流「班女」山本真賀ほか
- 29日(日) 金春流「千手」高橋 汎ほか

〔7月〕

- 6日(日) 観世流「安達原」梅若万紀夫ほか
- 13日(日) 観世流「女郎花」関根祥六ほか
- 20日(日) 宝生流「歌占」近藤 礼ほか
- 27日(日) 金剛流「頼政」金剛 巖ほか

NHK・FM (毎週日曜日午前7時10分)

〔6月〕

- 15日(日) 観世流「夜討曾我」観世武雄ほか
- 22日(日) 観世流「鶴」井上嘉久ほか
- 29日(日) 宝生流「歌占」近藤 礼ほか

〔7月〕

- 6日(日) 観世流「通盛」谷村一太郎ほか
- 13日(日) 金春流「天鼓」松間金太郎ほか
- 20日(日) 同上
- 27日(日) 観世流「班女」山本真賀ほか

(放送予定につき変更の場合はご了解下さい。)

出演楽師宅・熱田能楽殿 (電話) 七三三
一部・二部各全自由席五千円
千原名古屋瑞穂区仁所町二四四五
西村欽也方 (電話) 八〇五二〇八三二一五九一九

事務所 西村欽也方 (電話) 八〇五二〇八三二一五九一九

松

梅田邦久
観世流之丞
岡治郎右衛門 後藤孝二郎 藤田六郎兵衛
野村又三郎

敦

小島 光洋 河村総一郎 藤田 昭彦
久田 敏二 武田 邦弘
観世 武雄 豊嶋 十郎 教悦
二階之舞 和泉昭太郎 河村総一郎 寛 三男
脇田 入 藤原清司忠

魚

独 井上礼之助 井上松次郎
一字題 宝生 弥一

道成寺

金剛 巖 谷田宗二朗 寛 敏一 児頭喜太郎
高安 勝久 福井啓次郎 藤田 昭彦
森 晴蔵 大野 弘之

主催 高安会
西村 欽也

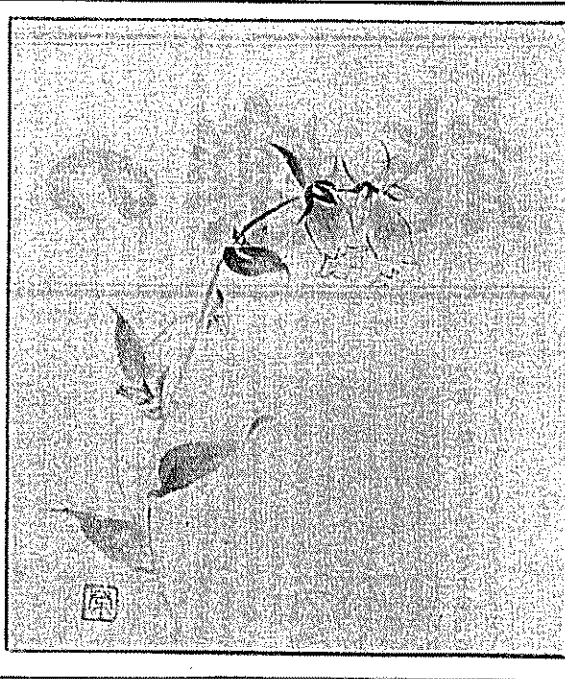
(第二部終了 午後七時頃)

能 紀 行

(113)

まことの花

はつ夏に咲くほたる袋、野草というものは庭に植えてもなかなか育ちにくいのですが、我が家には今年もまた、ほたる袋が薄紅の大きな袋を下げて現われてくれました。水玉の素材にも、いけばな素材にも野趣味があつて大変よ



クロードにも姿を見せているのではないのでしょうか。芸術に環境がないように、花にも環境はありま

若い世代が観客席を埋めてい

春の叙勲

柿本 豊次氏 (金春流太鼓方)
梅若万三郎氏 (観世流シテ方) 受章
近藤 礼氏 (宝生流シテ方)

昭和五十五年春の叙勲が四月二十九日天皇誕生日に発表されたが、能楽関係では、金春流太鼓方・柿本豊次氏が勲四等旭日小綬章、観世流シテ方・梅若万三郎氏が勲四等瑞宝章、宝生流シテ方・近藤礼氏が勲五等双光旭日章をそれぞれ受章された。

野村万蔵追善狂言会

金春信高、ワキ指野之助、笛野口浩和、小鼓荒木照雄、大鼓山本孝、太鼓上田信

仕舞賀 茂 野村 四郎
歌 占キリ 関根 祥六
五之段 観世 元昭

麦の会

七月五日(土) 正午始
熱田 神宮能楽殿
電話(〇五二)六七二二九二番
西田 三好

本日のにについて

長田 龍
能 楽

頼 政 西村 敏也 河村 龍一郎 寛 三男
飯富 雅介 山口 亮
井上松次郎

後見 松島 恵子 地謡 久米 衛市 富田 政久
赤塚 知子 中嶋 功 大島 久見

大江 山 殿島 修二
井 筒 塚本 秀雄
鶴ノ段 河村 鉦二
鉄 輪 久田 秀雄

花 籠 大島 政允
船 舟 慶 大島 久見

久田 敏二
能 楽

半 蔀 西村 敏也 吉田 定男 藤田 六郎兵衛
野村 三郎 福井啓次郎

後見 前野 郁子 地謡 松山 幸親 山田 義高
上田 照也 須藤 一政 橋本 敏道

独 吟 清沢 一政 橋本 敏道

笠ノ段 二井 栄逸

通 小 町 舞 上田 照也

狂 言 野村 三郎 井上礼之助

地 蔵 舞 野村 三郎 井上礼之助

梅田 邦久 寛 敏一 助川 竜夫
岡治郎右衛門 後藤 孝一郎 藤田 昭彦
十三段ノ舞 佐藤 友彦

融 十三段ノ舞 佐藤 友彦

後見 今沢 美和 地謡 木田 敏一 橋本 義高
久田 秀雄 高橋 敏一 武田 邦久

附祝言 主催表 喜多流 長田 龍
観世流 梅田 邦久
親世流 久田 敏二

後援中 日新 新聞

金目山席三千円

豊星会創立五十周年記念大会

七月六日(日) 午前九時始
熱田 神宮能楽殿
菊川 恵三 竹市 幸司

持能 船 井 慶 高安 勝久 佐藤 智恵子 加藤 幸枝
石浜 祥一 田中弥市郎

後見 豊嶋 三千春 地謡 鈴木 昌美 河井 隆子
石浜 明子 神谷 弘美 馬場 かつる

舞臺子 春日 龍神 田島 靖子 寛 敏一 鬼頭 喜太郎
自然居士 馬場 かつる 寛 敏一 鬼頭 喜太郎
弓 八 幡 西山 薫 寛 敏一 鬼頭 喜太郎

運吟 加 茂 後藤 秋枝 青木 美枝

江口 よし子 石原 千鶴子 光田 千代子 大西 玉子 河合 富美枝 河合 美枝 青木 美枝

八島 やす子 松 風 石浜 明子
熊沢 昭代 吉田 定男 寛 三男
金森 宇多子 吉田 定男 寛 三男
金森 宇多子 吉田 定男 寛 三男

高野 物 狂 長谷川 美智子 寛 敏一 鬼頭 喜太郎
須磨 源 氏 竹市 幸司 寛 敏一 鬼頭 喜太郎
天 鼓 河井 隆子 寛 敏一 鬼頭 喜太郎

村瀬 良一 関 米太郎 藤 戸 後藤 紳介
小林 忠三 森 須彌子

森 小袖 曾 我 伊藤 正名 山田 女子園 大学
野田 逸雄 寛 敏一 鬼頭 喜太郎

草 紙 洗 山本 茂樹 石浜 明子 森本 重一
高 砂 東田 東文 吉田 定男 馬場 かつる
半 節 一川 ツタ江 吉田 定男 森本 重一
後藤 孝一郎 後藤 孝一郎 加藤 幸枝

後見 村瀬 良一 神谷 弘美 英 上 加藤 幸枝
村瀬 良一 神谷 弘美 英 上 加藤 幸枝

運吟 駒 之 段 森本 重一
八島 やす子 寛 敏一 鬼頭 喜太郎

松 虫 牧野 元子 寛 敏一 鬼頭 喜太郎
班 女 坪井 つる子 寛 敏一 鬼頭 喜太郎
龍 田 木村 美智子 後藤 孝一郎 森本 重一
守 豊嶋 三千春

附祝言 主催 金剛流 豊 星 会

〔御来聴歓迎〕 名古屋市中区東区二丁目二二二一九
丸美タウンマンション二〇五号

能 百 萬 観世 喜正 有賀 滋子 西村 敏也 河村 隆一郎 鬼頭 八郎
飯富 雅介 福井 啓次郎 藤田 六郎兵衛

明治二十六年七月生れ。大正四年先代金春齋右衛門に入門。昭和十七年から東京音楽学校教務を嘱託。昭和三十六年から三十八年まで、昭和三十七年から三十八年まで、昭和三十九年から四十一年まで、重要無形文化財能楽(総合指定)保持者に認定。昭和三十六年から三十八年まで、昭和三十七年から三十八年まで、昭和三十九年から四十一年まで、重要無形文化財能楽(総合指定)保持者に認定。昭和三十六年から三十八年まで、昭和三十七年から三十八年まで、昭和三十九年から四十一年まで、重要無形文化財能楽(総合指定)保持者に認定。

野村万蔵追善狂言会

9月6日 熱田能楽殿

人間国宝、芸術院会員として狂言界に大きな足跡を残した野村万蔵氏は、昭和五十三年五月逝去されたが、三回忌にあたり、野村狂言の会の主催で、きたる九月六日熱田神宮能楽殿で「野村万蔵追善狂言会」が催される。

演目は、「狂言」佐渡屋「武恵」「千切木」語「宗須与市語」舞臺子「頼政」小舞「祐善」。万之丞万作、四郎、万之介兄弟がそうつ鉄ブレイガイド。

初の大坂城新能

去る五月三十一日(土)大坂城西の丸庭園で、初めて「大坂城新能」が上演され、自らも能を愛した秀吉をしのんで能楽五流が競演した。

主催・読売新聞大阪支社、読売テレビ放送
後援・大阪府、大阪市、大阪府教育委員会、大阪府教育委員会
演目は次のとおり。
親世流能「鶴亀」(シテ大西信)

楽しかった「越後舞」

―やるまい会公演から―

前田満穂

「秘曲「越後舞」当日第一の呼び物のだが、いかが。
―よかつたね。とかく、あまり出ないものは面白くないものと、能の場合でも狂言の場合でも相場のさまざまであるのだが、これはそうじゃない。ある意味では新鮮でさえあった。

―新鮮とはいかに。僕はむしろおっとりとした古雅な感じがしたかね。

―それぞれ。おっとり古雅なところが、今では新鮮なのだ。新解釈というか、近代的というか、現代人が見てもよくわかる面白さが強調される今日、「越後舞」のことさらしい盛り上げのいい芸づくし。それがそれだけであっさ

6月21日 大阪能楽会館
大倉流小波方・久田舞一郎師主
宰の松月会では、六月二十一日
団のメンバーとして、六月二十二
日出発。約十日間の日程で中国を
視察、七月二日帰国する。

第八回蘭の会

六月十五日 湊川神社で
第八回蘭の会が六月十日
五日湊川神社能楽殿で催
される。

山本定期能

55年下半期演能
山本定期能楽会の昭和五十五年
度下半期の演能予定番組は次のと
おりである。
山本能楽堂(大阪府東区徳井町
一〇二〇、電話〇六(九四三)九
四四四番
入場料一期分(四回券)八千円
▽一般券(一回券)二千五百円▽
学生券(一回券)千五百円
◎七月六日(日)
素謡玄 象 長谷川良蔵
今村マヤ子
通小町 矢野一馬

水無月被

松浦信一郎
山本 真賀
◎九月七日(日)
素謡 老 安田友三郎
放田 山本 章博
隅川 宇治田正子
錦木 山本 勝一
◎十月四日(土)
素謡三井寺 山本 真賀
善知鳥 山本 順之
七騎落 八木 康夫
鳥追舟 山本 勝一
紅葉狩 千崎 隆一

より落ちるという意味ではない。
言葉の順序でいったままでだが、
「首引」がいい。親鬼(万之丞)
為朝(万作)、姫鬼(又三郎)と
揃ったところ悪いはずもないが、
親鬼の子顔ゆがが特によい。
―誰がやっても楽しい狂言だが
役揃いとメリハリがきく。親ご
ころのいじらしさに泣き笑させ
る演者三人のイキのよさ。

―誰がやっても...とばかりは云
えない証拠が「宗論」だ。正義
〔法華論〕の成長ぶりは目を見張
るばかり、堂々たる押出しは千五
郎(浄土僧)を庄するばかりだが
押出しばかりで狂言は出来ぬ。い
かに狂言「宗論」といっても、
両派の僧の、個性の対照と衝突が
あざやかにいかないと迫力を欠く。
熱演必ずしも名演とは限らぬ。こ
うの努力は多とするが、ところ
どころスキ間風が吹いた。噛み合
いも味がない。

―親子というのに芸風というか
―(5月18日・熱田神宮能楽殿)

第二十二回 朝日狂言会

七月十三日(日)午後二時始
熱田神宮能楽殿

蚊相撲

大坂 茂山千五郎
大坂 茂山正義
大坂 茂山千之丞

手塩焙烙

和泉元秀 井上松次郎
藤友彦 泉祥子

瓜盗人

大野弘之 井上浩一

名古屋観世九皇会定期能 (三回)
七月十九日(土)午後一時始
熱田神宮能楽殿
素謡半 部 青木 武弘 長谷川 章

御来聴歓迎
名古屋市東区泉二丁目三三一九
丸美タウンマンション二〇五号

淡交会追善能

七月二十日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿
主催事務所 名古屋観世九皇会
電話(〇五二)六七一―二九二(能楽殿)

能百

親世 喜正
有賀 滋子
西村 欽也
飯富 雅介
河村総一郎
福井啓次郎
鬼頭八郎
藤田六郎兵衛
佐藤 友彦
井上礼之助
後見井上松次郎

能面・能装束展

金剛家所蔵
恒例の金剛家所蔵、能面、能装束
出展し展覧が七月二十
十六日(土)二十
七日(日)の二日
間、金剛能楽堂で
催される。

世界の動き 身近な話題
東京新聞
中日新聞
東京中日スポーツ
中日入部
中日新聞本社 名古屋市中区三の丸1丁目6番1号 TEL 大代表201-8811
中日新聞東京本社 東京都港区港南2丁目3番地13号 TEL 大代表471-2211
中日新聞北陸本社 金沢市鶴林町2丁目7番15号 TEL 大代表61-3111

観世会素謡会

七月二十七日(日)十二時半始
熱田 神宮 能楽殿

玄 象 師長 塚本 秀雄 小島 一英 井上 嘉久 梅田 邦久	東 枕之段 北クセ 河村 証二 杉村 竹翠	駒 之段 仕 舞 加藤 兵衛 青木 武弘	求 塚 久田 徹二 武田 邦弘 山本 順之	山 三 輪 仕 舞 近藤 幸江 熊沢 惠美子	弱 法師 親世 元正 関根 祥六	田 村 藏島 修二 久田 秀雄	融 班 網キリ 前野 郁子 女クセ 生駒 里翠 吉田 妙	卷 今沢 美和 服部 美枝 高木 美智子
---	---------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------------	--	-------------------------------	------------------------------	--	--------------------------------------

社 18 4 9 3 四円
 主催名 古屋 観世会
 前席券 二、五〇〇円 当日券 三、〇〇〇円
 会員券申込先 能楽殿及び出演楽師宅

又三郎の秘曲

「越後簪」を観る

竹尾邦太郎

先ず男(松次郎)が侍鳥帽子に茶と白の江戸段の髪目、白い小菊をあしらった小紋素袍上下、小刀出立で名宣ると形通り太郎冠者(友彦)を呼び出します。太郎冠者は黄色地に緑の格子の縮緬斗目に緑と白で丸紋の半袴、肩衣は茶色で得度と駒です。

ついで姉御の勾当(万之丞)が無地に緋茶色の縮緬斗目に同色系の長袴、淡い褐色の水衣にやはり茶糸の角頭布で杖をつけて出ます。座頭とは自ら身分の違う風格が窺えます。

勾当がくつろぐとシテ舞(又三郎)が侍鳥帽子に紺と白の江戸段髪目、青糸の細い格子に丸紋を白で抜いた半袴を括袴にし、青鼠糸の地に白で藤の花、裾に白袴で黒い雲型を抜いた縮緬の出立で、角袴を担ぎ、前に色に紅白の牡丹を添えたものを、後には杉袴を下げて橋懸を出ます。装束の色彩からも舞台全体が中間色で、華やかさはありませんが落ち着いた雰囲気です。シテは狂言座まで出ると、荷をそこに置き、舞台に入ると形通りの進取りがあつて角に安坐します。

正中に勾当、脇座に男、角に舞と三人向い合つた形に所謂鼎坐です。それぞれに挨拶があつて蓋事になります。ここまでの過程が秘曲の然らしめるところかまこと慎重そのもので、言葉の遣取りには庄重さすら感じられ、常の舞入物の清閑さがみられます。それに舞入物とは云え、シテは紅段髪目でも無く百姓物との折衷した人格に見られます。蓋事も、舞が主で舞から献盃も先ということなのでしようか、姉御でかつ勾当という検校に次ぐ位の、装束からも立場が上と見られるアドが後廻しというのも疑問です。

蓋が行き渡つたところで、酒興に男はへ松の言葉の散り失せず、と小謡を詠います。松次郎の淡い喉です。更に酒がまわり、押問答の挙句に勾当が舞を所望されることになり、誰がそのようなどことを申しました。太郎冠者、それは何も言はぬか。」と万之丞が蓋をみせることに微笑まじさがあります。万之丞は立って、盲目らしく正中を小さく廻って、「舞道下り」をゆつたりと詠いながら舞いますが、詠に飽きあり舞に飽きありです。へ小野の宿とよ摺針の、でシテは蓋を飲み干ししますが、それは如何にもタイミングよく「のどすり通り」という感じ舞う趣はやつと舞入物の本来を取

り戻したか見えません。舞の途中で橋懸へ行き、一ノ松勾欄に左足を掛けて睥睨するよりに千仞の谷を見下す派手な型をびたりと極め又三郎は余韻を見せます。

キリでは地謡(万作・礼之助・英丘)が出、大小(兼一、孝一郎)も加わつて四拍子となり、「観猿」のキリで使われる猿歌が詞章を一部替えて詠われ、シテは扇を持つて詞章に副つた所作をしつつ舞い舞留です。それは余韻が残るよりむしろ、果敢にとられる思いの留です。

畢竟「越後簪」が江戸末期の所作らしいとされるのも、先行する「井筒」や「観猿」から「平家」や「猿歌」を取り入れていることや、その構成も獅子を舞わすための過程に比重がかかりすぎていることからも窺えます。

配役も「鞍馬舞」のような対立した関係になるのを避けるために勾当といった遠つた人格を配し、そのために小舞を舞わせ平家を語らせ、といった勾当の芸匠の感が前半にはあり、舞入物に焦点が絞られ、一曲が散漫な印象となつたことはいがめません。部分部分は秀逸ながら、結果として全体は平凡ということでしょう。

(5月18日・第23回やまい会 所見)

観世流謡曲本
ちくさ正文館
ちくさ駅前
電話 1137

御料理 あつた 蓬菜軒

本店 熱田区神戸町三四 電話(67)8686
 神宮東門店 熱田区新宮坂町一 電話(68)5598(代表)

流元 流元 流元 流元 流元 流元 流元 流元 流元 流元

檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1 電話(291)2488-9
 〒604 京都市中京区二条通鉄匠町東入 振替東京 3-3552
 電話(231)1990 振替京都 113

かきすなご 扇かすなご 十松屋 十松屋 十松屋 十松屋

かきすなご 扇かすなご 十松屋 十松屋 十松屋 十松屋

中華料理 桃源亭

御宴会・御集會・御商談等には是非御座敷を御利用下さい

中区栄三丁目29(松坂屋南) 電話 241-2938・6081
 支店 名鉄百貨店9階 のれん茶屋

城

割烹・小料理

●熱田神宮能楽殿喫茶部
 ●住吉小路(中区栄3-10) 電話 241-0248
 ●喫茶・グリル(愛労地下ビル) 電話 731-1128

暑中御伺い申し上げます
 社団法人 名古屋能楽会

山本観衛会

幽花会

楽しいお買い物はマツザカヤ



能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中区千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 36393

購読料 1年 700円

郵送の場合 1年 1000円

一部 70円

題字は熱田神宮 森田宮司様

第21回 大衆能

9月7日 熱田神宮能楽殿

能「安宅」など4番

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

- 〔7月〕
 - 13日(日) 朝日狂言会 (有料)
 - 19日(土) 観世九草会定期能 (有料)
 - 20日(日) 淡交会追善会 (来場歓迎)
 - 27日(日) 観世会素謡会 (有料)
 - 〔8月〕
 - 2日(土) 第15回名古屋新能 (有料) (番組③面)
 - 会場 熱田神宮境内特設舞台
 - 9日(土) 井上松次郎師名古屋芸術特賞受賞記念狂言会 (有料) (番組③面)
 - 10日(日) 青陽会定期能 (有料) (番組④面)
 - 〔9月〕
 - 6日(土) 人間国宝野村万蔵追善狂言会 (有料)
 - 7日(日) 第21回大衆能 (有料)
 - 14日(日) 観世会定式能 (有料)
 - 15日(祝) 熱田紳士能 (来場歓迎)
 - 20日(土) 観世九草会定期能 (有料)
 - 21日(日) 和泉流狂言会 (来場歓迎)
 - 23日(祝) 泉楽会秋の会 (来場歓迎)
 - 27日(土) 梅若盛義後援会能 (有料)
 - 28日(日) 宝生会定式能 (有料)
 - 〔10月〕
 - 4日(土) 観世会秋の会 (来場歓迎)
 - 5日(日) 雄観会秋の会 (来場歓迎)
 - 10日(祭) 修観会秋の会 (来場歓迎)
 - 11日(土) 青陽会定期能 (有料)
 - 12日(日) 淡交会秋の会 (来場歓迎)
 - 18日(土) 猶会秋の会 (来場歓迎)
 - 19日(日) 謡楽会秋の会 (来場歓迎)
 - 25日(土) 観世土曜定期能 (有料)
 - 26日(日) 竹韻会秋の会 (来場歓迎)
- (演能変更の節はご了解下さい)

能楽協会名古屋支部主催による大衆能は、ことし第二十一回をむかえ、愛知県、名古屋市の後援により、九月七日(日)熱田神宮能楽殿で開催される。

「大衆能」は、昭和三十五年から能楽の普及啓蒙をめぐり毎年秋をかざる演能として回を重ねてきた。会場は、例年愛知文化講堂あるいは市民会館ホールで行われてきたが、今回は、熱田神宮能楽殿で行なわれることになった。

能組は、観世流能二番、宝生流喜多流がそれぞれ能一番で四番立て。前回の二十回記念の式能形式は別として、一部制として初めて

和泉流狂言方・井上松次郎氏は本紙既報のように第一回の名古屋市芸術特賞を受賞されたが、この受賞記念狂言会が八月九日(土)熱田神宮能楽殿で催される。

井上松次郎氏は、名古屋狂言共同社の代表として地元における能楽活動の中心的な役割を果たし、後の育成、狂言の普及活動に情熱をそそいでいる。

番組は「牛盗人」「大般若」「木六駄」「素謡子」「下り羽」。和泉流宗家井上松次郎師も来演。祝賀狂言会をかざる。(番組③面掲載)

名古屋芸術特賞受賞

井上松次郎師記念狂言会

8月9日 熱田神宮能楽殿

暑中御伺い申し上げます

熱田神宮 宮司 篠田康雄

権宮司 長谷晴男

の四番立て演能、和泉流狂言二番金剛流舞踊子、金春流狂言、喜多流一調など能楽協会名古屋支部の会員による出演で中部能楽界の初秋の演能のスタートをかざる。

開演午前十時半、前売は千五百円、当日券は千八百円。

主な演目は次のとおり。

観世流能「安宅」(シテ久田秀雄)

宝生流能「生田般若」(シテ衣)

喜多流能「百萬」(シテ長田藤)

観世流能「船弁慶」(前シテ今沢美和、後シテ清沢一政)

狂言「舎弟」(野村信行ほか)

狂言「腰折」(井上礼之助ほか)

さらに金剛流舞踊子「善知鳥」(吉川周子)喜多流一調「鶴鶴」(二井榮逸、鬼頭八郎)金春流狂言、観世流連時、仕舞など。

(番組詳細八月号掲載)

大槻清韻会 大槻文蔵	井上嘉久 (〒603) 京都市北区紫野下鳥田町六	武田太加志 武田志房	鳳鳴会	観世元昭	中日文化センター特別教室 観門会	幽詠会 片山博太郎	観世元正 東京都渋谷区恵比寿南 一―二十一―十四	山本観衛会 山本勝一 〒662 西宮市南郷町五―二二 電話(宅)七三(七三)四七七八	梅猶会 梅若盛義	名古屋橋岡会 名古屋市中区丸屋町五ノ三五 山田紀子方	上田観正会能楽堂 社団法人 観正会 上田照也	名古屋淡交会 橋岡久共	藤井久雄 藤井徳三 藤井久三 藤井治人	名古屋観世九草会 観世武雄	財団法人 鎌倉能舞台 中森晶三 中森貫太	井戸良造 井戸和男	武田詠楽会 武田小兵衛 武田欣司 武田邦弘	誠交会 奥善助 東京都世田谷区三軒茶屋二―〇―二三 電話(〇三)四二二―二六三七番	幽花会 片山慶次郎 〒603 京都市北区小山下花ノ木町二― 電話(宅)四九二―一五三〇二番	高吉橋 高木美智 高木弘子 青木藤武 加藤保彦 長谷川滋章 有賀保滋 塚本秀雄
---------------	-----------------------------	---------------	-----	------	---------------------	--------------	--------------------------------	---	-------------	----------------------------------	------------------------------	----------------	------------------------------	------------------	----------------------------	--------------	--------------------------------	---	--	---

◆全自由席
◆前売券 二、五〇〇円 当日券 三、〇〇〇円
◆会員券申込先 能楽殿及び出演楽師宅
主催名 古屋 観 世 会
に選ばれた。また熱田神宮能楽殿
運営委員会委員として創立以来終
力された。

本 店 熱田区神戶町三十四 電話(67)8686(8)
神宮東門店 熱田区新宮坂町一 電話(682)5598(代表)

宅(21)三三〇。

演 能 案 内

後見 清沢 一英 地誌 今村 嘉男 田中 和男 長谷川 章 武田 青木 藤生 中川 武雄 芳邦 雅章 雄弘 章弘

昭和55年7月・8月放送予定

- ◆ NHKラジオ第一放送（毎週日曜日午前10時15分）
- 〔7月〕
20日（日）宝生流「歌古」近藤 礼ほか
27日（日）金剛流「頼政」金剛 巖ほか
- 〔8月〕
3日（日）喜多流「雲雀山」栗谷菊生ほか
10日（日）高校野球（能楽・囃子集）
17日（日）同上（同上）
24日（日）観世流「雨月」藤井久雄ほか
31日（日）宝生流「小督」松本忠彦ほか
- ◆ NHK・FM（毎週日曜日午前7時10分）
- 〔7月〕
20日（日）金春流「天鼓」①桜間金太郎ほか
27日（日）観世流「班女」山本真賀ほか
- 〔8月〕
3日（日）観世流「三井寺」①観世元正ほか
10日（日）同上 ①同上
17日（日）宝生流「正尊」渡辺三郎ほか
24日（日）金剛流「頼政」金剛 巖ほか
31日（日）観世流「夕顔」梅若恭行ほか
（放送予定につき変更の場合はご了解下さい。）

星が美しく見えるのはやはり夏の宵だからでしょうか、七月になると、男星と女星が一年に一度、天の川で逢う夜がやってきます。

中国の風習に乞巧奠（きこうでん）という行事がありますが、それは陰暦七月七日の夜、供え物をして牽牛星と織女星をまつる行事ですが、昔わが国にも伝わり、わが国固有の「たなばたつめ」の信仰と習合して七夕として五節句のうち一つの行事になりました。

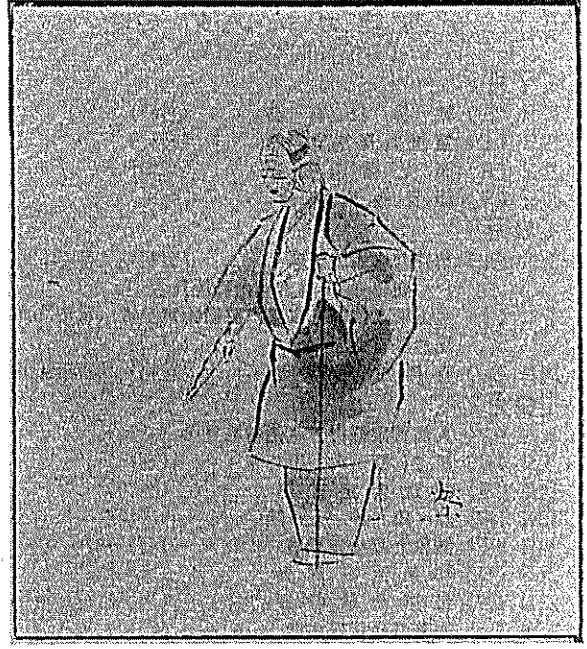
奈良時代に宮中の儀式として始まり、江戸時代には民間にも広がりました。庭前に供物をし、葉竹を立てて、五色の短冊に歌や字を書いて飾りつけ、昔道や裁縫の上達を祈る行事として現在もひろく行

われています。私どもの流儀では桔梗、かきや、女郎花を生け合わせ七夕をまつる伝花を伝えていきます。

七夕は、能の中にも数々取り入れられています。碓、與服、楊貴妃、関寺小町等、とりわけ関寺小町は七夕祭りの夜が背景になっています。

小野小町を主人公にした能には通小町、草紙洗小町、卒都婆小町、鶯小町、関寺小町等あり、どれも名曲になっていますが、中でも卒都婆小町、鶯小町、関寺小町の三曲は、老女物として重く扱われています。其の内でも関寺は秘曲とされ、弟子家にはなかなか許してもらえなかったようです。

能 紀 行 (114)
七 夕
絵と文 二 井 栄 逸



短冊をつるした裏屋の中のシテは、老女のおもて、無色唐織（いろうなしからおり）のわびしい姿で僧との問答、シテの歌物語等からこの老女が小野の小町であるということが分る理です。僧は、小町を足踏りの庭に誘います。小町は短冊の一葉をとって一首をたた

やがて、僧に促がされて作物を出、杖にすがって床几にかけますが、この間、わずかな動きなのに、山かげのわら屋から、関寺へとはとどろきとどろきとゆく心がよく表現されるようです。

七夕かざりの下で稚児達が舞う中ノ舞に対して、興を催して立つた小町は、足許もたどとどろき、露にふるえる秋草の風情のように翩翩と序ノ舞を舞います。関寺は老女物の中でも、もっとも位の高いものとされますが、それは開けたる位といわれ、技巧を超越した幽玄の極致が舞台にひたひたと満ちあふれてくるように思えます。

二井栄逸師画集
81能画カレンダー

本紙連載「能紀行」の二井栄逸氏画筆による81年カレンダーが発行されます。能画は「二人静」「小嵐」「石橋」「松風」「葛城」のオフセット五色刷美麗カレンダーです。

昨年と同じく、本紙でお取り扱い致します。

○予約特別価格一部千円、（郵送の場合送料三百五十円計千四百五十円）

○予約特価は九月十五日申込みにて締切らせて頂きます。

○お申込みは、振替又は切手でお申込み下さい。ハガキによる受付け（代金後送）も致しますが、部数を明記して下さい。

○予約期限（九月十五日）以降のお申込みは千六百元（一般市価二千五百円）にて受付けますが、部数の関係にてお応えしきれぬ場合もありますのでご了承下さい。

○百部以上お申込みの場合は名前入りでもできますのでお問い合わせ下さい。

サイズB4（タテ五五ミリヨコ三八〇ミリ）表紙本文共七枚、紙質エンボス、オフセット5色刷、天金具

申込先 能 楽 の 友 社
〒464 名古屋市千種区千種2-18-18
電話（〇五二）七三二-七九八四
振替口座 名古屋 36393

<p>邦 謡 会 梅 田 邦 久 須 部 一 甫 清 沢 美 和 今 沢 美 朗 本 田 勝 朗 安 藤 勝 朗</p>	<p>初 陽 会 武 田 宗 和</p>	<p>壺 泉 会 泉 嘉 夫 名古屋市昭和区山里町一〇三 電話（八三二）三二一八五 西宮市甲陽園目神山町一の一七八 電話（八〇七）九八八〇 二四五八</p>	<p>一 謡 会 河 村 鉦 二 叶 石 会 河 村 繪 一 郎 名古屋市昭和区前山町一丁目二三三（〒466） 電話（七六二）四八八二</p>	<p>久 田 健 正 会 久 田 秀 雄 大 倉 流 小 鼓 久 田 舜 一 郎 久 田 健 正 会 久 田 徹 二 郁 風 会 前 野 郁 子 松 山 幸 親</p>	<p>每日文化センター 謡 曲 教 室 風 韻 会 殿 島 修 二</p>	<p>散 る 花 の 会 南 条 秀 雄 奥 村 富 久 子 京都市左京区永観堂西町二〇 電話（五七）七〇七六七番</p>	<p>松 音 会 泉 泰 孝 東京都杉並区宮前四一九一四 電話（三三三）三三二八〇番 大阪市城東区諏訪一三三二一八 電話（六九六）三三二四番</p>	<p>水 雲 会 水 藤 元 三 名古屋市名東区藤ヶ丘八三 電話（七七一）五〇三九番</p>	<p>竹 韻 会 杉 村 竹 翠 名古屋市名東区藤ヶ丘八三 電話（七七一）五〇三九番</p>	<p>笙 月 会 中 川 清 長浜市地福寺町八ノ二九 電話（〇六三）三〇番</p>	<p>雄 鳳 会 下 田 雄 三 大阪市東区高麗橋詰五三</p>	<p>幸 詠 会 近 藤 幸 江 岡崎市鶴田本町十一番地ノ三 電話（〇五六）二五二九</p>	<p>寶 生 英 照 寶 生 英 雄 寶 生 英 照</p>	<p>名 古 屋 巽 会 辰 巳 孝 名 古 屋 巽 会</p>	<p>寶 生 流 嘉 寶 会 名古屋市昭和区川名本町二ノ五一</p>	<p>喜 多 流 山 本 才 名古屋市千種区園山町二二三 電話（七三三）二二七三番</p>
--	--------------------------	--	---	--	---	---	--	--	--	---	--	--	--	--	--	---

金 春 信 高

喜多流 山本才
名古屋市千種区園山町二二三
電話（七三三）二二七三番

演 能 案 内

第十五回 名古屋新能

八月二日(土)午後五時半始(雨天順延)
熱田 神宮 神楽殿前

仕舞(観)浮舟 前野 郁子 地謡 生駒 里翠

谷行 近藤 幸江 地謡 今沢 美和

雙子(剛)須磨源氏 竹市 幸司 鬼頭 英二 助川 龍夫

仕舞(観)船弁慶 武田 邦弘 地謡 須藤 梨雲

仕舞(春)笠之段 前田 茂徳 地謡 須藤 梨雲

仕舞(春)鉄輪 長田 誠 地謡 須藤 梨雲

能(観)蟬丸 飯富 雅介 後藤 孝一郎 鬼頭 季信

御入式 熱田神宮権宮司 長谷 晴男 (七時頃)

半能(観)雲林院 飯富 雅介 吉田 定男 鬼頭 八郎

狂言(和泉)山伏 野村又三郎 井上松次郎 佐藤 秀雄

能(観)紅葉狩 飯富 雅介 河村 敏一郎 池田 昭彦

須部 勝則 本田 邦久 飯富 雅介 河村 敏一郎 池田 昭彦

梅田 邦久 飯富 雅介 河村 敏一郎 池田 昭彦

飯富 雅介 河村 敏一郎 池田 昭彦

飯富 雅介 河村 敏一郎 池田 昭彦

飯富 雅介 河村 敏一郎 池田 昭彦

飯富 雅介 河村 敏一郎 池田 昭彦

飯富 雅介 河村 敏一郎 池田 昭彦

飯富 雅介 河村 敏一郎 池田 昭彦

飯富 雅介 河村 敏一郎 池田 昭彦

附 祝 言

前席 一、三〇〇円 当日 一、五〇〇円
主催 能楽協会名古屋支部
後援 名古屋市中区熱田神宮

第一回名古屋芸術特賞 受賞記念狂言会

八月九日(土)午後二時始
熱田 神宮 能楽殿

牛盗人 井上松次郎

大般若 和泉 元秀

木六駄 井上松次郎

加藤総兵衛師の傘寿祝賀素謡会

観世流、加藤総兵衛師の八十歳祝賀素謡会が六月一日、深瀬庵舞台で行なわれ、素謡、仕舞など二十数番、八十人が来会して盛會であった。加藤総兵衛師の「ともかくも八十寿を迎え、更表」の句の色紙が来会者に贈られた。

岐阜邦謡会創立15周年記念大会

岐阜邦謡会(梅田邦久師)は創

立十五周年をむかえ、七月六日岐阜中央青年会館で記念能楽大会を開催、能「井筒」(村中重三子)、「富士太鼓」(近藤とき子)、「坂」(梅田邦久)、新名寄師範池田米寿氏の素謡「卒都婆小町」はか舞囃子、仕舞など二十数番。

【お詫び】本紙六月号④面「大阪新能」は雨天のため中止になりましたのでお詫びして訂正します。



梅田邦久師

竹野会 老松宏守 電話(〇七九八)二三一〇六〇一
半田市船入町三十一 電話〇五六九〇八二一五
名古屋昭和区川名本町二ノ五一

倉本 雅
神戸市東灘区田中町一丁目13番16
電話〇七八(四五三)六一四〇番

緑宝会
名古屋市中区鳴海町池上16-10
電話(八九六)三四二八番

金剛永謹
名古屋市中区新栄二丁目10-9
電話(二四一)三一四二番

金剛流豊春会
名古屋市中区東区2丁目23-9
マルミタウシマンション205号

今井清三郎
今井 幾三郎

今川吉川周子
金剛流吉川周子
名古屋市中区西橋町3ノ6

廣田後援会
廣田 隆一

廣田幸稔

菊扇会
名古屋京都名張・熊本
東京静岡・松江・徳島

廣田 泰三

廣田 泰三

金春信高
東京都杉並区南荻窪3-17-16
電話〇三(三三三)二五七二番

林鉄郎

八声会
伊勢市宮町一丁目一四一七
電話(会費込)〇二四五六番

中部金春会
名古屋市中区新栄二丁目10-9
電話(二四一)三一四二番

前田茂穂

喜多実

喜多実

和島富太郎
宝塚市宝梅一丁目12-11
電話(〇七九七)八六三〇

和島富太郎

二井栄逸
松阪市内五曲町八八
電話(〇五九八)二三一〇二六

二井栄逸

高安会
西村欽也
名古屋市中区瑞穂区仁所町二丁目四五
電話(八三一)五九一九番

高安勝久

豊嶋十郎
電話(〇四七三)一九八二

森田光春

福王輝幸

福王輝幸

江崎金治郎
電話(〇七九二)〇七二五番

江崎康雄

龍吟会

藤田六郎兵衛

藤田昭彦

第二十四期 第二回 青陽会 能

八月十日(日)午前十時半始

熱田神宮能楽殿

仕舞 松島 加賀 敏彦 今村 嘉男 地謡 松山 幸親
 大松 若君 今村 嘉男 地謡 松山 幸親
 高橋 昭 祖父江 修一 本田 一政
 須部 大 近藤 幸江 地謡 今沢 美和
 飯富 雅介 山口 亮 寛助 三男
 西村 欽也 杉江 元 河村 亮 寛助 三男
 飯富 雅介 山口 亮 寛助 三男

仕舞 野宮 小島 一英 殿島 修二 須部 敏彦
 阿野 宮 殿島 修二 須部 敏彦
 船井 慶 久田 敏二 長谷川 章

ヒタ面ものの魅力 金春流の「安宅」雑感

◇六月二十二日、金春流の「安宅」を見ましたが面白かったですね。シテ(弁慶)は本田光洋君小柄で童顔ですから、や、ステールの小さいうらみはあったものの演ることは手固く、金春独特の素材な味もあって、まづは好成績といっているでしょう。堂山、ワキ(西村欽也)も格、技ともシテの寸法に合って、舞台のまとまりを助けていました。

◇「安宅」といえば、ヒタ面ものの代表格。大要ボビュラーな曲で、歌舞伎の「勧進帳」の原曲だけに、研究熱心な学生が二階席につめかけていました。が、研究家批評家などの間では幽玄美第一の夢幻能を讃美する余り、どうもヒタ面ものを軽視する傾向があるのはどうでしょうか。極端なのは「愚問」扱いをして「消えて失くした」風の罵詈雑言をあげせる情け知らずもいるようですが、賛成できま

能班 前野 椰子 河村 総一郎 森本 重一
 西村 欽也 高安 勝久 井上 松次郎
 佐藤 秀雄

能土蜘蛛 飯富 雅介 鬼頭 英二 池田 季信
 高安 勝久 福井 啓次郎 鬼頭 季信
 後見 須部 敏彦 今沢 美和 清沢 一政
 梅田 邦久 地謡 近藤 幸江 久田 敏二
 今村 嘉男 祖父江 修一 長谷川 章

附祝言 主催 青陽会
 会員券申込は関係楽師方及び青陽会事務所
 名古屋市熱田区新宮坂一
 熱田神宮能楽殿内

わめる能の内容が実証して余りあるものと云えないでしょうか。特に学者を悩ませる四番目、現在の能の乱雑さその乱雑さそのものがさういう目で見直すと、なんと云えす面白。幽玄と筋の三番目ものよりはるかに面白。一方を貴族的とすると、一方は庶民的、芝居がかって来るのも当然です。

◇芝居がかってどうしていけないのでしょうか。芝居の本質はドラマです。「安宅」のドラマチックな迫力はどうか。この迫力は「井筒」や「野宮」の幽玄とはひと味違った魅力ですが、それに劣る魅力とは云えません。あれも能、これも能、それだから面白いのです。歌舞伎の「勧進帳」は、歌舞伎十八番の随一と云うたっています。あれは舞踊劇です。明治初年、「勧進帳」を地頭、素顔でやり、能がかりを意図して、現行演出の基礎を置いた九代目三郎の意図はともかく、現

日発行) 社 第15回 名古屋新能 各地の新能



住 駒 幸陽 英介
 〒920 金沢市片町一丁目二二四〇
 電話〇七六二〇五二四〇

寺 井 政 数
 〒154 東京都世田谷区世田谷四丁目三三二五
 電話(四二〇)六六七六番

呉竹会 寛 三 男
 森本 重 一

鬼頭 季 信

幸 圓 次 郎
 〒164 東京都中野区中央四丁目四七一
 電話(三八一)九四一三番

幸 義 太 郎
 東京都中野区丸山二丁目二四
 都管丸山アパート一三三〇号
 電話(三三七)五六七二番

大倉 長 十 郎
 大倉 源 二 郎
 〒111 東京都豊島区南池袋四丁目三十四
 (大数方) 大倉 正 之 助

幸 友 会
 福井 啓 次 郎
 福井 良 久
 福井 良 治
 柳原 富 司 忠

住 駒 幸陽 英介
 〒177 東京都練馬区東大泉町二九一
 電話〇三(九二五)一五四一

桂 後藤 孝 一 郎
 山 口 亮

安 福 春 雄
 東京都杉並区天沼二丁目一七二〇

飯島 佐 之 六
 〒920 金沢市香林坊2-8-8

寛 鉦 一
 吉 田 定 男

長生会 鬼頭 八 喜 太郎
 好 喜 太郎
 英 好 信 二

助川 竜 夫
 山口 義 郎

和 泉 元 秀
 〒215 川崎市多摩区岡上四三八一
 電話〇四四(九八七)一一八七番

大蔵 狂言会 大蔵 彌 太 郎
 基 基 義 嗣

三宅 藤 九 郎
 東京都豊島区北大塚1-24-16

茂山 千 作
 茂山 千 五 郎
 京都市上京区中筋通り石薬師上ル

名古屋和泉会 狂言 共 同 社

狂言 やる まい 会
 野村 又 三 郎

善 竹 忠 一 郎
 神戸市東灘区御影町東大蔵二一

熱田神宮能楽殿 仙 田 美 千 子
 〒460 名古屋市中区正木二丁目16-25
 電話(三三三)七五五三番

名古屋修 諷 会 谷田 宗 二 朗

期待される銀行
ご奉仕する **じゅうろく**
十六銀行
創立 明治10年
本店 岐阜市

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社
名古屋市中千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 36393
購読料 1年 700円
郵送の場合 1年 1000円
一部 70円

第15回 名古屋新能 來会千五百名越える

名古屋新能は、八月二日熱田神社境内で催され、千五百名を越える來場で会場を埋め、お天気に恵まれて観能を楽しんだ。

観世、金剛、金春、喜多各流の舞獅子、仕舞につづいて、宝生流能「蟬丸」(戸田和)ののち、本山名古屋市長は「この古典芸能に接する市民がますますふえていくことは名古屋の新しい文化創造のうえで大きな意義がある」とあい

さつ。熱田神社長谷権宮司による火入れ式が厳かに行なわれた。演能は「雲林院」(塚本秀雄)でかなり火に映える美と優雅に新能気分は高潮、狂言「栗山伏」(野村又三郎ほか)につづいて能「紅葉狩」(梅田邦久)の鬼揃は、緩急極まる舞台上で午後九時すぎ盛会のうちに終了した。

(写真は第15回名古屋新能(雲林院)狂言「紅葉狩」)



各地の新能

大阪新能

第二十四回大阪新能は、八月十一日、十二日の二日間、生国魂神社境内で。

初日は、能「敦盛」(梅若盛義)「吉野天人」(大西智久)「安達原」(山本真賀)狂言「鬼瓦」(善竹幸四郎ほか)

二日目は能「俊寛」(生一泰知)「班女」(高林白牛口二)「雷電」(大槻文蔵)狂言「太刀奪」(善竹忠一郎ほか)

神戸新能

神戸新能は八月三日、四日長田神社で。

初日能「田村」(上田照也)「紅葉狩」(前・笠田稔、後・藤谷政二)狂言「酢童」(茂山千之丞)

四日は能「嵐山」(前・下川宜長、後・久田敏二)「藤戸」(梅若盛義)狂言「茶童」(善竹忠重)

姫路新能

八月一日姫路城三の丸広場で、能「高砂」(前・上田照也、後・観世元正)「石橋」(大槻文蔵、山本真賀)狂言「蚊相撲」(茂山千之丞)

須磨離宮野外能

八月三十日須磨離宮公園で、能「三井寺」(上田照也)狂言「清水」(茂山正義)

演能カレンダー (熱田神社能楽殿)

8月	17日(日)	呉竹会ゆかた会	(米場歓迎)
9月	6日(土)	人間国宝野村万蔵追善狂言会	(有料)(番組②面)
	7日(日)	第21回大衆能	(有料)(番組②面)
	14日(日)	観世会定式能	(有料)(番組②面)
	15日(祝)	熱田紳士能	(米場歓迎)(番組②面)
	20日(土)	観世九皇会定期能	(有料)(番組②面)
	21日(日)	和泉流狂言会	(米場歓迎)
	23日(祝)	和泉流秋の会	(米場歓迎)
	27日(土)	梅若盛義後援会能	(有料)
	28日(日)	宝生会定式能	(有料)
10月	4日(土)	雲会秋の会	(米場歓迎)
	5日(日)	雲会秋の会	(米場歓迎)
	10日(祭)	修風会秋の会	(米場歓迎)
	11日(土)	青陽会秋の会	(有料)
	12日(日)	淡路交會会秋の会	(米場歓迎)
	18日(土)	須磨離宮交會会秋の会	(米場歓迎)
	19日(日)	須磨離宮交會会秋の会	(米場歓迎)
	25日(土)	観世士曜定期能	(有料)
	26日(日)	竹韻会秋の会	(米場歓迎)
11月	1日(土)	久田正会大会	(米場歓迎)
	2日(日)	久田正会大会	(米場歓迎)
	3日(祝)	久田正会大会	(米場歓迎)
	8日(土)	久田正会大会	(有料)
	9日(日)	久田正会大会	(米場歓迎)
	15日(土)	久田正会大会	(米場歓迎)
	16日(日)	久田正会大会	(米場歓迎)
	23日(祝)	久田正会大会	(米場歓迎)
	24日(休)	久田正会大会	(米場歓迎)
	29日(土)	久田正会大会	(米場歓迎)
	30日(日)	久田正会大会	(有料)

(演能変更の際はと了解下さい)

山本眞賀 豊中市本町六丁目一〇一六	大垣浦声会 積古場 大垣市竹島町善念寺 住所 京都市左京区下鴨芝本町五八 浦田保利	大江将董 京都市東山区本町20丁目428	梅若三郎 梅若萬三郎 梅若萬紀夫 梅若萬佐晴 梅若萬三郎 梅若萬紀夫 梅若萬佐晴	法研能会 橋香会 梅若萬三郎 梅若萬紀夫 梅若萬佐晴	観世雅雪 観世鎮之丞 観世栄夫	名古屋観世会 名古屋修諷会 梅若修一	春満会 梅若善高 豊中市新千里南町三丁目18-12 電話(06)八三一七七八五四	名古屋修諷会 梅若修一	谷田宗二郎 京都市北区衣笠街道町31-7 電話(075)875(05)875	久保田千三郎 芦屋市興川町五ノ一五 電話(079)二二三一八四	高安同志会 飯富良人 熊本市黒髪二丁目六ノ二九	山崎俊輔 大牟田市北磯町25(高崎方)	亀井俊一 保忠雄 保忠雄	谷口正喜 前川光隆 前川光隆	茂山忠三郎 京都市左京区北白川大宮町47-1 電話075(70)二〇二二番	朝日文化センター 雛子教室 小鼓後藤孝一郎 丸栄スカイル10階
----------------------	--	-------------------------	--	--	-----------------------	--------------------------	---	----------------	--	---------------------------------------	-------------------------------	------------------------	--------------------	----------------------	---	--

れ「風の鷹をあげせる情け知らずもいるようですが、賛成できま

つ、能そのものも幾度か転送を

得なかつた事情は、現に多様を

七月号、八月号にわけて掲載させて頂きましたので何卒恵しからず

ご理解賜りますようお願い致します(編集部)

柳原富司 忠

良

熱田神社能楽殿
仙田美千子
電話(六七)二九二二番

六月の舞台から

林鉄郎の「楊貴妃」と
山本勝一の「玉井」

竹尾邦太郎

金春流地元シテ方による久々の舞台です。年来地謡方としての実績があるとは云え、林鉄郎が能舞うのは初めてと聞きます。観世流のように舞台敷に恵まれず、言わば一発勝負なのですが、この日を期しての稽古量の豊富さからでしょうか、些も初シテの気負いを窺わず、けれん味のない真摯な舞ぶりは好感を覚えます。装束は襟白二・著付は白の指箱、紅入唐織は橙色系の地色に秋草模様、緋大口も時代が感じられるくすんだ色で全体に地味な印象を受け、それ故か面は臨んで見えます。

シテのサンは昂りのない平静なもので、天界の静寂さと思わせる雰囲気があり、イロエの後、へんかの中へ歎きとこや、と筆を高くシテとこやに感懐があります。囃子方(大鼓河村総一郎・小鼓柳原富司忠・笛笠三男)も好演で、就中イロエで河えつえとして一抹の哀感を覚える笛が出色です。地は名古屋には馴染深い本田秀男の後嗣本田光洋を地謡によく統率が取れ、天界に在る楊貴妃の、深く沈滞したムードを、雲の下から湧きあがるような低く厚味のある語で懐旧の情を写しつづけます。へんか定舞、と作物前で二回小さく廻るのは離別を印象づけるものでしょう。次いで地のへんか曲、と受けて序ノ舞になります。装束同様寂びた平明なもので無我の境を見せて好ましい舞ぶりです。

ワキ方土・西村鉄也の抑えた淡い演技はいつもながら起居に折目正しい美しさがあります。殊にキリでシテの招き扇を受けて一ノ松で振り返り、下居して天冠を左手に捧げ持って叩頭するところが、詩情々と迫るものがあります。アイ井止松次郎端正。後見は金春晃実・広瀬瑞弘。時として目障りな程の軽い、ほそぼそと耳打ち

二名も舞台に入ると地前に下居しワキは未知の海底の様子を窺うように作物の影、脇座に立ちます。大鼓(河村総一郎)も加わって真一ノ声でシテツレ(久田徹二)シテ(山本勝一)紅入唐織着流で艶やかに出ると橋懸で向き合いサシです。ツレは左手に、シテは右手に水桶を持ちます。藤波重淵以下の地は混成の所為かシテとワキとの仄かな恋情を映しつづりとした情調に欠ける感があります。地のクリの裡に後見は作物、小道具金で引くと一転広々とした海底の趣でシテと地の掛合から釣針の経緯を述べるクセは居るが背筋のピンと張った山本勝一の清冽な気品です。申入地へ大廻りに、と立つと地の裡に橋懸へ入り、太鼓(鬼頭喜太郎)が加わり申入来序でツレも立つと、水中を滑る趣に一足ずつ出す爪先を拍子に合わせて踏みつつ進み、一ノ松過ぎてはスルスルと舞入ります。囃子は飄逸な狂言来序となり、笛の響いた味わいでがらりムードが変わります。アイ(井上松次郎)は登壇の面に括り海・白い縷水衣の隣ノ精で未社の出立です。大鼓流では「貝尽し」が常らしいのですが、和泉流は小津になります。夫々の風味なのでしょうが、曲趣からは「貝尽し」が面白いでしょう。

常座で名置ると、へ目出度かりける時とこや、と囃子に合わせ三段ノ舞です。袖を巻き鳥跳びして喜風に揺れて祝言の舞そのものです。出端でシテツレ天女が紫の長袖・緋大口で出ると直ぐ赤巻が揚り鏡ノ間奥深くから廻り杖の音をさせシテが重々しく姿を現わします。童戴に大悪尉の面、茶地に金で記巴に火焰、太い紫の露を垂らした狩衣に白地に金で四海波の半切の威容は迫ります。さらびやかな天女の舞と格闘したハタラクとの対照がメルヘンの色を濃くし、それは童画の中に古典の様式美を見る趣です。シテ山本勝一は立派ですが、美声の響はややヴィブラートして鼻にかかり甘く、動きが足りないのが「玉井」には不調です。(所要1時間45分・六月八日第三回観世会定式能所見)



二井栄逸師画1981年能画カレンダーの内容の一部「二人静」

二井栄逸師画集
81能画カレンダー

七月号既報のように、本紙連載「能紀行」の二井栄逸氏画集には昭和五十六年能画カレンダーが発行されます。能画は「二人静」「小座」「石橋」「松風」「葛城」のオフセット五色刷、B4(51・5センチ×38センチ)表紙本文とも7枚の美麗カラーです。本紙で取り扱いますのでお申込み下さい。

東京新聞
中日新聞
世界新聞
東京中日スポーツ
中日スポーツ
中日新聞社・名古屋市中区三の丸1丁目5番1号 TEL 052-431-6811
東京本社・東京都港区港南2丁目3番13号 TEL 03-471-2211
北陸本社・金沢市若林町2丁目7番15号 TEL 0762-01-3111

祝 第21回 大衆能

11
名古屋テレビ

1
現代をみつめる眼
東海テレビ

CBC & you
中部日本放送

社 会
亡父益三郎の五十回忌で、名古屋和親会、一宮竹石会、岐阜花園会、下呂・萩原・高山の雄風会、愛文月十日、素謡「求塚」「砦」など九番、舞囃子、仕舞など、淡交会(橋岡久其師)と「富士太鼓」協

野宮 波谷 朝子
寛 敏 一
助川 竜夫

名古屋淡文会秋季大会

十月十二日（日）午前十時始

熱田神宮能楽殿

番外狂言道明寺 橋岡 久共

狂言竹生嶋参 井上礼之助 井上松次郎

素謡井筒 里野 桂 河合 正治

連吟天鼓 藤田 忠正

素謡熊野 梅田 弘子 谷本 正純 谷本 信正

能富士太鼓 西村 敏也 吉田 定男 寺井 三九

間 佐藤 友彦

後見 松田 善二 地謡 竹井 喜信 寺井 三九

班 女 長沢 良子 松 山 星野 桂

仕舞 丸 瀬戸 三津子 敦 鈴木 多美子

松 風 山田 喜代子 井 筒 柴田 操

連吟 三井寺 北島 良介 日比 比はな子 中野 末子

素謡芭蕉 森 徳子 池上 栢

連吟花 日置 八重子 長崎 美佐子 早瀬 智子

舞獅子小 塩 青沼 節子 後藤 孝一郎 鬼頭 八郎

舞獅子唐 船 佐藤 淑子 後藤 孝一郎 寺井 三九

素謡遊行 柳 松浦 喜代一 下田 雄三

間 鈴木 慎治 瀬戸 綾子

船 弁慶 西村 敏也 鬼頭 英二 鬼頭 八郎

間 後見 寺井 栄 地謡 北島 良介 高橋 善助

後見 谷本 正純 地謡 北島 良介 高橋 善助

中村 和男 松田 敏二

（午後六時終了予定）

〔御来場歓迎〕

主催 名古屋淡文会

歳末助 養育金募表出

上半期の名古屋。能会も狂言会も盛んであった。能の方は、金春能三番と金剛流能二番が演能の幅を広げ、観能に生彩を与えた。金春能高氏の黒龍（佳）・杜若と木田光洋氏安宅（佳）金剛能氏の鶴飼・道成寺（どら）も佳がそれである。

杜若は信高氏の還暦記念能（光洋氏の安宅も同時上演）。下巻りの道成寺（ワキ高安勝久技）は実に久方振りで、ワキ高安勝久技、西村弘敬両氏の追善能を飾る。組宝二流の愛好者の多い名古屋で金春・金剛に喜多の三流の能がたびたび見られるのは何と云ってもうれい。長い演能の伝統は崩した

春夏秋冬

夏と上半期

野村 広二

絶、狂言辞典・事項篇）または九代（名古屋の能狂言、近世劇文学論考、石田元季）の作の由。現又三郎氏の創意工夫が大きいのではないか。

次の朝日狂言会（二二回）には新作が昨年と同じ狂言五番の真ん中に置かれた。去年同様本多静雄氏作。第一作の「動」に比べて第二作は「静」の気分が強い、いや流れに落ち付きが出た。「鍋八（なべやつばち）」のほうろくが大事な役。それに子理が出る。第三作の正田照（ひきだがま）には佳が登場する。これは本多の好み乃至はメルヘンの世界か。陶器の領分がテーマに扱われ、登場者の多い作品からあるたくましさを感じる。これが構想の特色と言えよう。それにつけても古典狂言の味がそこでも薄断され、さつと薄れる。作のよきにもよるが、宿命でもあろう。古典・新作併用の会はむづかしい。

もう一つ狂言会のこと。上半期の狂言も話題が多い。井上松次郎氏の第一回名古屋芸術特賞受賞記念の会。盛大。大笑い・高笑いだけでなく、地味で落ち付いたふんい気の舞台（狂言）三番。狂言共同社は松次郎と並ぶ礼之助はじめ全員心を合わせて懸命に勤める。共同社の、名古屋伝来のおっとりとおだやかな上品な芸が展開。能主松次郎氏の木六駄では鶴舞が舞われ、風格あっても、名古屋勢が大般若。品があっても、名古屋勢がやる大般若の方が味わいがある。和泉流と裏に縁が深い名古屋の狂言を「誇りを以て」大切に守っていったらいい。狂言では、那須与市語（松）と魚説法（松・礼）がよかった。

秋の山城路を訪ねる 謡曲名所めぐり

11月30日（日）実施

本紙では、毎年謡曲名所めぐりのバス旅行を行なっておりますが本年は、京都・山城路を中心とした探訪のコースを選びました。平重衡、和泉式部のゆかりの地（木津町）はじめ、井手の里、浮舟、頼政などの地を訪ねます。お話し合わせのうえに参加下さい。

日時 十一月三十日（日）

集合 愛知文化講堂前（NHK南側）午前8時

出発 午前8時10分、備着午後6時30分（予定）

新作狂言「手塩焙烙」を観る

竹尾 邦太郎

先ずアト果報者（松次郎）が出現。角頭巾に長袴・萌黄色の段。髪目に茶色の小格子厚板を腰のところでたくし込んだ重折袴、小サ刀に右手に扇を持ちます。襟は白です。

廻り名宣りますが、装束から受ける印象は果報者とは言い、条々と遊治郎で「貫習」の放蕩舞（弘之）の着付と同断です。新作が装束からの人物描写の苦心はあろうが、祝言曲を意図してはいればこそ、侍鳥帽子に素袍、紅段髪目に威儀を正してもらいたいものです。名宣ると直ぐ、母の喜寿の祝の談合にシテ太郎冠者（元秀）——常の狂言上下出立——を呼び出しますが、「末広か」や「鐘の音」にみる早合点の素材を取り違えの型を踏まず「キジュ」とはどのやうなものでござらぬかと初手から突っ掛けてゆくところなど理屈が勝り、説明過多となつてストーリーが展開していく上でも結局の意外性は期待出来ません。更には「ダイヤモンド婚式云々」は見所の笑いを誘いこそすれ狂言の科白としては消化不良で違和感がありますし、「アツと驚く」のも今更五郎でもないでしようが、徒らに見所に媚るばかりです。

奇習縦横と言いたるところですが、「鐘の吸物云々」にしてもその内容との有機的関連がありません。狂言が伝承される過程で、時局性の強い科白もあつたでしょうが、六百年の歳月に過ぎれば日中国交も成り、華国舞の来日もあつたことでござれば云々」は耳に馴染みません。鶴の吸物から狸汁、狸汁から狸の腹鼓へともつてゆく思考のプロセスも陳腐です。

さて、祝言の語に焼き物を添えることになつて本曲名となつた「手塩」を求めることになります。ここではアトとシテとの通り取りは説明過剰、就中、「手塩」を知らぬか。加藤九郎編纂の原色陶器大辞典によれば、「手塩」とは付塩のことで、餅に添えて、食べる人の心で食物に加える可き塩を盛つた皿」とある。亦一説には餅に添えて汚れを消めるものとある。といった煩雑さです。そして太郎冠者の道行は太鼓で浮き立つ四拍子（昭彦・孝一郎・敏一・龍夫）が入り、シテ元秀は如何にも山坂道を往くように桶懸を離子に乗ってジグザクに三ノ松までゆきますが、離子の必然性は全く冗長に流れます。

（時雨の雨に濡れしとて、人が傘をさすなら、我も傘をささうよ。げにもさあり、やようがもさうよ、と「末広か」の冒頭を換えた離子物で、一松まで戻り、着セリフからすつと正中へ出ると「手塩買おう」と呼ばわります。その声を聞いて小アト・スッパ・本曲では驚くれ（友彦）が箱型目・括符、灰青色の縦縞の羽織の上から腰紐を結び、はくそ頭巾に竹の背負籠で登場します。はくそ頭巾は賤しい役柄と対象とする山ですが、腰紐と相俟つて如何にも生活感を感じさせてスッパの敏感さが窺えませんか。しかし、さびさびとした科白回しがそれを補っています。

焙烙を手塩と許つて売り付ける手段も「末広か」と同工。ただ離子物は新作（？）にしては面白く、大小であらう小舞はキリの部分、驚の本脚で立つ姿が出色ですが、「末広か」のように曲の内容との有機的関連がありません。それだけに別れの科白、「さて代物は三条の大黒屋で渡させう。」「成程、大黒屋やう存じている。あれで受取るであらう。」「さて、念のためにこれに記して置きました。これを持っていて代物と引き換えさせられい。中にビーンと五つと認めておきました」は全くいけません。大黒屋はありふれていますが、三条は明らかに京であつて「末広か」の「六地蔵」は全くの誤りです。これが一曲の構成を複雑にし、焦点を絞り切れなかつたことは否めないことです。作としては先年の「犬盗人」が上。印象散漫な本曲は、目先を離す変化球に終始して遊びが多く、（千之丞・千五郎）の爽快さは対照的でした。（所要40分・7月13日第22回朝日狂言会所見）

猶惠会十五周年記念大会

十月十八日（土）午前九時半始

豊橋・名古屋 四日市・津 謳楽会秋季能楽大会

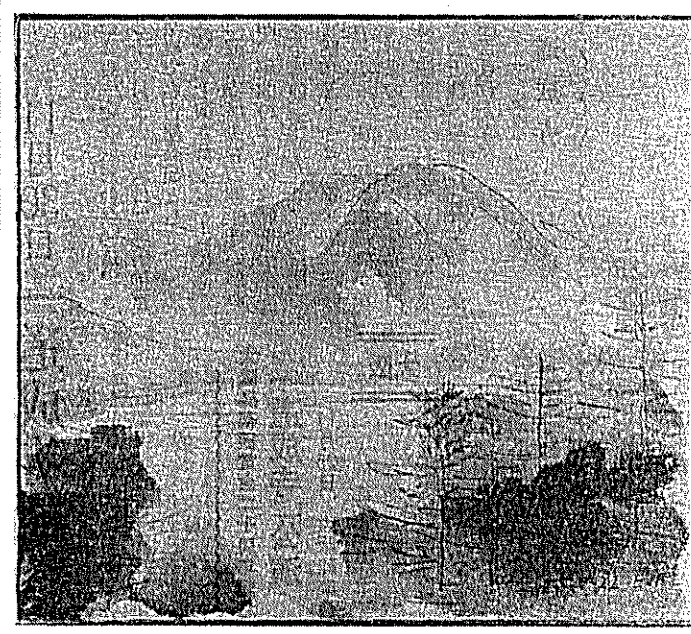
十月十九日（日）午前九時始

能紀行

采女

絵と文 二井栄逸

昔、平城のみかどに仕えた采女(うねめ)の中に、誰よりもすぐれた美しい容姿の采女があった。采女というものは、郡の小領以上の家族から選んで奉仕させた後宮の女官のことだ。うねめも、いつか...



湖、洞爺湖、支笏湖等、見たいと思っていたので、多忙なスケジュールをきいて行くことにした。雨の降立ちであったが、北海道に入ると、雲も晴れて機は夕陽の千歳空港に静かに降下していった。Nの言う老人ホームや、病院を建設する用地は約五千平方メートルで、眼下に石狩湾を見下ろし、背後に朝里温泉郷を抱える朝里山系の緑の山並を眺める絶好の地であった。面会しなければならぬ人があつたり、午宴会や、晩宴会など結構忙しかつたが、その合間を利用して白樺の林やカラマツの樹林をうらぬ美しい道路に車を走らせた。

人間国宝 松本謙三氏逝去

下懸り宝生流ワキ方の長老

下懸り宝生流ワキ方・松本謙三氏は、九月十五日午前七時二十二分、急性心不全のため川口市並木二一三一一の自宅で逝去された。享年八十一歳。

要無形文化財保持者(人間国宝)に指定。能楽界の長老であり、さる八月、同氏の葬祭を記念して金沢演会主催により金沢・北陸五流能に出演、死の直前まで活躍された。謹んでご冥福をお祈りします。

金剛流 今井幾三郎氏逝去の重鎮 東西に活躍した不滅の足跡

金剛流シテ方・今井幾三郎氏は、九月二十六日午前九時十五分、急性肺炎のため京都大学付属病院で逝去された。享年六十七歳、告別式は二十九日午後一時から京都市北区小山下板倉町二三の自宅で厳

観世会土曜定式能(三回)

十月二十五日(土)午後一時始 熱田 神宮 能楽殿

清 能 組 加賀 敏彦 杉村 竹翠 田中 武 水原 元三 殿島 修二 殿本 秀雄 犬飼 末吉

富士太鼓 前野 郁子 安藤 信之 小鍛冶 近藤 幸江 小島 武勝 能 能 久田 徹二 久田 秀雄 後藤 孝一郎 寛 三男

放下僧 植田隆之亮 吉田 定男 後藤 孝一郎 寛 三男 佐藤 友彦 松山 幸親 河村 邦久 高橋 謙一 地謡 中村 和男 加藤 保彦 武田 邦弘 山本 順之 梅ヶ枝 上田 照也 地謡 梅田 清一 梅田 邦久

萩大名 井上礼之助 佐藤 友彦 大野 弘之 小島 一英 梅岩 貞英 河村 邦久 河村 邦久 河村 邦久

山姥 西村 敏也 河村 邦久 河村 邦久 河村 邦久 井上松次郎 森 重一 後見 久田 徹二 地謡 本田 邦久 本田 邦久 本田 邦久 上田 照也 加藤 兵衛 久田 秀雄

附祝言 主催名 古屋 観世会 (終了予定五時半頃)

竹韻会能楽大会 十月二十六日(日)午前九時半始 熱田 神宮 能楽殿

附祝言 主催 杉村 竹韻会 (終了五時半頃)

風韻会秋季能楽大会 十一月二日(日)午前九時半始

風韻会秋季能楽大会 十一月二日(日)午前九時半始

頼 政 飯田 悦子 奥村 泰広 養 老 恒川 志やう 佐藤 英雄 後藤 孝一郎 助川 三男 草紙洗小町 河津 清子 山村 幸子 寛 三男

千手 松本 頭一 梅村 平義 (十一時半頃) 杉村 竹翠 西村 敏也 後藤 孝一郎 寛 三男

弱法師 西村 敏也 後藤 孝一郎 寛 三男 後見 近藤 幸江 地謡 八神 孝充 梅村 平義 大西 智津子 大西 智津子 大西 智津子

景 恒川 志やう 大西 智津子 大西 智津子 大西 智津子 八神 孝充 梅村 平義 大西 智津子 大西 智津子 大西 智津子

葵 大西 智津子 大西 智津子 大西 智津子 八神 孝充 梅村 平義 大西 智津子 大西 智津子 大西 智津子

安宅 福垣 道雄 福井 啓次郎 森 重一 同子 高島 勝美 吉田 定男 福井 啓次郎 森 重一 梅村 平義 加藤 兵衛 久田 秀雄

桜川 高島 勝美 吉田 定男 福井 啓次郎 森 重一 福垣 道雄 吉田 定男 福井 啓次郎 森 重一

八島 泉 嘉夫 大槻 文蔵 大槻 文蔵 大槻 文蔵 大槻 文蔵

附祝言 主催 杉村 竹韻会 (終了五時半頃)

附祝言 主催 杉村 竹韻会 (終了五時半頃)

附祝言 主催 杉村 竹韻会 (終了五時半頃)

良の初演、縁が太く、堅実な芸
九月二十六日午前九時十五分、急
性肺炎のため京都大学付属病院で
式は二十九日午後一時から京都市
北区小山下板倉町二三の自宅で
謹んでご冥福をお祈りします。
藤沢富美子
宮部 保良
主 竹 村 竹 翠 会

能 友 随 想

信高氏の「伯母捨」

去る九月十五日大阪で伯母捨
(おぼすて)をみる。シテ・金春
信高。信高氏の遺蹟祝賀能の大坂
公演である。東京は三月、名古屋
は六月におこなわれた。
大阪駅から歩いて大阪能楽会館
へ。ここへは四十四年に訪ねて以
来に無沙汰で、にぎやかだった周
辺は、頭上の高層自動車道路はじ
めいなが上にも変り変りに、大
阪のたくましさを知り物語って
いた。

信高氏は伯母捨を好演する。人
間が持つ喜怒哀楽の姿が次第に純
粋・無心の世界へ入って行く舞台
をみせた。月に微するとか、生前
をうらむとかいうのではない。シ
テ常座に立つ後シテの姿、切りの
やはりにこにうづくまる姿、何と
もいえずよかった。父上八条氏と
はちがう古拙の味もたつぷり、や
さしくしかも厚い芸が大層感嘆
した。なぜか大原御幸(昭三七)
一恋重荷(昭五四)―伯母捨(昭
五五)の一線で、信高氏が行き着
いた高い境地へひかれていった。
これを沼津雨氏と並んでみたので
ある。沼津も感心しておられた。
沼津さんと親しくお話をかわす
のは何年振りであろう。もちろん
名古屋のこと。「お身体お大切
に。北岸さんの分も長生きして下
さい」と笑ってお別れしたが、そ
れにつけても、故北岸佑吉氏(元
朝日・能楽・芸能評論家、朝日五流
能演出入大匠)、五一・七月逝去)
のことがしきりに思い出された。
それは前述の四十四年、玄恵法
印生誕七百年記念狂言会(大蔵
流)が同じく大阪能楽会館で催さ
れたとき、雨氏は扇をふれ合っ
てみられた。その様子は今でも
忘れられない。そのとき北岸氏は
横にいた私へ「和泉流では紋相撲
に大きなうちわを行司の太郎冠者
が使うでしょう」と話しかけられ
る。名古屋から狂言共同社が同曲
で記念出演していたからである
(松・秀・礼) 志一郎・法師ケ母、
千作・武蔵、跡太郎・仁王があり、金
剛殿氏のすばらしい是我意(旧是
界、白頭)が番組を飾った。北岸さ
んのことは「狂言」(狂言共同社、一
八号、五一・九月)で追想させ
ていただいたが、広い展望と深い
洞察、批評一つにしても、この先
輩は「現代の目」をもつて「美し
い能と狂言の笑い」をきびしく、
かつやさしく伝えておられた。奈
良や京都金剛能楽堂でいっしょに
った北岸氏が信高氏の伯母捨をみ
られたら、どんな感懐を持たれた
であろう。

同日見実(てるちか)氏とその
息・穂高君が石橋・連獅子を舞う。
静と動、けんらん・重厚、阿呼(あ
うん)の気力みなぎる古風な舞台
が見所を圧した。久方振りに前後
を通してみる。
また伯母捨の間狂言は千作氏。
演が出るほど見事な語り。すばら
しかった。
X X X
なおこの日曜風(金沢、霞会、
宝生英雄、宝生雨・森茂好・宝生
欽哉ほか)の放送(NHK・名古屋
屋)があった。この会を主宰した
松本謙三氏がこの日になくなられ
た。(付、檀風は八月上演)。
暑い日であった。(H)

明石 能「鞍馬天狗」

11月5日、能「鞍馬天狗」
明石古典芸能の会は、
兵庫県、明石市、明石市
教育委員会などの後援で
これまで五回の公演が行
なわれ、古典芸能への正しい理解
と関心をひろげているがきたる十
一月五日、第六回公演が明石市民
会館大ホールで催される。

狂言「素袍落」(茂山千之丞) 舞
囃子「羽衣・和合之舞」(上田照
也) 小舞「福の神」(下部義太郎)
など。明石市芸術祭協賛。午後二
時開演。
入場料前売二千円、当日券二千
三百円。

久田観正会大会

十一月一日(土)午前九時始

熱田神宮能楽殿

- 素謡 経 正 市野美代子 寺岡和代
天 鼓 今井博子 市岡幸子
杜 若 平井嘉江 若山あや子
仕舞六 浦ヶ七 寺岡和代 理々々 市野美代子
素謡 弱法師 岡本照日 樋口寛男
仕舞 丸 戸前勝平 天 鼓 今尾正治
雨之段 山岡登美 笠之段 大崎寿美子
鐘之段 吉川宇良子 野 富 伊藤正子
松 虫 神谷貞子 女郎花 稲垣つね子
舞囃子 桜 川 田中雅子 班 女 小本曾幸恵
羽 衣 吉川紀代子
連吟 鞍馬天狗 赤阪三三子 小倉山紀
岸本豊子 川崎任子
独吟 駒之段 山中美代子 鐘之段 桐井喜全
舞囃子 松 風 岩田はるみ 玄 象 酒向千鶴子
独鼓 阿 漕 久田秀雄 石岡和子
舞囃子 清 経 石黒直子 養 老 丸山幹子
水波之伝 久田秀雄
番外仕舞 遊行 柳 上田照也 融 久田秀雄
素謡 砧 加藤千代枝 桐井君子 久田徹二
千方松山 忠司 林 あや子
能 船 弁 慶 西村欽也 後藤孝一郎 助川 竜夫
三男
仕舞 二人 静 安沢トシ子 王之段 川口いさ子
素謡 盛 久 酒向昭司 藤 真年
田立昌義
鳥 追 舟 三宅一寿 林 辰男
今井隆
春日龍神 有本 武司 沢田 光治
狂言 千 鳥 野村又三郎 井上礼之助
佐藤友彦
番外舞囃子
狸 々 乱 久田 徹二 河村総一郎 助川 竜夫
久田 輝二 久田輝一郎 藤田 昭彦
〔御来聴歓迎〕 主催 久 田 観 正 会
久 田 徹 二

風韻会秋季能楽大会

十一月二日(日)午前九時半始

熱田神宮能楽殿

- 素謡 賀 茂 稲月好子 阿部とし子
毛利菊枝 阿部とし子
能 組
仕舞 三井寺 志方つね子 粟田 純子
(クリ、サシ、クセ、ロンギ省略) 富田 初子
舞囃子 富士太鼓 後藤さく子
班 通 小 町 榎原富貴子 地謡 渡辺 節子
女アト 粟田 純子 高田みね子
班 喜久子 吉田 文子
中垣 こう
素謡 花 菅 石黒操子 吉田 文子
(サシ、クセ以下省略) (ワキ「官旨にてあるぞ」)
村井すみ子 島津 春子
中村喜久子 林 千鶴子
高田香代子 長谷川 富美子
伊藤しのぶ 山田 富美子
北原良一郎 関谷 三男
上 日比大吉郎 後藤孝一郎 鬼頭 好信
伊藤 必義 後藤孝一郎 鬼頭 三男
地謡 泉島 信隆
舞囃子 高 砂 伊藤 敏子 鬼頭 英二 助川 竜夫
林 千鶴子 藤田 昭彦
松 風 高田みね子 河村総一郎 鬼頭 三男
巖之舞 戸 金丸 洋子 山口 亮 鬼頭 三男
坂 富士道周明 加藤 芳康 森本 重一
鬼頭貴代子 鬼頭 友彦 鬼頭 好信
鬼頭 重一
能 龍 田 西村 欽也 吉田 定男 助川 竜夫
杉江 元 後藤孝一郎 藤田 昭彦
後見 大樽 幸江 地謡 山本 正人 斎藤 信隆
堀谷 恵子 鶴岡 克彦 大樽 文蔵 藤田 昭彦
三島 康一 水田 泰孝 水田 博

幸友会秋の会

十一月三日(祝)午前十時始

熱田神宮能楽殿

- 狂言 文 山 賊 井上松次郎 井上礼之助
後見 佐藤 秀雄
番外仕舞 老 松 大樽 文蔵
井 泉 嘉夫
定 家 大樽 秀夫
祝言 波 殿島 修二 (終演六時頃の子定)
〔御来聴歓迎〕 主催 風 韻 会
後援 毎日 新聞 社
〔御来場歓迎〕 主催 幸 友 会
後援 幸 友 会
〔御来場歓迎〕 主催 幸 友 会
後援 幸 友 会
故谷口喜代三師追善
叶 石 会 大 会
十一月八日(土)午前九時始
熱田神宮能楽殿
能 羽 衣 シテ海田トシ子 大鼓 澄川幸子
番外一調一声 「玉璧」シテ片山博太郎、大鼓・谷口正喜
一調 「高野物語」シテ長山巖、大鼓・中村喜彦
一調 「勸進帳」シテ山本真賀、大鼓・吉田定男
ほか素謡、舞囃子など
〔御来聴歓迎〕 主催 叶 石 会 会

観世会定式能(五回)

十一月九日(日)十二時半始
熱田神宮能楽殿

能組
菊慈童 加藤兵衛 加藤保彦
素 後藤 契雲
久田 秀雄
水藤 元三

自然居士 宝生 間 吉田 定男 大倉 源二郎 藤田 昭彦
片山 博太郎 茂山 千作 松本 正義
後見 大槻 文蔵 地謡 須藤 幸三 長谷川 幸三 武田 邦弘

鐘の音 茂山 千作 松本 正義
龍太鼓 大槻 文蔵
女郎花 山本 真賀 地謡 小島 修二 梅田 邦久 久田 徹二

今年の大衆能は熱田の能楽殿。文化講堂や市民会館などの便に、結果がよければそれでいいし、結果がよければいいが、よくないことだ。あまり局外者が勝手な推察をするのは止せ。例年のことながら、能楽協会が主催するのには止せ。未だに「舟弁慶」の後のシテ(清)の静に、存在感といってもいい。大衆能だ。素人の卒直な印象をぶちまけたらいいだろう。恥さらしにも愛嬌さ。

地元総力戦の好舞台

第21回大衆能所感

前田 満穂

名古屋支部の総力戦だけに異色そのもの、元老、新進、男女顔を揃えて、情熱的でやさしく、心のキメのこまかい、稚口でひききわを心づけた、ある意味で男にとっては理想の女性、いや、都合のいい女性かな。(あれなら自分放つておいて大丈夫だ) 観客がもうおどろいて、市にも、大衆的見地から

安達原

上田 照也 西村 欽也 河村 総一郎 鬼頭 善太郎
急進之出 飯宮 雅介 福井 啓次郎 三男

正風会秋の会

十一月十五日(日)午前10時始
熱田神宮能楽殿

能 經 政 蜘蛛
能 土 能 經 蜘蛛
ほかさ語、舞囃子、仕舞、連舞
主催 正 衣 斐 正 宜 会

初陽会大会

十一月二十九日(土)午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡 高 砂 村上 清 佐藤 英雄 浅井 一元
クリ・サシ・クセ省ク

三 輪 群 舞 習子 鈴木 信太郎
クリ・サシ・クセ省ク
上 久米 七子 清水 かな子
我人のため省ク 渡辺 郁

草子洗小町 日能百合子 藤川 八郎
前シテ及び地次第ヨリよくものをマデ省ク
戸 杉本 勉 宮崎 一
住みはてぬ省ク 小川 明宏
石井 須美 羽 衣キリ 梅田 知里
大谷 シズカ 松 虫クセ 山田 雅子

仕舞 鶴 龜 大谷 シズカ 松 虫クセ 山田 雅子
連吟 田 村 神田 幸吉 若キリ 千葉 哲男
善知 鳥 立野 善吉 杜 若キリ 千葉 哲男
独吟 鐘 之 段 荒木 高代 松本 秀太郎

求 塚 加藤 ヤス 二村 正
ロンギ及びびされば入省ク
成谷 備彦 松本 秀太郎

松 風 宮川 美代子 河村 総一郎 寛 三男
桜 川 鈴木 容子 後藤 孝一郎 藤田 昭彦
小島 一英 山田 武嗣 後藤 孝一郎 藤田 昭彦

能 鉢 木 飯宮 雅介 河村 総一郎 寛 三男
飯宮 雅介 河村 総一郎 寛 三男
飯宮 雅介 河村 総一郎 寛 三男

恋 重 荷 山田 茂 村上 清
地次第ヨリあはれてふマデ省ク
道 成 寺 山本 幸男 武田 宗和 久田 徹二

通 小 町 竹内 正 河村 総一郎 寛 三男
西 行 桜 高橋 幸三 河村 総一郎 寛 三男
融 神沢 幸吉 河村 総一郎 寛 三男

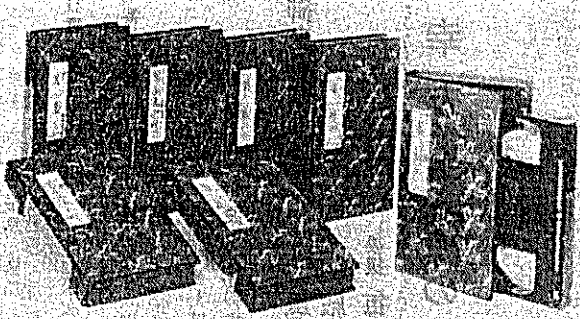
鞍馬 天狗 庄野 榮二 後藤 孝一郎 藤田 昭彦
番外 仕舞 屋 島 武田 宗和 河村 総一郎 寛 三男

御来場 歓迎 武 田 宗 和
鹿野 宗和 武田 宗和 河村 総一郎 寛 三男

観世流舞囃子名演集

東芝EMIビデオ・カセット発売

ビデオ・カセットによる観世流舞囃子の企画がかねて東芝EMIによってすすめられてきたが、「観世流舞囃子名演集」として、その第一集が十月五日から全国的に発売された。出演者は観世流の第一線で活躍されている方々。第一集は「草子洗小町」(シテ野村四郎)「羽衣」(シテ関根祥六)「高砂」(シテ観世清和)「星島」(藤井徳三)で「星島」は笛共進、他は一噌流、森田流とそれぞれ収録されている。特別頒布価格一巻当り三万円。



なお今後さらに「舟弁慶」「天鼓」「巻物」「藤」「松風」「葛城」など名曲が順次発売される予定。詳細問い合わせは、東芝EMI(株)東京都港区赤坂2-2-71(〒107)電話(03)五八五一二二

昭和55年10月・11月放送予定

Table with columns for date, time, program name, and performer. Includes NHK Radio and NHK FM schedules.

邦謡会大会 幸謡会大会 十一月二十三日(日)午前10時始

名古屋市教育委員会、能楽協会、名古屋支部主催による、名古屋邦謡会として例年行なわれていた名古屋邦謡会を、今年より「邦謡会大会」として開催する。

若い御二人の門出に
ふさわしい結婚式場
名古屋 若宮八幡社
各種会合や宴会にも御利用下さい
(駐車場完備)
名古屋市中区栄3丁目35-30 電話(241)0810

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 36393
購読料 1年 700円
郵送の場合 1年 1000円
— 部 70円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- 〔11月〕
- 15日(土) 正風会秋の会 (来場歓迎)
 - 16日(日) 邦謡会大会 (来場歓迎) (番組①面)
 - 23日(祝) 幸謡会大会 (来場歓迎) (番組①面)
 - 24日(休) 和泉流歴代宗家追善別会 (有料) (番組②面)
 - 29日(土) 初陽会大会 (来場歓迎) (番組②面)
 - 30日(日) 金春欣三の会・道成寺能 (有料) (番組③面)
- 〔12月〕
- 6日(土) 故梅若六郎師追善名古屋橋会 (来場歓迎) (番組③面)
 - 7日(日) 歳末助け合い義捐能 (有料) (番組③面)
 - 13日(土) 観世土曜定期能 (有料) (番組③面)
 - 14日(日) 壺泉会能 (有料) (番組④面)
 - 21日(日) 青少年のための芸術劇場 (有料)
- 〔56年1月〕
- 3日(土) 能楽協会名古屋支部開初式 (関係者のみ)
 - 7日(水) 学生能と狂言の会 (来場歓迎)
 - 15日(祝) 清謡会大会 (来場歓迎)
 - 25日(日) 青陽会定期能 (有料)
- 〔2月〕
- 1日(日) 宝生会定式能 (有料)
 - 8日(日) 観世会定式能 (有料)
 - 14日(土) 観世九草会定期能 (有料)
 - 22日(日) 熱田紳士能 (来場歓迎)
- (演能変更の際はご了承下さい)

笛方藤田流十世宗家、藤田六郎兵衛氏は、十月二十六日午後四時五十分肝臓がんのため入院先の名古屋保健衛生大学病院で逝去。享年七十一歳。



藤田六郎兵衛氏逝去 10月28日 告別式執行

告別式は二十八日午前十一時から名古屋市中区比米町四の自宅で行われ、霊前には各流派をはじめ能楽界各界の供花がかけられ、中日新聞大島代表取締役(代理)、能楽協会名古屋支部長井上松次郎氏等が弔辞を朗読、東西の能楽関係者など数百人の会葬者による焼香が行われ故人の冥福を祈った。喪主は嗣子昭彦氏。

藤田氏は幸清流小鼓方、故田鍋惣太郎氏の二男として生れ、十六歳で能楽界に入社、二十歳で師範生となり、二十八年に師範生として東京より来名した名家。昭和二一年清兵衛氏死去により十代目藤田流宗家を継ぎ、とくに戦後能楽協会名古屋支部結成以来、監事、副支部長などを歴任、熱田神宮能楽殿完成に尽力された。昭和四十年重要無形文化財総合指定、昭和四十八年から二期四年間において能楽協会名古屋支部長として地元能楽界に貢献、昭和四十九年中日文化賞を受賞、支部相談役として後進の指導に当り、厳格ななかで慈愛あふれる人柄が尊敬を集めていた。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

能「船弁慶」狂言「武悪」

青少年のための芸術劇場

12月21日 熱田神宮能楽殿で

名古屋市教育委員会、能楽協会名古屋支部主催による、名古屋市の青少年のための芸術劇場「能・狂言」の会が十二月二十一日(日)熱田神宮能楽殿で午前十時から上演される。

この公演は劇中青少年、高校生、泉嘉夫師「道成寺」(野村又三郎)が演ぜられる。入場料五百円。

十二月十四日 熱田神宮能楽殿 壺泉会能で

十一月十四日、熱田神宮能楽殿で壺泉会能が開演されるが、泉嘉夫師による能「道成寺」が上演される。

シテ泉嘉夫師は、昭和二十八年以来二十七年より上演、ワキ西村敏也、笛藤田昭彦、小鼓後藤孝一、大鼓河村純一郎、太鼓鬼頭好信、アイ野村又三郎の諸師で、太鼓鬼頭好信氏は、今回がこの大曲の披露である。

入場料 A五千元、B三千元、(番組④面掲載)

<p>〔御来場歓迎〕</p> <p>梅田 邦久 会</p>	<p>〔御来場歓迎〕</p> <p>近藤 幸江 会</p>	<p>邦謡会大会</p> <p>十一月十六日(日)午前九時始</p> <p>熱田 神宮 能楽 殿</p>	<p>幸謡会大会</p> <p>十一月二十三日(日)午前十時始</p> <p>熱田 神宮 能楽 殿</p>
<p>能 葵</p> <p>舞臺子 熊 狸</p> <p>狂言 柑 子</p> <p>番外狂言 駒 之 段</p> <p>附祝言 梅田 邦久</p>	<p>能 花</p> <p>舞臺子 遊 行</p> <p>狂言 柳 衣</p> <p>番外狂言 衣 之 段</p> <p>附祝言 梅田 邦久</p>	<p>能 小</p> <p>舞臺子 高 砂</p> <p>狂言 天 鼓</p> <p>番外狂言 天 鼓</p> <p>附祝言 近藤 幸江</p>	<p>能 幸</p> <p>舞臺子 養 老</p> <p>狂言 養 老</p> <p>番外狂言 養 老</p> <p>附祝言 近藤 幸江</p>

調が特に優劣する大衆能の如き場
合、カシ取り役の苦勞も察してあ
に三重丸をつける。
「(安宅)」(久田秀雄)「一生田
いても大丈夫だ」(義経がもうひ
と晩泊っていきなさいなど)とい
の協力をお願いしたいね。(9月
7日、熱田神宮能楽殿)

能紀行

夜空の鴉尾

絵と文 二井栄逸

あしかけ十年という歳月を要して此の程大仏殿の大修理を終えた東大寺では、その落成を記念して去る十月十五日から五日間、落慶法要と、慶讃奉納行事を盛大に行った。

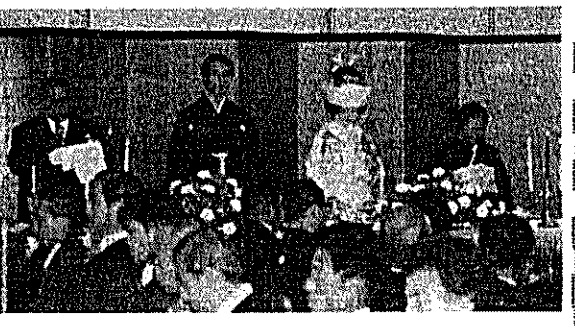


軒先が十センチほどはね上がったという。江戸の古材は重さに耐えつつ反発力を失わずに生き続けているのである。ここでも木の強さがあらためて証明された。東大寺はタルキ材のヒノキや杉のうち、腐食が激しく使えないものを輪切りにして参列者に配った。その古材は、みずみずしい香りを放っていた。

舞台に見入っていた。舞台の上まで枝をさしのべた老松や、池のさざなみ、朱塗りのらんかん等に灯が映え、何か旅島の海上舞台でも踊っているような気がしてならなかった。

鬼頭英二氏華燭の典

10月6日 熱田神宮会館で



親世流大鼓方・鬼頭英二氏次男英二氏は、鬼島光一氏夫妻の媒約により成田勝子さんの長女晴美さんと婚約がととのい、十月六日熱田神宮会館でめでたく華燭の典をあげた。

金春欣三の会名古屋公演

故梅若六郎師追善名古屋橋会

歳末助け合い 義捐金募集能(第十二回)

和泉流歴代宗家追善別会

十一月二十四日(祝)午後一時開演 熱田神宮 能楽殿

Table listing performers and roles for the 'Wakusai Ryū' event, including names like 木六、宗論、天鼓、和泉元秀.

初陽会大会

十一月二十九日(土)午前九時始 熱田神宮 能楽殿

Table listing performers and roles for the 'Shoto Kai Taikai' event, including names like 高砂、三輪、葵.

Table listing performers and roles for the 'Kusaki Yashio' event, including names like 草子洗小町、藤戸.

Table listing performers and roles for the 'Shimada' event, including names like 仕舞、蓮時田.

Table listing performers and roles for the 'Kobayashi' event, including names like 小島、山本.

Table listing performers and roles for the 'Mitsuba' event, including names like 三葉、道成寺.

Table listing performers and roles for the 'Shimada' event, including names like 仕舞、蓮時田.

Table listing performers and roles for the 'Shimada' event, including names like 仕舞、蓮時田.

Table listing performers and roles for the 'Shimada' event, including names like 仕舞、蓮時田.

Table listing performers and roles for the 'Shimada' event, including names like 仕舞、蓮時田.

Table listing performers and roles for the 'Shimada' event, including names like 仕舞、蓮時田.

Table listing performers and roles for the 'Shimada' event, including names like 仕舞、蓮時田.

安達原 (観世流) 河村総一郎 鬼頭喜太郎

金春欣三の会名古屋公演

十一月三十日(日)午後二時始
熱田神宮能楽殿

道成寺

金春 欣三
高安 勝久
飯富 雅也
間 井上礼之助
後見 松本 泰利
守屋 隆之
後見 松本 泰利
守屋 隆之
飯富 雅也
間 井上礼之助

名古屋市東区新出来町三ノ一〇六
A券(正面指定席)六、〇〇〇円・B券(指定席)五、〇〇〇円
学生会(自由席)三、〇〇〇円
会員券別所

人間の妖精

六之丞の「山姥」

深遠な大乗仏教の世界観を、灼熱たる詞章にちりばめた名作「山姥」は見所には限りなき興味を、演者には限りなき意欲をそそぐ能である。幾山めぐりをしても解でせぬ山姥は、教いを求めてさまよう人間の宿命の象徴か。十月二十五日熱田神宮能楽殿で見た「山姥」(梅若六之丞)はこの解を徹底させて「人間山姥」とでもいえそうなる面白演目を見せた。小書もなく舞の型でもないのだから、見なれた「山姥」とは、かなり印象が悪い、何よりも意欲的で、熱気と迫力のある舞台ぶり、が解釈の当否を越えて新鮮、爽快に感じられた。

まず前シテのやけに黒っぽい衣装と後シテの白っぽい長絹風のコントラスト。演技の点でも、じっくり抑えられた前シテに対し、後シテは自由奔放、軽くまた強く、静から動へ、舞台いっぱい活躍する。

故梅若六郎師追善 名古屋橋会

十二月六日(土)午前十時始
熱田神宮能楽殿

第一組
番 上 中 定子 前藤 光治
荷 武山 一雄 伊東 誠
梅 枝 請井 和子 井上基太郎
野 宮 豊田 寿子 藤田 昭彦
船 舟 寺山 鈴子 藤田 昭彦
海 人 光裕 藤田 昭彦
第二組
江 口 西村 泰男
百 萬 水藤 元三
通 風 山崎 英太郎
松 盛 井上基太郎
融 舞 梅田 邦久

歳末助け合い 義捐金募集能(第十二回)

十二月七日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

熊 坂 飯富 雅也 鬼頭 英二 池田 幸信
能 能 井上礼之助
東 北 林 鉄郎 池田 幸信
鶴 之 段 加藤 兵衛 池田 幸信
采 女 長田 陽 池田 幸信
枕 之 段 長谷川 章 池田 幸信
夕 行 桜 河村 純二 池田 幸信
西 行 桜 河村 純二 池田 幸信
知 章 高木 美智子 池田 幸信

安達原

吉田 妙 (観世流)
高安 勝久 河村 純一 鬼頭 喜太郎
立石 澄雄 福井 良久 森本 重一

観世会土曜定式能(四回)

十二月十三日(土)午後一時始
熱田神宮能楽殿

紅葉狩 中村 和男 長谷川 章
花 正 正キリ 木田 勲
岩 城 月ヶ七 今村 嘉男
岩 城 月ヶ七 今村 嘉男
岩 城 月ヶ七 今村 嘉男

和布刈

飯富 雅也 鬼頭 喜太郎
西村 敏也 山口 亮
飯富 雅也 鬼頭 喜太郎

福の神

井上礼之助 佐藤 秀雄
井上礼之助 佐藤 秀雄

鉢木

江崎 金次郎 吉田 定男
江崎 康夫 久田 舜一郎
江崎 康夫 久田 舜一郎

文山賊

井上松次郎 佐藤 友彦
井上松次郎 佐藤 友彦

附祝言 (当日券三千円)
主催名 古屋観世会

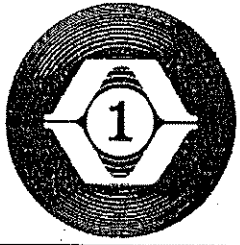
東大寺の大修理では、屋根の瓦(かわら)を取り去ったあと

奥田一、教育図書ニシキ出版社
長錦見忠篤の諸氏が祝辞をのべ、

テレビで生中継で放映された。
(写真は鬼頭英二氏結婚披露宴)

上 久米 七子 清水かな子
我人のため省ク

(御来場歓迎)
主催 初武田陽宗和会



現代をみつめる眼
東海テレビ

能 楽 の 友

題字は熱田神宮 篠田官司筆

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中区千種千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 36393

購読料 1年 700円

購送の場合 1年 1000円

郵送料 1部 70円

重要無形文化財

第26回 中日五流能

3月29日 中日劇場で

重要無形文化財「中日五流能」は、今回二十六回を迎え、きたる三月二十九日(日)名古屋・栄・中日劇場で開催される。中日新聞本社主催。

第一部(午前十時開始)、第二部(午後四時開始)で予定番組の大要は次のとおり。

【第一部】金春流能「自然居士」(シテ金春信高)観世流能「半部」(シテ金春信高)観世流能「半部」小書立花供養(シテ観世元正)宝生流能「融」小書遊曲(シテ大坪十喜雄)

秋の叙勲

喜多流シテ方 友枝喜久夫氏

大倉流小鼓方 鶴沢 寿氏

十一月三日文化の日に秋の生存者叙勲が発表されたが、能楽関係から喜多流シテ方友枝喜久夫氏、大倉流小鼓方の鶴沢寿氏がそれぞれ勲五等双光旭日章を授与された。勲五等双光旭日章 友枝喜久夫氏 明治四十一年九月熊本に生れ、六歳で「国栖」の子方として初舞台、昭和二年喜多六平太に入門。

喜多流に師事。昭和四十年重要無形文化財「能楽」(総合指定)保持者となり、日本能楽会会員。四十二年から四十四年まで能楽協合理事。昭和四十四年芸術祭奨励賞、四十四年芸術祭大賞、五十四年芸術祭奨励賞、五十四年芸術祭大賞を受賞。勲五等双光旭日章 鶴沢寿氏 明治四十一年八月千葉県に生れ、大正十年十四歳で大倉流小鼓方、北村一郎に入門師事、十四歳で「翁」の脇鼓が初舞台。昭和三十三年大倉流小鼓方となる。昭和四十年重要無形文化財「能楽」(総合指定)保持者となり日

神戸五流能

本能楽会会員。五十年から五十四年まで能楽協会常務理事、現在「能楽養成会」の教務を担当し、後進の育成に尽力。

1月18日神戸文化ホールで神戸市(神戸文化ホール)公演による「第七回神戸五流能」は、新春一月十八日(日)、神戸文化ホール(大)特設能舞台で開催される。

演目ならびに出演者は次のとおり。喜多流能「経政」鳥手(喜多長世ほか)、観世流能「杜若」恋之舞(観世元正ほか)、宝生流能「風」(宝生英雄ほか)大倉流能「鶴舞」(茂山千作、茂山千五郎)

五流能「金春流・高橋流・金剛流・広田流」喜多流・大島久見、観世流・藤井久雄、宝生流・辰巳孝主、神戸市(神戸文化ホール)後援。朝日新聞社、能楽協会神戸支部。

午前十一時開演。神戸文化ホール(大)は神戸市中央区楠町四丁目2-2、電話〇七八(三五)三五三五番。

入場券S・五千円、A・四千円、B・三千円、学生千円。神戸、大阪、梅田、西宮北口の主要アレイガイドで発売中。

問い合わせ先TEL〇七八(三五)三五三五、神戸文化ホール事業課。

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

[12月]

13日(土) 観世土曜定期能 (有料) (番組③面)

14日(日) 豊泉会能 (有料) (番組④面)

21日(日) 青少年のための芸術劇場 (有料)

[56年1月]

3日(土) 能楽協会名古屋支部開初式 (関係者のみ)

7日(水) 学生能と狂言の会 (来場歓迎) (番組①面)

15日(祝) 名古屋清韻会能 (来場歓迎) (番組①面)

25日(日) 青陽会定期能 (有料) (番組③面)

[2月]

1日(日) 宝生会定式能 (有料)

8日(日) 観世会定式能 (有料)

14日(土) 観世九草会定期能 (有料)

22日(日) 熱田紳士能 (来場歓迎)

[3月]

1日(日) 吉翠会大会 (来場歓迎)

8日(日) 大蔵狂言会 (来場歓迎)

14日(土) 観世土曜定期能 (有料)

15日(日) 梅道会定期能楽会 (有料)

21日(土) 観世流学生能 (来場歓迎)

22日(日) 泉楽会大会 (来場歓迎)

(演能変更の節はご了承下さい)

第二十五回 学生能と狂言の会

昭和五十六年一月七日(水)午前九時半 熱田神宮能楽殿

観世流 賀茂 茂子 (南山大学)
宝生流 須磨源氏 (金城学院大学)
宝生流 右近 (愛知県立大学)
宝生流 小袖曾我 (愛知教育大学)
金剛流 敦盛 (岐阜女子短期大学)
宝生流 二人老 (金城学院大学)
観世流 鶴亀 (南山大学)
金剛流 班女 (福山女学院大学)
和泉流 青葉煉り (金城学院大学)
宝生流 船弁慶 (名古屋女子短期大学)
観世流 玄象 (名古屋大学)
金春流 鶴飼 (愛知大学)

名古屋清韻会能

昭和五十六年一月十五日(祭)午前十時始 熱田神宮能楽殿

高砂 高田 武雄 池田 忠三
待遊 高田 武雄 加野昭二 池田 修二
番外仕舞 近藤 幸江 斎藤 信隆
東 北 杉村 竹翠 殿島 修二
鞍馬 水藤 元三 水田 嘉夫
トモ 加野昭二 高橋 宗司 今村 嘉男
小 高橋 宗司 鈴木 明 小川 貞三
竹 独 吟 佐治摩里子 地謡 高田 修二
雲 林 舞 後藤 幸三 地謡 今村 嘉男
羽 衣 舞 谷口 寛子 地謡 今村 嘉男
羽 衣 舞 谷口 寛子 地謡 今村 嘉男
二 丸 木村美津子 地謡 今村 嘉男

乱

奥村 久枝 西村 欽也 河村総一郎
後見 殿島 修二 地謡 加野昭二
大槻 秀夫 地謡 加野昭二
長谷川 実 地謡 加野昭二

三 知 輪 神原富貴子
鳥 御牧 紀代 地謡 高田 修二
宮 殿島 満里子 地謡 高田 修二
野 城 奥田 薫 地謡 高田 修二

卷 絹 古井 佐季 吉田 定男
若 池田 忠三 河村総一郎
萬 鬼頭貴代子 吉田 定男
鼓 高田 修二 後藤 幸一
之 高田 修二 高田 修二
之 高田 修二 高田 修二

清 經 富士道周明 山田 亮一
法師 守部 啓子 山田 亮一
女 花 殿島 博子 山田 亮一
天 鼓 渡辺 節子 福井啓次郎
潘シキ 福井啓次郎 藤田 昭彦

祝言 鶴 龜 大槻 秀夫 鬼頭喜太郎
主 名古屋清韻会
捕 大槻 秀夫

きして教えられた。同氏は出演者
の一人(当時豊三郎、翁の節に)
ビュッシー)を友人宅で初めてき
いて(レコード)、こういう音楽
を祈りするばかりです。
昭和六年には数多い演能記録を残
してきた眞服町能楽堂から布池能
(十・二八、H)

11 16 30 12 7 14 21 28 11 16 23 30 12 7 14 21 28 11

「近々集りましょう」と笑い合っ
て別れた。時々集る五人の会のこと
である。それが月が経って幽明
を異にしうとは誰が思ったであ
らう。

春夏秋冬 || 秋、藤田六郎兵衛氏他界 ||

野村広二

「近々集りましょう」と笑い合っ
て別れた。時々集る五人の会のこと
である。それが月が経って幽明
を異にしうとは誰が思ったであ
らう。

秋は藤田六郎兵衛氏の逝去(十
月)野村四兄弟が心を合わせて結
束の固きを見せた野村万蔵追善狂
言会(九月)名古屋と縁の深い和
泉流、その歴代宗家追善狂言会
(十一月)が大きな話題である。

英のち九郎、信守井政教)。森田
光風氏の一管・九様乱曲も出た。
狂言は腰折(二代井上菊次郎・松
次郎ほか共同社)。先々代六郎兵
衛・先代清兵衛(八世・九世)追
善能であった。翌十五年卒都婆小
町(故橋岡久太郎・ウキ歌・豊嶋
之助、親世左近追善能)を吹く。
老女物の始めであろう。その後の
布池能楽堂の舞台、終戦直後から
転々と舞台を変えた時代、それか
ら今の熱田能楽殿と、同家代々の
名古屋での出動が主であり、名人
・上手のシテは皆藤田さんの笛で
舞った。大正十四年頃の呉服町の
舞台から何回位笛を持たれたであ
らう。

追叙
故藤田六郎兵衛氏に
敷五等双光旭日章

能楽の友社では、さる十一月三
十日、南山城、宇治、洛南の謡曲
名所めぐり旅行会を催しました。
当日は前日の雨もあがり好日和
に恵まれ五十二人が参加、午前八
時愛知文化講堂前を出発、東名阪
高速道路を経て伊賀上野から国道
百六十三号線に入り、車中で彼々
を決めて謡曲をうたいながら木津
川の渓流を左右に、笠置山麓を経
て木津に到着、平重衛卿の墓をま
つる安福寺(長堂)に参拝、同寺

尾州家お抱え(代々)のことなど
しるされている。第三者が待にく
わしい。

秋の南山城を訪ねる
能楽の友社ツアー
謡曲名所めぐり

昭和56年新春 テレビ放送番組

●十二月三十一日(水) 午前八時三十分	喜多流能「弱法師」友枝喜久夫、ウキ松本謙三
●一月一日(祝) 午前九時	親世流能「翁」親世元正、親世清和、野村万之丞ほか
●一月二日(金) 午前九時	狂言「舟渡舞」三宅藤九郎、三宅右近、和泉元秀
●一月三日(土) 午前九時	「鷄聲」茂山千作、茂山忠三郎
●一月三日(土) 午前九時	「金春流能「羽衣」桜間道雄、ウキ宝生藤一
●一月一日(祝) 午前七時	「NHKラジオ第2放送」新春五流謡曲・東西狂言 再放送午後三時
●一月二日(金) 午前七時	「竹生島」金春信高、宝生流「東北」宝生英雄
●一月二日(金) 午前七時	喜多流「鞍馬天狗」喜多実
●一月三日(土) 午前七時	「薩摩守」野村万作「秀句集」善竹忠一郎

稲荷に参拝、本殿にて祝詞の奏上
御神酒を頂いて折願、すでに夕間
となつた京都南インターチェンジ
から一路名神高速道路で午後七時
半帰宅しました。
なお今回の旅行には同人として
杉村竹翠師が同行されました。
参拝の各寺社、関係町村団体に
お世話になりましたことを紙上を
かりてお礼申し上げます。
(写真)◎宇治平重衛卿にて記念
撮影◎瑞の芝の遺跡



蔵元直営
酒藏白龍
白龍本店 名古屋市中区深田町
電話 911-7572

観世流・金剛流
宗家本行元
檜書店
〒101 東京都千代田区神田小川町2-1 電話(291) 2488-9
〒604 京都市中京区二条通数屋町東入 電話(231) 1990

中華料理
桃源亭
御宴会・御集會・御商談等には
是非御座敷を御利用下さい
中区栄三丁目29(松坂屋南) 電話 241-2938・6081
支店 名鉄百貨店9階 のれん茶屋

外科・せいけい外科・皮膚、泌尿器科
東山整形外科
TEL 781-7835
東山公園駅下車 オークランドビル2F

流唱歌刊行会(T.E.L.57-1-5 763)
良日...
のぼせて好演、さすが東京の狂
言第一人者と感歎させた。前日京
門、学生券(ク)一、五〇〇円
〔有料〕
主催 青
後援 中
日 陽
新
開 会

56年度 観世会定式能

日曜定式能五回、土曜定式能四回

名古屋観世会の昭和五十六年度定式能は、日曜定式能五回、土曜定式能四回の演能が行なわれる。なお例年のように七月二十六日(日)に夏の素謡会が予定されている。

それぞれの定式能の日程および演能予定は次のとおり。

〔日曜定式能〕

●第一回 二月八日(日) 十二時半始

老松 藤井 完治
観世 元正
片山博太郎
藤井 久雄

●第二回 三月十四日(土) 一時始

海士 片山慶次郎
観世 元正
久田 徹二

●第三回 五月二十三日(土) 一時始

葛城 大和舞
野村 四郎

●第四回 十二月十二日(土) 一時始

船井 慶
観世 清和

●第五回 十一月八日(日) 十二時半始

須磨源氏 山本 勝一
観世 元正
藤井 久雄

●第六回 十一月八日(日) 十二時半始

成祖父江修一
藤井 久雄
観世 元正

●第七回 十一月八日(日) 十二時半始

松風 梅田 邦久
上田 照也
井上 嘉久

●第八回 十一月八日(日) 十二時半始

車 備 武田 邦弘
山本 勝一
藤井 久雄

●第九回 十一月八日(日) 十二時半始

班女 梅若六之丞
松山 華親
須磨 修二

●第十回 十一月八日(日) 十二時半始

花 菅 武田 邦弘
山本 真賀
志原 志房

西田三好能評集

発行 繪書店 重版が完成

中日五流能、北陸中日能、東京五流能などの企画、運営の演出家であり、能評活動をつづける西田三好氏著による「西田三好能評集」五流小書演目「は、昨年四月発行され、本紙(五四年四月号)で紹介したが、A5判、六百頁におよぶ能評の集大成として貴重なものであり、発刊以来きわめて好評で品切れとなっていたが、このほど重版が完成、期待にこたえることになった。

発行は繪書店、定価六千円。

魂魄

垂井 勉
挿絵 二井 栄逸

ペーターベンの作品一三五へ長調は「最後のカルテット」と呼ばれ、彼の遺作である。その自筆の楽符には、四葉草冒頭の余白に、「ようやく遂に決心」と書きこまれ、続いて「こうあらねばならぬか」「こうあらねばならぬ」と書かれている。

このことばによって第四楽章の音楽が何を表現しようとし、我々はどう聴かねばならないかというような解釈をさしはさむには、この作品自体は余りに純粋であり、終始極度の密度に凝縮されている。私にはこの作品全体がこのことばに示されるような人間存在の内奥をこの上もなく透徹した鏡に照らし出されているように思われるのである。

人は常に此世に生き続けている限り、「ようやく遂に決心」と自分自身のあり方に決断を迫られ、そうするうちに常に「こうあらねばならぬか」「こうあらねばならぬ」と自問自答を繰り返しながら生き続けているのではなからうか。これはペーターベン自身の偽らざる心情であったに違いない。

このカルテットが彼の最後の作品となったけれども、果して彼は天国に召された後も、永久に安らぎを得たであろうか。私はよそよそな疑念にとりつかれたのである。生涯を通じて最も厳しく敬虔な宗教的思考の持主であった彼は、おそらく天国に召されたであろう。しかしあくまで真摯な彼の芸術的魂は、なお人間の運命を縛っているのではなからうか。

彼の晩年の大作「ミサソレミヌス」を聴いていると、我々を限りなく浄福の世界に引きあげてくれる。と同時に、それはまた人間のな、あくまで人間的な美的感動でもある。また彼の後期における一連のピアノソナタに耳を傾けると、作品一〇のソナタには清澄そのものの中に淡白なまでに簡潔な楽想を思わせるが、次の作品一一番のソナタの最初の導入部は、あの中期のダイナミックな旋律を連想させられるのは私だけであろうか。これはその作品一〇番変イ長調演奏はケンブである。次は一一番ハ短調で演奏は同じケンブ。かの芭蕉は晩年に至って「藪み」の境地に達しながら、彼が辞世として遺したのは、有名な「旅に病んで夢は枯野を馳けめぐる」という絶唱に似た一句である。

このように芸術家の魂は常に烈しく揺れ動きながら、人生の究極に向ってあくまでも登りつめてゆく。そしてその生命が魂魄に返るともなほ、うつつ世での生きざまの象徴を私の心の眼に映る思いがするのである。

能に観る「野宮」では、六条御息所のまぼろしが、毎と九月七日になるこのうらめれた野宮の小柴垣の陰に現れて、光源氏と歌を交わした昔をしのび、その懐旧に耽りながらも「身に染む色の消え返り思へば古を何と思ふの草衣来てしもあらぬ假の世に往き還るこそ恨なれ」と亡き後までもこの世に想いを残すのが身の宿世をしみじみ述懐しつつ、黒木の鳥居の陰に消え去る。

後シテになって、更に、長絹舞の大口という最も優美な姿で網代車に乗って現れるが、昔大勢の面前ではぶかじめを受けた加茂の祭の車争いの様に舞い乱れるが、また思い直して月下に、もともと静謐な舞を舞い最後に「火宅の門をやいでゆらん。火宅。」(流儀によつて火宅の門、火宅の門を)と止めて、解脱寸前、なおしばしばゆとう姿を舞台にとどめて、深い余韻を残した儘一曲は終る。

このように夢幻能の主人公たちは、最後に救われた者も救われざる者も、今なお心の救いと慰いと相克を観る者の深い内面に投げかけているのである。「魂は善所に赴けども魂は修羅道に残つてはばし苦しむを受くるなり」とは朝長の一節であるが、この魂といふ字は辞書によると「此世にどまる」という陰の霊魂」と記されているが、それを救われるべくしてなお救われざる人間性の象徴と観るのには余りに現在の解釈であるか。

我国古来からの祖先のみ霊を祀る風習が、除陽師、巫女など死者の霊を呼びだす呪術的職業に伝承されてきた民衆の信仰的通信が、能作者によつて夢幻能にまで純化し、救われざる魂を普遍的な人間性の象徴にまで高められたものと見たのである。(筆者は和歌山市居住)



年賀広告御案内

本紙では恒例により一月号に年賀広告を掲載いたしますのでお申し込み下さい。締切り十二月二十三日まで。

名古屋銘菓 きよめ餅

熱田神宮東門前 株式会社きよめ餅総本家 TEL681-6161

城

割烹・小料理

- 熱田神宮能楽殿喫茶部
- 住吉小路(中区栄3-10) 電話 241-0248
- 喫茶・グリル(愛労研地下ビル) 電話 731-1128

目進堂

正しいメガネでしあわせを……

●駐車場完備 名古屋市西区那古野2-20-23(円頓寺本町) 451 TEL (571) 6181-3

謹賀新年

中日文化センター特別教室

名古屋橋岡会